
ISとマフィアと護衛と

黒猫の棺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISとマフィアと護衛と

【Nコード】

N2217X

【作者名】

黒猫の棺

【あらすじ】

高校1年の終了式後、沢田綱吉と、獄寺隼人、山本武、クローム髑髏の4人は9代目からの依頼でIS学園に転校することに・・・

ISと家庭教師ヒットマンリボンのクロス作品。ヒロインは楯無です。

更新は早くないかもしれませんがよろしく願います

プロローグ（前書き）

はじめまして。黒猫の棺です。文才がないのこの作品が始めての投稿ですのでしたらないところが多々あると思いますがよろしくお願ひします。

プロローグ

「9代目からの頼みってなんだろう？」

「行けば解りますよ、10代目」

高校1年の終了式後、俺こと沢田綱吉は隼人と武と一緒に市内にあるホテルに向かっていた。

そこはボンゴレファミリーが日本で経営しているホテルの1つで日本でも3本の指に入るくらい的高级ホテルであった。

何故そこに向かっているのかというと、今日は野球部の練習が休みだったので、隼人と武と一緒に学校から家に帰ろうとしたら校門を出たら9代目の守護者たちが待っていた。なんでも9代目が俺たちに頼みたいことがあるから来てほしいとのことだった。中学2年のときに継承式を行ってから忙しくて（ボスとして必要なことを毎日ドS家庭教師にしごかれていたため）会うことがなかったため、会えることへの嬉しさと9代目の頼みに関する不安が入り混じった気持ちでいっぱいだった。

そんな気持ちを胸に9代目の待つホテルに到着した。

「こちらです。沢田様」

9代目の守護者に連れてこられた部屋は最上階のスイートルームだった。

「おお、みんなよく来てくれたね」

俺たちが部屋に入るといつもの茶色いスーツに身を包んだ9代目が待っていた。

「9代目、頼みたいことっていったいなんですか？」

「君たちはISを知っているかな？」

インフィニットストラトス

ISは10数年前に篠ノ之束によって開発されたパスワード・スーツのことである。本来は」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツであったが、白騎士事件によって圧倒的な性能が証明され、軍事転用が始まり、今では、アラスカ条約によって軍事転用が禁止され、競技種目として活用されている。

「知ってますけどそれがなにか？」

「この写真をみてほしい」

9代目が差し出した写真には1人の男性が写っていた。

「こいつは確か織斑一夏ですよ？確か唯一ISを動かせる男とかでいま騒がれている。そいつがどうかしたんですか？」

「この子は今、唯一男性でISを動かせるということで世界中の企業や組織から狙われている。その中にはマフィアもいるかもしれないという情報があつてね。念のため君たちに彼の護衛を頼みたいんだ。彼は第2回のモンド・グロツソで誘拐され過去とがある。まあそのときはISを動かせることはわかっていなかったがね。彼はまだ自分の身を1人で守れるほど強くない。周りにも被害を出すかも

しないしね」

「しかし、こいつが通うのはIS学園でしょ？ISの動かせない俺らじゃ通えないんじゃないすか？」

山本の言うとおりだった。ISは基本女性にしか扱えない。そしてISの操縦技術や基本知識を学ぶための学校がIS学園である。つまりIS学園に通うにはISに乗れなくては意味がないのだ。

「心配要らないよ。君たちにはISを動かせる適性があることが判明しているからね」

9代目の言葉を聞いた瞬間俺たちは言葉を疑った。自分たちにISを動かせる適性があるとは思わなかったからである。ちなみに9代目の話では守護者全員に適正があつたらしいが、恭弥には、興味がないと断られたらしい。骸にはマフィアに手を貸すのはゴメンだといわれ、ランボはまだ小学生だから却下。了平は騒がしくて護衛には向かないと判断されたため俺たちだけが呼ばれたらしい。ちなみにクロームには先にこのことを伝え、了承を得ているらしい。

「この頼みを聞いてくれるのであれば今通っている並森高校から転校してもらう事になるから無理にとはいわない。よく考えて決めるはしい。」

しかし、この話を聞いたときから俺の答えは決まっていた。

「9代目。この話、引き受けます」

こうして俺たちはIS学園に通うことになった

プロローグ（後書き）

ちなみに獄寺と山本はツナの意味に従って転校を決意したという設定です。

転校しない守護者の登場は結構後のほうになるかも・・・

ツナたちはリングとボックスを使ったほうが強いけどあまりその力を使うのは良くないという理由から普段はISに乗り、それでも勝てない場合のみ使うことにしているという設定です。

ご指摘のほうが多いとは思いますが感想等お待ちしております

第1話（前書き）

更新が遅くなるとか言っておきながらそうでもなかった（汗）。
少しでも楽しんでいただければ幸いです

第1話

（これは・・・想像以上につらい）

現在の場所はIS学園1年1組。その教室の中で周りの生徒の注意を集めている生徒がいる。

その生徒の名前は織斑一夏。藍越学園とIS学園の試験会場を間違えてしまい、しかもそこでISを起動させてしまったがために政府の命令でIS学園に通うことになってしまった、ISを動かせる男性の中で唯一名前の知れた少年である。

当然周りの生徒は見知らぬ女性とばかり。唯一の知り合いといえば幼馴染の篠ノ之箒であるが、その彼女は一夏と視線を合わせたくないのかそつぱをむいてしまっている。

（それが6年ぶりに再会した幼馴染にとる態度かよ・・・）

などという愚痴を思っていると1人の女性が入ってきた。

「みなさん。IS学園入学おめでとう。このクラスの副担任の山田真耶です、よろしく」

一夏はもちろん周りの生徒の反応はなかった。おそらくみんな同じことを思っているだろう。

（この人、本当に教師か・・・？）

その反応を取るのも無理はないだろう。見た目が自分たちと同じくらいの人が『自分が教師です！』なんていっても説得力がないから

である。

「え、え〜とそれではみんなに自己紹介をしてほしいと思います・・・。名前の順で『あ』の人からお願いしますね・・・」

みんなからの反応がないのがそんなにショックだったのか涙目になりながら山田先生が言った。

しかし一夏はまったく別のことを考えていた。自分の周りの席が空いているのだ。一夏は1番前の真ん中の席なので自分の左右の席と後ろの席、そしてその隣の席が空いているのだ。『新学期早々遅刻か』などと考えてるうちに自分の番が回ってきた。

「え、え〜と・・・お、織斑一夏です。ISに関しては初心者同然ですがよろしく」

という無難な挨拶を済ませた。

全員の自己紹介が終わったところで見知った顔の女性が入ってきた。

「ち、千冬姉!？」

「織斑先生だ馬鹿者」

1月ぶりにあった実の姉の理不尽な出席簿アタックをくらって一夏が悶絶している間に教室に入ってきた女性、織斑千冬が自己紹介を始めた。

第1回モンド・グロッソ優勝者が担任ということで一部の生徒を除き歓声を上げた。

それを一喝して静めると唐突に

「このクラスに転校生が来ることになった」

と言い出した。

このことにクラスの全員は疑問に思った。一年生の初日に転校生などという話が聞いたことがなかったからである。

「諸事情により急遽この学園に転校することになった生徒で学園に関する書類を書いてもらっていたのでクラスに顔を出すのが遅れてしまった。人数は4人だ。最初に言っておくが騒ぐなよ？」

全員が？マークを浮かべていると千冬が転校生を招きいれた。

「それでは入ってきてくれ」

千冬がそういうとドアを開けて転校生が入ってきた。そしてクラスメイト全員が啞然としていた。なぜなら

「お・・・男？」

クラスの誰かがそう漏らした。そう、男なのだ。転入生は3人の男子と1人の女子だったのだ。

男子は、1人目は中性的な顔立ちに茶髪をつんつん頭が特徴の、2人目が不良のような鋭い目つきと銀髪が特徴の、そして3人目が短髪黒髪に明るい雰囲気の特徴の生徒であった。

そして女子のほうは右目の眼帯とどこかはかなげな雰囲気の特徴だった。

わずかな静寂の後

「「「「「きゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！！！」」」」」

その静寂がうそのように爆発した。

「う、嘘！？男子！？しかも3人も！！」

「銀髪と黒髪の子すつごくかっこいい！！」

「茶髪の子かわい〜！！」

と騒いでいると

「いい加減黙らんか貴様ら！！！！」

再び千冬の一喝で静まった。

「この4人はほんの3週間前に適正があることが判明したため、急遽この学園に転校することとなった。各自自己紹介を」

「え〜と、沢田綱吉です。ISの適正があることがわかって急遽この学園に転校することになりました。一応みんなよりは1つ年が上ですが気軽に話しかけてくれるとうれしいです。よろしく願います。」

前ならばここまで物怖じせずには話すことはできなかったが、DS家庭教師の地獄の特訓により普通にしゃべれるようになった。

「獄寺隼人だ」

「俺は山本武ってんだ。よろしくな」

「・・・クローム髑髏。よろしく」

「各々自己紹介がすんだのなら席に着け！」

ツナたちは言われたとおり席に着いた。学園側の配慮で男子の席は近くなっていた。

「え」と、織斑一夏君だよね。よろしく」

「一夏でいいすよ。え」と沢田先輩って呼べばいいですか？」

「俺のこともツナでいいよ。同じ学年なんだし。他の3人のことも普通に先輩はつけなくていいから」

「そうそう。俺のことも武って呼んでくれていいぜ」

「俺のことは気安く呼ぶんじゃねえぞ」

「隼人。いいじゃないそれくらい」

「10代目がそうおっしゃるのなら」

「そっちの先輩はなんて呼べばいいですか？」

「・・・クロームで」

「じゃあ、ツナに武に隼人にクローム、これからよろしく」

「そろそろ授業を始めるぞ。静かにしろ！」

こうしてISS学園での1日が始まった。

第1話（後書き）

な、何とか学校行く前に仕上げられた・・・
あいかわらずの駄文ですが少しでも楽しんでいただけたらうれしい
です

第2話

1時限目の授業終了後、一夏はツナたちと雑談していた。

「いやゝ、しかし助かったよ。男子が俺だけだと思っていたからどうしようかと思った。ツナたちは俺みたいにニユースとかになっっていなかったけど何でだ？」

「俺たちは一夏と違って実際に動かしていないんだ。一夏が動かせたから他にも動かせる男子がいるんじゃないかって、政府が男子にも適正調査したら俺たちに適正があることがわかったってわけ。適正があるってわかったの本当に数週間前だったし、今騒がれたら入学が遅れるって判断だったんだと思う。」

「そっかゝ。他の3人はツナとは知り合いなのか？ずいぶん親しもうだったけど・・・」

「知り合いっつゝか友達だな。同じ高校通ってたし、中学も一緒だったしな」

「・・・私は中学は違ってたけどそのころから友達だったし・・・。ボ、綱吉さんとはそのころから仲良くしてもらってたから・・・」

「そっか。ところで「ちよつといいか？」・・・え？」

一夏が何か話そうとしたら1人の女子生徒が話しかけてきた。長い髪をポニーテールに纏め上げた気の強そうな生徒だった。

「・・・第？」

「少し話がある。ついて来い」

有無を言わず一夏のことを連れて行こうとしたとき獄寺が声を張り上げた。

「てめー！今こいつは10代目と話してんだ。すっこんでろー！」

「な、なんだとー！！私は一夏と話があるんだ。お前たちには関係ない！」

「なんだと・・・「隼人」！10代目・・・」

「俺のことはいいから。えっと、篠ノ之さんでいいのかな？俺たちはいいから一夏と話があるんならどうぞ」

「・・・10代目がそうおっしゃるのなら」

「貴様！！あれだけ言っというて「ほら、行くぞ箒。悪いなツナ」っ
おい一夏ー！！」

箒と獄寺が口げんかになりそうになる前に一夏が箒のことを連れて教室の外に出て行った。

「山本」

「了解」

ツナの声にしたがって、山本が一夏たちの後を追うように教室から出て行った。ツナたちがココに来た理由は一夏の護衛なので大人数

で行くと怪しまれるのでツナは山本を行かせることにした。

そのとき・・・

「あの・・・すみません」

ツナたちに話しかけてきたのは金髪碧眼の少し身長の小さめの女生徒だった。

「えっと、俺に何か用かな？」

「間違つてたらごめんなさい。・・・ボンゴレ10代目様ですよね？」

その女性とは周りには聞こえないよう、小声で話しかけてきた。ボンゴレ10代目・・・その単語を聞いた瞬間ツナたちの表情は強張った。

「君はいつたい・・・」

「あ、すみません申し遅れました。私はヴェル・オルクと申します。イタリアの代表候補生を勤めさせていただいています。」

ヴェル・オルク。その名前は事前に9代目から聞かされていた。

「あ、君がそうだったんだ。それはそうと様って？」

「私は1年ほど前、マフィア同士の抗争に巻き込まれた家族を10代目様に救われたことがあるんです。そんな方と呼ば捨てにはできません」

1年前はマフィア同士の抗争が特に激しく、ツナたちは何度も学校を欠席してはその抗争を収めるために介入していた。そして、多くの市民を守るために戦っていた。ヴェルはそんな家族を守られたものの1人だった。

「・・・理由はわかったけど様付けはやめてもらえないかな？言われなれていないし。ツナって呼んでくれてかまわないから」

「わかりました。ですが流石に呼び捨てにはできないのでツナさんと呼んでもいいですか？」

「それでいいよ」

「わかりました。私のことはヴェルと呼んでください。」

「わかったよ、ヴェル」

「それでは、何か困ったことがあればいつでも呼んでください。」

「ありがとう」

そう言ったところで2限目の開始のチャイムが鳴り、ヴェルは自分の席に戻っていった。一夏と箒が少し遅れて入ってきたが、2限目が千冬の授業だったため出席簿アタックをくらっていた。

そして2間目が終わり再び雑談していると、1人の女生徒が割って入ってきた。

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

「へ？」

「うん？」

「あ？」

「え？」

いきなり話しかけられたので各々が驚いたような返事を返した。その返事が気に食わなかったのか

「まあ！何ですのそのお返事は！！私に話しかけられるだけでも光栄なことなのだからそれ相応の態度があるのではなくて？」

女生徒はそんなことを言うがツナたちはその女生徒が誰なのかわかっていなかった。一夏は自分のことで精一杯だったし、ツナたちは全員の自己紹介が終わった後に教室に入ってきたのでその女生徒が誰なのかわからないのはしかたのないことだった。なので、代表して一夏が

「すまん。俺たち君が誰なのかわからないから・・・」

そう言うとその女生徒は信じられないといった表情をうかべながら

「まあ！わたくしの事を知らない！？このセシリア・オルコットを！？イギリス代表候補生にして学年主席のこのわたくしを！！」

それに対して一夏は

「すまん。代表候補生ってなんだ？」

それを聞いた周りの生徒はみなずっこけていた。セシリア本人も驚愕とあきれが半分半分といった表情で

「し、信じられせんわ！日本の男性というのはココまで知識に乏しいものなのですか！？」

そんなことを叫んでいたら獄寺が

「うつせーぞ。いい加減黙れメス豚が」

と爆弾発言をしてくれた。それを聞いたセシリアは

「な、なんですって！？誰がメス豚ですって！？」

「お前以外の誰がいる？お前のくだらない発言に付き合っているほど暇じゃねえんだ。すっこんでろ」

「な！？あなたって人は・・・」

セシリアが何かを言おうとした瞬間3間目の開始のチャイムが鳴り響いた。

「く！？後でまた来ます。おぼえてらっしゃい！！」

と言ってセシリアも自分の席に戻っていった。ちなみにツナが獄寺の発言について何も言わなかったのは、胃がきりきりするのを抑え

るのに必死だったからだとか・・・

3限目の授業が始める前に千冬が

「そういえば再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければならなかったな。クラス代表者とは対抗戦だけでなく、生徒回の会議や委員会の出席など、まあクラス長と考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

そう言い終わると一人の女生徒が

「はい！織斑君を推薦します」

「へ！？」

一夏が驚いているとヴェルが

「私はツナさんを推薦します」

と言いだした。すると獄寺も

「俺も10代目を推薦する」

「俺もツナでいいぜ」

「・・・私も」

とツナの守護者全員がツナのことを推薦した。

「ま、待ってくれ！俺はやるなんて一言も・・・」

「俺もそういうのは・・・」

一夏とツナが反論しようとしたとき、

「ま、待ってください！そんなの納得がいきませんわー！」

と1人の女生徒が異議を申し立ててきた。言うまでもなくセシリアである。

「男子がクラス代表なんていい恥さらしですわー！このわたくしにそんな屈辱を1年間味わえとでもおっしゃるのですか！？特に！」

そついうとセシリアはツナのことを指差して

「あなたのような方がクラス代表になることだけは許しませんわー！
！」

「てめえ！10代目にむかってなんて口きいてやがるー！」

そついつて獄寺が立ち上がると今度は獄寺のことを指差して

「あなたのような人間に慕われている人間のことですわ！きっとあなたのような、いえ！あなた以上のクズに決まって・・・」

セシリアはそれ以上何も言えなかった。

なぜなら、獄寺はダイナマイトを、山本は時雨金時を、クロームは三叉槍を、それぞれセシリアに突き立てていたからである。

セシリアは驚きに固まり、ツナを除く千冬や山田先生を含めたクラス全員はそのことに反応できずに驚いていた。

「てめえ……いま10代目のことをなんつった？」

獄寺が殺気を放ちつつセシリアに尋ねた。

「悪いがツナのことを悪く言うやつは許せなくてな……」

「……今すぐその言葉を撤回して」

「オルコットさん。今すぐツナさんに謝って」

普段温厚そうな山本やクロームですら怒っていた。そして、いち早く我にかえったヴェルもセシリアにツナへの謝罪を求め立ち上がった。そんな中ツナが

「隼人、武、クローム、ヴェル。席について」

と指示を出した。

「しかし10代目っ「いいから」……わかりました」

ツナの指示に従い、4人は席に着いた。そして、今も固まっているセシリアに対し

「俺の悪口を言うのはかまわないよ。言われることには慣れているからね。……だけど俺の友達のことを侮辱するのは許さない」

と普段頼りなさげな雰囲気をなくしたツナが言い放った。

その言葉で我にかえったセシリアが

「・・・いいですね。そこまで言うのでしたら決闘ですね!」

と言ってきた。

「・・・ってちょっと待て! ツナってまだIS動かしたことないんじゃない?」

「あら、そうですね? そしたらわたくしが勝つことは決定していますわね。今なら土下座すれば許して差し上げますわよ?」

「言いよ別に。俺は君に負ける気がしない。自分の立場もわかっていないあなたには・・・」

「なんですって・・・」

ツナの言葉にセシリアが言い返そうとしたら

「そこまでだ2人とも」

千冬が割って入ってきた。

「クラス代表は織斑、沢田、オルコットの3人の中から決める。初戦は織斑対オルコット。その勝者が沢田と戦ってもらう。場所は第3アリーナ、1週間後に執り行う。文句はないな?」

「わかりました」

「わかりましたわ」

「・・・辞退という選択は」

「ないに決まっているだろ馬鹿者」

と一夏は本日3度目の出席簿アタックをくらっていた。

第2話（後書き）

・ ・ ・ なんか文がめちゃくちゃになってしまった気がする（汗）
感想、ご指摘待ってます

第3話（前書き）

更新遅いつていつときながらもう4話目・・・
おそらく10月はこのままのペースを保てそう・・・
それでは駄文ですがよろしくお願いします。

第3話

昼休み、一夏たちは昼食をとるために食堂へ向かっていた。

4限目の授業のとき、実の姉がISの生みの親である篠ノ之束だと判明し、大騒ぎになったのを

「あの人は関係ない!!」

と怒鳴ってしまい、クラスから孤立しかけていた篤も誘っていた。

「しかし、代表候補生と試合なんてどうするんだ？俺は試験会場のときと、教官との試験のときの2回しか乗ってないし、ツナにいたっては1回も乗ったことないんだろ？」

「確かに1回も乗ったことはないけど友達をクズ呼ばわりされて黙っていられるほど人間できてないよ」

慌てる一夏に対し、ツナはかなり落ち着いていた。この程度でうろたえていたらマフィア最強と謳われるボンゴレファミリーのボスなど到底務まらない。

「とりあえず訓練機の申請をしようとしたら無理だったから試合までできる限りのことをやるだけだよ」

「俺はどうすっかな。そうだ篤、お前がISについて教えてくれよ」

「わ、私がか!？」

「千冬姉に教わってもいいんだけど千冬姉は忙しいだろうし身内
びいきって思われても困るしな」

「しかし私は「ねえ、ちょっといいかな」」

篤が何か言いかけたとき、見知らぬ女生徒に声をかけられた。リボ
ンの色からしておそらく上級生だろう

「君たちがうわさの男子生徒君達でしょ？イギリスの代表候補生と
試合することになったっていう」

「そうですけどそれがなにか？」

「君達ってISの機動時間ってどのくらい？」

「俺は30分くらいだと・・・」

「俺はまだ1回も乗ってないです」

一夏とツナが答えたら先輩は驚いていた。

「それじゃあ代表候補生には勝てないよ。代表候補生は機動時間3
桁はいつてるから。ねえ、よかったら私がISについて教えてあげ
よっか？」

「助かります。それじゃあ「結構です。私が教えることになってい
ますから」・・・え？」

先輩に頼もうとしたところ横から篤が割って入ってきた。

「でも、あなたも1年生でしょ？そしたら上級生の私が教えたほうが「私は！篠ノ之束の妹ですから」っ！？」

篠ノ之束の名が出た瞬間、先輩が驚いた顔をしていた。ISの生みの親の妹が入学しているとは知らなかったのだろう。分が悪いと判断したのか先輩は去っていった。

「箒お前が教えてくれるのか？あんまり乗り気じゃないみたいだったけど・・・」

「うるさい！・・・それより剣道の腕がなまってないか確かめてやる。放課後剣道場に来い」

「え・・・それよりISのことを「確かめてやる」・・・わかったよ」

この出来事から一課の放課後のスケジュールが決まった。

そして放課後

「・・・どういうことだ？」

「どういふことっていわれても・・・」

「なぜ！どうしてココまで弱くなっている！？」

場所は剣道場、一夏と箒は試合形式の模擬戦をやっていた。ツナた

ちはその試合を見学していた。

3戦して一夏は1本もとることができずにいた。

「なんでつていわれても・・・」

「中学のときは何部に所属していた!？」

「部活には入ってなかったよ。ずっとバイトしてたから、やってる暇がなかったんだ」

「な!？あんなに打ち込んでいた剣道をそんな簡単に辞めたというのか!？」

「仕方ないだろ。千冬姉に負担かけたくなかったんだから」

一夏は、両親がいない代わりに自分のことを養ってくれている千冬にこれ以上負担をかけるのは申し訳ないと思い、中学のときは年齢を偽ってバイトをしていたのだ。そのため、剣道をやっている余裕がなくなってしまったのだ。

「・・・鍛えなおす」

「え・・・?」

「鍛えなおすといってるんだ!IS以前の問題だ!こんなんじゃあの女に勝てるわけないだろう」

そう怒鳴り散らす筈に一夏が困っていると

「まあ、しょうがねえんじゃねえか?」

今まで見守っていた山本が箒に声をかけた

「一夏にもいろいろ事情があつたんだからそんなに言わなくてもいいんじゃないか？」

「うるさい！部外者は引つ込んでろ！！」

「部外者はねえんじゃないか？一夏とは友達なんだし、このまま篠ノ之に任せると一夏をばこしかねーからな。氣にくわねーなら勝負して決めるか？お前が勝つたら俺たちは何も言わねー。けど俺が勝つたら俺が一夏の面倒見るからな」

「いいだろう。望むところだ！」

箒は再び面をつけ、山本と対峙する。しかし山本は防具をつけていなかった。

「おい！馬鹿にしているのか！？さつさと防具をつけろ！！」

「いいよ。防具なんて必要ない」

「お、おい。大丈夫なのか？箒は全国大会の優勝者だぞ」

一夏が慌てた様子でツナたちに尋ねた。しかし、ツナたちはまったく心配していなかった。

「大丈夫だよ、武なら」

「あんなやつに野球馬鹿が負けるはずねーよ」

「・・・雨の人なら大丈夫」

しかし筈からしたら自分のことを馬鹿にしているようにしか聞こえなかった。

「貴様ら馬鹿にして・・・！」

「いいから始めようぜ」

「じゃあ隼人。審判よろしく」

「わかりました。10代目」

獄寺が審判の立ち位置に立った。

「一本勝負だ。文句はないな」

「もちろん」

「さっさと始めろ！」

「それじゃ・・・はじめ！！」

「いやあああああ！！！」

開始の合図とともに筈が山本に向かって突っ込んできた。全国大会優勝者なだけあって、普通の人間に

だったらまともに反応できなかっただろう。そう、普通の人間だったなら・・・

「え・・・？」

箒には何が起こったのかわからなかった。目の前の山本の姿が消え、気がついたときには竹刀が弾き飛ばされていた。

「な・・・んだと」

「ほい、俺の勝ちでいいな？」

そついいながら山本は呆然とする箒の頭に竹刀をポンと置いた。

「なにが・・・起こったんだ？」

一夏にも何が起こったのかわからなかった。しかし、この場でわかっていなかったのは一夏と箒だけだった。

「簡単だよ。武も篠ノ之さんと同じように突っ込んでいっただけだよ。ただ、篠ノ之さんよりも速かっただけ」

ツナが説明するも、一夏にはそれが信じられなかった。全国大会優勝者の箒よりも速く踏み込むなんて並大抵の人間にはできない。

しかし、ツナたちにとってはこれは当然の結果だった。全国大会優勝者程度に負けていてはこれまでの、そしてこれからの命がけの戦いに勝ち残っていくことなんて不可能だからである。

「一夏の面倒は俺が見る。文句ないな」

「ふ、ふざけるな！もう一回だ！次こそは・・・」

「何度やっても結果は変わらないぜ」

「何故だ!？」

「俺とお前とじゃ剣の覚悟が違うからだ」

「ど、どういう意味だ!？」

「さあな。自分で考えな。一夏。練習は明日からでいいな？」

「あ、ああ。よろしく頼む」

「そんじゃ、行こうぜツナ、獄寺、クローム、一夏」

そういつていまだに山本の言葉の意味がわかっていない筈を残し、ツナたちは剣道場を後にした。

設定（前書き）

マフィアメンバーの強さがチート級な気が・・・

設定

沢田綱吉

年齢・・・16歳（高校1年）

専属ドS家庭教師であるリボーンからの地獄の特訓により、物怖じする性格が改善された。

市民を巻き込むマフィア同士の紛争への介入などの経験を経て原作よりもかなり強くなっている。

学力も少しは改善され山本と同じくらい。ただし英語は獄寺並に、イタリア語は日常会話程度なら楽にこなせる。命がけの戦闘を何度も経験してきたため原作よりも仲間を大切に作る気持ち強く、仲間を侮辱する人間には容赦しない。ISに乗ると死ぬ気化した状態に近づく。また、ファッション感覚でISに乗る人間を好ましく思っていない。

専用機・・・チエーリ（天空）

色はツナの死ぬ気の炎と同じオレンジ。手の部分がガントレットになっている。スラスター4基に加え、ガントレットにも小型スラスターを搭載した機体。高速戦闘に優れたISでその速度はISの中でも最速クラス。ただし、速度を重視したため、後付装備は存在しない。白式と同じように第一形態時にワンオフ・アビリティーを用できる。メイン武器のガントレットは死ぬ気の炎のようにエネルギーを飛ばすことも可能。エネルギーの大半を使用してしまいがバーナーも打てる。

ワンオフ・アビリティー・・・零地点突破・改

死ぬ気の炎ではなく相手のエネルギーを吸収して自分のエネルギーに変換できる。

ただし、ミサイルのような不純物が混じっていると吸収できない

白式とは違ってツナがもともと零地点突破・改を使えるのでそこま
で後付装備に影響はないけど速度を最速にしたため後付装備がな
くなったという設定です。

ツナと守護者の機体は第二形態時あたりに炎を使えるようにするつ
もりです。

死ぬ気の炎にするか、ただの炎にするかはまだ決まっていませんが・
・

とりあえず今回はツナの機体だけを紹介しました。
それではまた次回お会いしましょう

第4話（前書き）

今日感想を見たら一気に感想の数が増えていてテンションあがりまくっています。

これからも頑張るのでよろしく願います

第4話

その日の夜、ツナたちは山田先生に寮の部屋に案内してもらった。本来、1週間は自宅通いだっただけなのだが、思ったより早く部屋の調整が済んだため、今日から寮生活することになった。

「ここが沢田君たちの生活する1026号室です。政府が男子は同じ部屋にしたほうがいいという意見だったので、急遽改築して、4人部屋になってます。ちなみにクロームさんはとなりの1027号室です。ヴェルさんとお知り合いのようなので一緒に部屋にしてくださいけど大丈夫ですか？」

「・・・大丈夫・・・です」

「そ、そうですか！それはなによりです。この他に困ったことがあったら何でも言うてくださいね？」

「はい。ありがとうございます。」

「いえいえ。では私はこれで・・・」

そういつて山田先生は自分の部屋へ帰っていった。

「さて、一夏のこれからの方針だけど放課後は毎日剣の特訓だな。1週間しかないから無茶して体壊しても仕方ないしな。」

「わかった。ツナはどうするんだ？」

「俺はいつも通りトレーニングするだけだよ。」

ツナはマフィア同士の紛争に介入するようになってからは、毎日の体力づくりのトレーニングは欠かさずやっている。超死ぬ気モードは体力・気力を消耗しすぎると解除されてしまうのでそうならないようにするためである。

「なるほどな。今日はもう遅いからもう寝るか？」

「そうだね。それじゃお休み」

「お休みなさい。10代目」

「おやすみ」

こんな感じでツナたちのIS学園の初日は終わった。

そして時は過ぎ、ついにクラス代表決定戦当日を迎えた。しかし、1つ問題があった。ツナのISはボンゴレが用意したもののなのでついさっき届いたのだが、一夏のISがまだ届いていないのだ。

「山田先生、俺のISはまだ届かないんですか？」

「い、一応今日の決定戦までには届くはずなんですが・・・どうしましょう？」

時間はすでに開始1分前となっていた。しかし、まだ一夏のISは届く心配がない。

「仕方ないですね。俺がまずセシリアさんと戦いますから、その勝者が一夏と戦うということだ」

「いいのか？」

「しょうがないからね」

「ではそうしよう。すぐISを装着しろ」

「わかりました」

そういつて、ツナはISが入っているコンテナの前に立ち、コンテナを開けた。その中にはオレンジ色に染まる機体がたたずんでいた。ツナはすぐに機体のスペックを確認した。

「高機動型IS。チエーリ・・・天空か」

「時間がないからフォーマットとフィッティングは実践でやれ。わかったな？」

「わかりました。じゃあいつてくるよ隼人、武、クローム」

「いつてらっしゃいませ。10代目」

「いつてこい。ツナ」

「・・・頑張つて」

仲間たちの声を背に、ツナは対戦相手のセシリアの元へ向かった。

「あら？最初は織斑一夏ではありませんでしたか？」

「一夏の機体はまだ届いていないから代わりに俺が君と戦うことになったんだ」

「そうでしたの。まあ、私が勝つことに変わりはありませんが」

「言ったよね？君には負ける気しないって」

「っ！？いいでしょう。この慈悲深い私が最後のチャンスをさしあげようと思っていたのに・・・」

「そんなことを言ってるから君は俺には勝てないって言ってるんだよ」

「・・・もう手加減はしませんわ。それでは・・・」

セシリアがそういったとき、試合開始のブザーが鳴り響いた。

「お別れですわね！」

セシリアはメイン装備であるスターライトmk？の引き金を引いた。狙いはツナの左肩。しかし、ツナはまるで最初からそこに攻撃が来ることがわかっていたかのように攻撃を回避した。

「っ！？」

まさか初めてISに乗ったツナにかわされるとは思っていなかったため、セシリアは、驚きを隠せなかった。しかしすぐに切り替え、引き金を引きまくった。しかし、ツナには当たるところかかすりす

らしなかった。

「何故当たりませんか!？」

「それより今度はこっちの番だ」

そういつとツナは一瞬でセシリアとの距離を零にした。

「イ、イグニツション・ブースト!？」

セシリアは驚愕した。高等技術であるイグニツション・ブーストを初心者のツナが使えるはずがない。そう思っても実際ツナは使って見せた。そしてそのままツナはセシリアのことを殴り飛ばした。

「つきゃあ!」

高速移動からの攻撃によりセシリアのシールドダメージはかなり削られてしまった。しかし、ツナの攻撃はそれだけでは終わらなかった。殴り、蹴り飛ばし、地面に叩きつける。初心者であるはずのツナが国家代表候補生を圧倒している。その事実には獄寺、山本、クローム、ヴェル以外の観客は啞然としていた。

「何故!？何故この私があなたごときに・・・」

「お前と俺とじゃ覚悟の質が違う。それだけだ」

そういつてツナが殴り飛ばしたところでセシリアのシールドダメージが0になり、ブザーが鳴り響いた。

『勝者 沢田綱吉』

その文字がモニターに表示されたが誰も何も言わなかった。ISに初めて乗った男子が国家代表候補生をノーダメージで圧倒し、勝利したからである。

「・・・山田先生。一夏の機体は届きましたか？」

「っは、はい！もうフォーマットとフィッティングを済ませてあります」

「それでは30分後に織斑一夏対沢田綱吉の試合を始める！」

次ぎの試合で1年1組のクラス代表が決定する。

第4話（後書き）

やばい。戦闘描写が難しすぎる・・・

感想くださった方ありがとうございました。

ここで、感想を下さった方の中に質問をくださった方が何人かいましたのでその方々の問いに答えたいと思います。

Q・ツナが超死ぬ気モードになることありますか？

A・あります。ただし、ツナたちの専用機が第2形態、第3形態になっていくにつれて、ツナのグローブのようにリングの力によってISに乗ってても死ぬ気の炎が使えるようにし、乗っていないときよりも強くするのはまだ考え中です。これに関しては読者の皆様の意見の聞きたいのももしよろしければ皆様の考えを聞かせてください。

Q・最終的に骸や恭弥は出てくるのか？

A・もちろん出します。おそらく、出すときは専用機に乗っている描写で出すと思います。個人的には福音あたりで出したいと思っています。そこらへんで、ツナたちが死ぬ気の炎を使うかもしれない。

Q・ヒロインはシャル以外を希望します

A・個人的にはシャルは境遇が境遇なので傷ついているシャルをツナが包容していく見たいなストーリーがいいなーと思ったのでそうしました。

今のところ、鈴と楯無が読者様の意見としていただいています。ヒロインについてはこれから検討したいと思っています。

以上です。

これからもよろしくお願いします

第5話

「お疲れ様です。10代目」

「流石だな。ツナ」

「・・・おつかれさま」

「ありがとう」

次の一夏との戦いに備え、エネルギーの補給をするためにビット内に戻ったツナは自分の守護者に迎えられていた。

「やっぱ、あの女たいしたことありませんでしたね」

「そうでもないよ。自分の弱さに気づけば化けると思うよ」

そんなところを話していると、先ほど対戦していたセシリアがビット内に入ってきた。

「てめえ、なんのようだ」

「少し沢田綱吉に聞きたいことがありますの」

「俺に？」

ツナはセシリアの聞きたいことに心当たりがまったくなかった。

「あなた、最後にわたくしに言いましたわよね？あなたとわたくし

とでは覚悟が違つと、決闘が決まつたときも

わたくしは自分の立場がわかつていないと。あれはいつたい……

」

「ああ。そのこと。まず後者の質問に答えるけど、あなたは今どんな立場にいる？」

「？イギリスの国家代表候補生ですわ」

「そうだね。つまり、あなたが将来国家代表になるかもしれないわけだね？」

「ええ。それがいつたい？」

「今の立場でも言えることだけど、あなたがもし国家代表になつたらあなたの発言1つ1つはイギリスという国家の意思と捉えられてしまう。つまり、1週間前にあなたが発言した『日本人の男性は知能が低い』という意見がイギリスの意見と捉えられてしまう。それによつて国家間で問題になつたらどうするつもり？」

そのことをきいた瞬間セシリアの顔が驚愕に染まつた。この後ツナが言いたいことを想像できたのだらう。

「つまり、あなたが軽率な発言をしてしまえばそれが最悪国家間の争いに発展してしまうかもしれない。国家代表とか代表候補生っていうのはそういう立場の人間だと言うことだよ。もし国家間の戦争なんてことになって多くの人間が死んだ場合、イギリスの国民や日本国民はあなたのせいでたくさん人間が死んだと思うだらうね。もしそうならあなたは責任を取れる？」

セシリアはそれを聞いた瞬間うつむいてしまった。自分の発言でそのようなことになってしまいかもしれないなんてこと、考えたこともなかったし、自分のせいで人が死んだ場合責任なんて取れるはずがない。人の命を奪うということはそこまで重いことなのだ。

「これが後者の質問に対する俺の答え。次に前者に対する答えだけど、これに関しては答えなんてない。あくまで俺の考えだけど、あなたを絶対に倒すと決めていた俺と俺のことを男で、まだ一回もISに乗ったことが無いからといって俺のことを完全に侮っていたあなたではその時点でいろいろ差がでていると思いませんか？」

その言葉にセシリアは大きく目を見開いた。

「俺はその差を覚悟の差と例えたまでです。後は自分で考えてみてください」

「・・・あなたは」

『まもなく、織斑一夏対沢田綱吉の試合を開始します。両者準備をお願いします』

セシリアが何かを言おうとした瞬間、ビット内に放送が入った。この戦いでクラス代表が決定する。

「じゃあ、いつてくるよ」

「いつてらっしゃいませ。10代目」

「お前なら勝てるぜ。油断するなよ」

「・・・頑張つて」

守護者の声援を背にアリーナへ向かおうとしたとき

「待つてください！！」

セシリアに呼び止められた。

「なぜ・・・あなたはそこまで強いのですか？」

放送が入る直前セシリアがツナに聞いたかったこと。その質問に対してツナは微笑しながら答えた。

「俺はぜんぜん強くないよ。もし俺が強いつていうのならそれは仲間のおかげだよ」

との答えに対しセシリアはその言葉の意味を飲み込めずにいた。

「仲間がいてくれるからどんな苦しいことでも頑張れる。どんなつらい状況でも前を向ける。今の俺がいるのはそんな仲間のおかげだから。そんな大切な仲間を守りたい。仲間との大切な時を守りたい。それが俺の『覚悟』だよ」

そういうと、ツナはチエーリを展開し、一夏の待つアリーナへと向かっていった。そんなツナの背中をセシリアは妙に熱い視線をむけていた・・・

「すまない。待たせたか？」

「いや。俺も今来たところだ」

一夏の機体は完全なまでの『白』だった。背中についている翼が機体の白の織り交ざって天使のような印象を受ける。チエーリのモニターに一夏の機体の情報が流れてくる。

『白式』

それが一夏の機体の名だった。そして先ほどの戦いからツナの実力を警戒しているのかすでに武器を構えていた。

『雪片式型』

それは第1回モンド・グロッソ優勝者、織斑千冬の乗っていた初代世界最強の機体『暮桜』の武器の発展系だった。

「織斑先生の武器か？」

「ああ、この武器を持っているからには無様な戦いはできないからな。最初からとばさせてもらう」

「・・・いい眼をしている」

「そりやどうも。じゃあいくぜ・・・」

そう一夏が言った瞬間試合開始のブザーが鳴り響いた。ブザーと同時に一夏が突っ込んできた。その速度はセシリアのブルー・ティアイズよりも速かった。

しかし、ツナにとってその動きは緩慢に思えた。

「・・・遅い！」

「がっ!？」

ツナは突っ込んできた一夏の一撃を回避し、カウンターを喰らわせた。ガントレットで防ぐのではなく、そこに攻撃がくることがわかっていたかのような動きをして見せた。

『超直感』

ツナに流れるボンゴレの血（ブラッド・オブ・ボンゴレ）ともに受け継がれるその見透かす力は、今までの戦いの中で研磨され、いまでは、3年前と比べ物に

ならないほどの力を発揮している。ゴーラ・モスカのような完全に機械が相手なら効果を発揮しないが、ISは人間が動かしている。故にこの力を十二分に発揮できる。

ツナは吹っ飛ばされた一夏を追撃する。一夏が雪片を振り回せないほどの密着した間合い。一夏は距離をとろうとするが、ツナがそんなことを許すはずがない。

超近距離での格闘戦を挑み、一夏を観客席の目の前まで追い込んだ。

そのとき、一夏の機械が輝きだした。白式のワン・オフ・アビリティー『零落白夜』が発動したのだ。

ツナの超直感があれを喰らってはいけないと警告を鳴らす。

一夏の攻撃をかわすも、一夏と位置が入れ替わり、ツナが観客席際に追い込まれる形になってしまった。

最後のチャンスといわんばかりに、一夏はイグニッション・ブーストを使い突っ込んできた。

ツナは避けようとしたが超直感が本日最大の警告を鳴らしていた。

ツナの後ろにはこの試合を観戦しているクラスメートがいた。もしこの攻撃を避けたらやばい！！そう判断し、ツナは両腕を交差させ、雪片の一撃を受け止めていた。

「ぐっ！？」

想像以上の衝撃にツナは地面にたたきつけられた。

くモニタールームく

この場所では獄寺、山本、クローム、箒、セシリア、ヴェル、そして、山田先生と千冬がツナと一夏の対戦を観戦していた。

「よし！！」

一夏の一撃が決まったとき、箒は思わず歓喜の声を上げた。今の一撃でツナのシールドエネルギーは大幅に削られた。これで勝負は振り出しに戻ったといっていいだろう。

「な、なぜですの！？綱吉さんだったら今の一撃は簡単に避けられたはずでしょう！？」

「ふんっ。おおかた、一夏のことを甘く見ていたからだろ。他人を見くびっているからあのようなことになる」

箒はツナのことを馬鹿にしたように言い放った。本来ならここで獄寺が箒に向かって文句を言っているところだが、獄寺は今別のことを考えていた。

そしてそれは山本とクロームも同じだった。

「・・・おい、織斑千冬。織斑の機体のワンオフアビリティって一体何なんだ？」

「織斑先生だ。白式のワンオフアビリティは『零落白夜』。自らのシールドエネルギーと引き換えに相手の絶対防御を発動させる。つまり、バリアー無効化攻撃だな」

「それってアリーナのバリアーにも有効なのか？」

「？確かに有効だ。一撃でバリアーを吹き飛ばすことができるだろう。それがどうかしたのか？」

それを聴いた瞬間獄寺、山本、クロームは確信した。ツナは攻撃をかわせなかったのではない。かわさなかったのだ。

「・・・ツナらしいな」

「なに？どういうことだ!？」

「つまり、ツナはさっきの攻撃をかわせなかったんじゃないかってかわさなかったんだ」

「ど、どういふことですか!？」

セシリアは意味がわからないといった表情で山本たちに尋ねた。ヴェル、箒、千冬、山田先生も同じ表情をしていた。

「簡単だよ。さっきツナの後ろには何があった？」

「観戦していたクラスメートじゃないんですか？」

「じゃあ、さっきツナが攻撃をかわしていたらあの子達はどうなっていた？」

その言葉を聴いた瞬間箒とセシリア以外のメンバーは山本のいいたことを理解した。

「バリアーが無効化されてあの子達が怪我をしていたかもしれない・・・」

「怪我じゃすまなかった可能性もある。だからツナはかわさなかったんだ。あの子達を守るために・・・」

「ふざけるな！一夏の攻撃をかわせなかった言い訳じゃないのか！？」

「いいわけじゃねえよ馬鹿女」

「なんだと!？」

山本の言葉を信じない箒が激昂するが獄寺が口を挟んだ。

「もし、あそこで10代目がかわしてあいつらが怪我を、最悪死んでいたかもしれない。そんなことになったら10代目は自分を責め

続ける。10代目はそういうお方だ。あのお方は、自分に牙を向いた相手にさえ傷つくことに心を痛める。いつも眉間にしわを寄せ、祈るように拳を振るう。それが10代目の本質だ」

「まあ、なんと言おうと試合が振り出しに戻ったことに変わりはない。そして勢いは一夏にある。この勝負、一夏の勝ちだな」

「・・・綱吉さんは負けない」

「ふんつ。この状況からどう逆転するといふのだ!？」

「いいや。ツナが勝つさ」

そう山本が言った瞬間、第3アリーナがオレンジ色の光に包まれた。

「アリーナ内」

「くっ!」

地面にたたきつけられたツナが立ち上がった。一夏の一撃を防ぐためにたてにした両手のガントレットにはひびが入っておりシールドエネルギーも半分くらい削られてしまっていた。

「これでとどめだ!!」

止めを刺そうと一夏が突っ込んでくる。そのときツナの頭の中に声が響いた。

『ねえ。何でさっきの攻撃避けなかったの？』

「つつ！？」

いきなり頭の中に響く声に驚きながらもツナはその声に答えた。

「もし、あの時俺が避けていたら後ろにいた子達がどうなっていたかわからない。そんな予感がしたからだ。」

『自分だけ助かればいいじゃない』

「ふざけるな！そんなことをして生き残ってもうれしくない！そんなことをしてあの子達が死んだら俺は自分のことを殺したくなる」

『あなたは力を何のために使うの？』

「仲間を守るために、仲間との大切なときを守るためだ！」

『その意思を最後まで貫き通せる？』

「あたりまえだ。それが俺の『覚悟』だ！」

『わかった。私はあなたとともに戦うことを誓う。あなたの守りたいもののために、私は力を使う』

「わかった。しかしお前は一体？」

『私はソラ。あなたのISの中に宿る人格。さあ、行きましょう、ツナ』

「ああ、行こう」

その瞬間ツナはオレンジ色の光に包まれた。

「な、なんだ!？」

ツナに突っ込もうとした一夏は止まり、目の前の光景に目を奪われていた。

そして光が収まると、そこには第一形態移行を完了させたチエーリファーストシフトを纏ったツナの姿があった。

「も、もしかして第一形態移行か? いままで初期設定の機体であんな動きしてたのか!？」
ファーストシフト

第一形態移行を完了させたチエーリは背中には4基のスラスターを、両手のガントレットにもスラスターが搭載されていた。

一夏が驚いているとツナが一夏に向かって突っ込んできた。しかし、その速度は初期設定よりも少し速い程度のものでしかなかった。

「っ!？」

思ったよりも緩慢な動きに疑問を抱きながら一夏も迎え撃とうとツナに突っ込んだ。しかし、突然ツナの姿が消えた。

「なっ!？」

もともと空中戦を得意とするツナはこのような緩急をつけた戦いに慣れていた。

緩やかな動きからいきなりトップスピードに移られたら反応するのは難しい。

白式はギリギリ反応できていたが一夏がまったく反応できていなかった。

直後、背後からの衝撃に一夏は耐え切れず地面に落下してしまう。そしてツナは掌を一夏に向けた。そして次の瞬間ツナの掌から放たれたエネルギー弾が地面に落下した一夏を襲った。

『勝者 沢田綱吉』

モニターでツナが勝者であることが知らされ観客は呆然としていた。初期設定の機体で国家代表を下し、さらには、不利な状況から一夏にも勝利して見せた。

これが、今日始めてISに乗った人間のことなのか。自分は夢を見ているのではないかと観客は思った。

そんな観客を背にツナはビット内に戻っていった。

「10代目!!」

「大丈夫だったかツナ!？」

「・・・大丈夫？」

ビット内に戻ると守護者のほかにヴェルとセシリアもいた。

「ツナさん、零落白夜で攻撃された腕は平気なんですか？」

「うん、大丈夫だよ。なんともない」

「あ、あの綱吉さん」

ヴェルの横には申し訳なさそうにしているセシリアの姿があった。

「セシリアさん。何か用？」

「あ、あの・・・申し訳ありませんでした！！1週間前あなたのことをクズ呼ばわりしてしまって・・・」

そういうとセシリアはツナに向かって頭を下げた。

「別に気にしてないよ。それに謝る相手が違う」

セシリアはわからないといった表情でツナを見る。ツナをクズ呼ばわりしたんだから、ツナに謝るのが普通なのでは？そうセシリアが思っている

ツナは獄寺のほうを向き

「俺があの時怒ったのは隼人をクズ呼ばわりされたからだよ。だから、謝るのは隼人に対してであって俺に対してじゃない」

「え？」

セシリアは驚いた顔でツナを見た。

「別に俺は自分のことをなんと言われようがかまわない。中学のときに言われ慣れたから。だけど、俺の友達の、仲間を侮辱することは許さない。それだけだよ」

「まあ10代目が気にしなくても10代目を侮辱することは俺たちが許さないがな。俺は10代目がお前のことを許すってんだから気にしてねえよ。10代目にも謝ったしな」

「なぜ・・・あなたたちは自分よりも友人を優先できるのですか？」

「簡単だよ」

そついうとツナは微笑みながらこう言った。

「俺たちは友達に、仲間に救われたから」

（ああ・・・このひとは・・・なんて）

なんて温かい人なのだろう。

今までセシリアは男性は父親のように情けない人間ばかりだと思っていた。

しかし、ツナは違った。自分の非礼を気にせず、それどころか自分の悪いところも全部受け入れてくれる、大空のような人・・・。

セシリアはツナに惹かれ始めていた。

第5話（後書き）

何とか形になったと思います。

あと2〜3話くらいで第一巻が完結すると思いますのでそれまでに
はヒロインを決定したいと思っています。
これからもしよろしく願います！

第6話（前書き）

更新が遅れてすみませんでした

第6話

「では、一年一組の代表は沢田綱吉君に決定です!」

クラス代表決定戦の翌日のSHRでそう告げられた。ツナは昨日の決定戦の勝者が代表になることなどすっかり忘れていた。

「いいですね? 沢田君」

「まあ、そういう約束でしたからね・・・忘れてたけど」

「当然ですわ!! このセシリアオルコットを倒したお方ではなく、他の方が選出されるなど許されるはずがありませんわ!」

とセシリアが高々と言い放った。しかし、その後、なにやら頬を染めながらツナにのくを見た。

「そ、それでその・・・綱吉さんには私の訓練につきあつてただきたいのですが・・・」

「えっ?」

「アドバイスをしていただきたいんですの。わたくしも戦闘技術は無理ですがISの操縦技術についてなら綱吉さんに教えられることがあるかもしれませんし・・・」

「わかった。いいよ」

「ほ、本当ですよ!?」

「うん、そのかわり今日は無理かな。隼人たちの専用機が今日届くみたいだから」

それを聞いた瞬間、クラスメイトたちが騒ぎ出した。クラス内に専用気持ち4人という時点で異常なのにさらに3人も増えるというのだから当然である。

「今日中に隼人たちのフォーマットとフィッティングを終わらせたんだ。・・・そうだ！一夏とセシリアさんって放課後暇かな？」

「？ええ。今日はあいてますが？」

「俺も大丈夫だぞ」

「なら、ちょっと俺たちに付き合ってもらっていいかな？操縦に少しでもなれてほしいから俺みたいに実践の中でしたいから。ヴェルも今日イタリアから装備届くみたいだから一緒にテストやる予定なんだけど人手が足りないから」

「っ！ええ、喜んでやらせていただきますわ！！」

「俺もいいぞ」

「ありがとう。篠ノ之さんにもお願いしていいかな？一応打鉄の申請はしておいたんだけど・・・」

「わかった。付き合ってやる」

「てめえ！10代目に向かってなんて口きいてやがる！？」

「なんだと!？」

「気にしなくて大丈夫だぞ隼人。素直じゃないだけだから」

「なっ!？」

「まあまあ、2人とも落ち着いて。それより、場所は第3アリーナ
でやるから放課後そこに集合で」

「「「（・・・）わかった」「」」

「「「わかりました（わ）」「」」

ツナたちは忘れていた。今がSHRの時間だということを。教壇では山田先生が涙目になって「・・・いいんです。どうせ私なんか・・・」とぶつぶつ言いながら落ち込んでいた。

少し時間を飛ばして2時限目、ツナたちはISスーツ姿でグラウンドに整列していた。しかし、ツナたちは居心地が悪かった。理由は簡単である。ISスーツは体に密着しているため体のラインがよくわかってしまう。

ツナたちも年頃の男子である。少しばかり刺激が強かった。

そして前にはジャージを着た千冬が立っていた。

「それではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。
沢田、織斑、オルコット、オルク。試しに飛んでみる」

「『はい』」

「わかりましたわ」

返事をして4人は前に出た。

「それではISを起動してみろ」

そういわれて4人はISを展開した。

ちなみに、ヴェルの専用機はイタリア製の訓練機『アイギス』を改造したものである。主に打鉄が近接戦闘を、ラファール・リヴァイブが中距離・遠距離戦闘を得意とするようにアイギスは防衛戦を得意とする。防御力が他の訓練機よりも優れているため攻撃を喰らっても他の訓練機より受けるダメージが少ないというのが長所であるが、防御力を優先するあまり攻撃力と機動力は他の訓練機よりも低い。しかし、ヴェルの『アイギス?』は欠点の1つである機動力が向上されている。それでも、他の専用機と比べると遅い部類に入る。

ちなみに、アイギス?の待機状態は首の白銀のチョーカー。チエーリはオレンジ色のネックレスである。

「遅いぞ織斑! 熟練の操縦者はコンマ5秒で展開できるぞ!」

俺初心者なんだが・・・と一夏がつぶやいた瞬間、千冬の出席簿アタックが一夏の頭に炸裂した。

「言い訳するな。コンマ1秒でも速く展開できるよう訓練しろ。では、飛んでみる」

そう言われると、全員が一斉に飛び上がった。

ツナは速度を落とし、他のメンバーと平行になるように飛んでいた。そして、放課後の予定の確認をしていた。

「とりあえず、一夏と武、セシリアさんとクローム、篠ノ之さんと隼人、俺とヴェルの組み合わせにしようと思うんだけど・・・」

「わたくしはかまいませんが箒さんと隼人さんをペアにするのはあまりよろしくないのではないですか？あきらかに犬猿の仲という言葉が当てはまりそうなのですが・・・」

「俺もそう思うぜ」

「だけど、篠ノ之さんは、武に完敗しているからね。ISで借りを返そうとか思っても困るし、たぶん武は俺より飲み込みが速いからたぶんISに乗っても剣道上での再現になっちゃうから。」

篠ノ之さんは我が強いからクロームと組み合わせたら大変なことになっちゃうし、ヴェルの目的は装備のテストだから専用機のほうがいいと思うんだ」

「2人が暴れたらどうするんですか？」

「そのときは俺が止めるよ。そのときの状態の篠ノ之さんの剣じゃ俺は倒せないから」

そういったツナの目にはなにか強い意志が宿っていた。

「おい！何をぐずぐずしている！？さっさと降りて来い！！」

何事かと思いい下を見ると、箒が山田先生のインカムを奪って怒鳴っていた。どうやら、一夏がいつまでたつても降りてこないで仲良く何かを話しているのに腹が立ったらしい。

山田先生が涙目になっていることも気にしないとは・・・しかし、その直後千冬の出席簿アタックを喰らって悶絶していた。

「何をやつとるか馬鹿者。それより全員降りて来い！目標は地表から10cmだ!!」

「わかりましたわ。それでは、お先失礼しますわね」

そういい残し、セシリアは急降下を始めた。そして、地表12cmの位置でとまった。

その後、ツナ、ヴェル、一夏の順番で降下して行った。結果は

ツナ・・・10cm

ヴェル・・・9cm

一夏・・・5m

という結果になった。もちろん、一夏は千冬からの出席簿アタック+授業後の穴埋めを命じられた。

そして時は進んで放課後、ツナたちは獄寺たちのISのある第3アリーナのビット内にいた。そこにはコンテナが3つ並んでいた。そしてコンテナを開けると、獄寺のは真紅の、山本のは青の、クロームのは藍の機体がたたずんでいた。

そしてすぐさま機体のスペックを確認した。

「中距離・遠距離型IS・・・テンペスタ」

「近距離・中距離型IS・・・ピオッジャ」

「・・・特殊戦闘型IS・・・スペットロ」

「よし、それじゃあ装着したらすぐ始めよう。ペアは隼人と篠ノ之さん、武と一夏、クロームとセシリアさん、俺とヴェルでやるから」

「ま、待ってください10代目！！何で俺がこいつとなんですか！？」

「私も同じだ！何故私がこいつとなんだ！？」

ここでツナはさっき授業中に専用機持に説明したことを話した。

「くっ！わ、わかりました、10代目」

「くっ！し、仕方ないな」

「じゃあやろうか。あまり時間もないし」

＼山本・一夏side＼

「甘え！」

「くっ!!」

山本と一夏は実戦形式の試合をしていた。というよりも、放課後2人でやっていた訓練をISに乗ってやっているだけである。山本の専用機『ピオツジャ』の基本装備は2振りの刀だった。その2振りの刀を巧みに操り、一夏を追い詰めていた。元の強さに圧倒的な差があるためか一夏が防戦一方だった。零落白夜を使おうとも山本は雪片の腹に一撃を放ち刀の軌道をそらしていた。

「一夏！太刀筋が乱れてんぞ！」

「わかってるよ！というかなんで武といいツナといい初めてISに乗ったのにそんな強いんだよ!？」

「ツナも言ってただろ？これより扱いの難しいのを扱ったことがあるってな！」

「ちい！」

山本の一撃に耐え切れず、一夏が後ろに吹っ飛ぶ。一夏が吹っ飛んだ瞬間、山本は刀を一振り手放して、それが地面につく前に一夏に向かつて蹴った。

時雨蒼燕流攻式三の型 遣らずの雨

「なっ!？」

一夏がバランスをとったところで白式の警報が鳴り響いた。前を見ると山本の蹴った刀が目前まで迫っていた。

「くそ！」

何とか雪片で刀をはじいた。しかし、その隙に山本は一夏の目の前に迫っていた。

「終わりだ」

時雨蒼燕流攻式八の型 篠突く雨

その言葉とともに放たれた一撃により白式のシールドエネルギーが零になった。

その瞬間、山本の機体が青い光に包まれた。そしてその光が収まつたとき、山本の機体の形が変わっていた。第一形態移行が終わったようだ。ファースト・シフト

その姿はまるで侍のようだった。着物のような装甲に背中には少し小さめのスラスターが2基あった。そして腰には何故か鞘が二振り収められていた。

「・・・ツナといい武といい、何だよそのでたらめな強さ」

「まあ、経験の差って言うことで」

こうして2人の戦いは終わりを告げた。

くクローム・セシリアsideく

「っこのー」

「甘いですわ！」

この2人も実戦形式の戦闘訓練を行っていたが戦況はクロームのほうでセシリアを少し上回っている程度のものでほとんど均衡しているといったよかった。クロームは通常、幻術を織り交ぜた戦いを得意とするが、ISには、幻術機能は搭載されていない。生身でもできるのだが、幻術の使用は基本ツナに止められていた。そのため、基本武装の三叉槍を使った接近戦を挑むしかないのだが、クロームはもともとツナたちほど格闘戦があまり得意ではない。この3年間で格闘戦のスキルは確かに上昇したが、それでもツナや山本には遠く及ばない。

普段なら幻術を使って姿を消したりして接近するのだが、今はその幻術が使用できないため、セシリア相手でも苦戦を強いられていた。ブルー・ティアーズのビットを2基減らしたが残り2基のビットとスターライトmk?の狙撃を使い、クロームの接近を阻止しようとする。

そしてついにスターライトmk?の一撃がクロームの左足を捉えた。それによりクロームの動きが一瞬止まってしまった。

「これで!！」

セシリアは切り札である弾道ミサイルを加えた一斉射撃を放った。そして、クロームにはそれを防ぐ術はなかった。

ドカアアアン!!

激しい着弾音とともにクロームが爆煙に包まれる。自分の勝利を確

信じたセシリアだが、次の瞬間煙の中から藍色の光が輝いているのが見えた。

「っ！あれは！」

そう、セシリアは一度この発光現象を見ているのだ。その光は色こそ違えどツナが第一形態移行したときと同じ光だった。

すぐに光が収まり、セシリアが攻撃しようとしたが、そこにはクロームの姿はなかった。

ハイパーセンサーで辺りを見回すがクロームはどこにもいなかった。

「ど、どういことですの！？クロームさんはどこに・・・」

セシリアはその後の言葉を言うことができなかった。

突然後ろから何者かに斬られたかのような衝撃に襲われたからである。

「っ！！何ですの一体！？」

セシリアは辺りを見回すがクロームの姿はない。しかし攻撃はやむことを知らなかった。

これが、クロームの専用機『スペットロ』のワンオフアビリティ『幻影』である。

自分の姿を特相手に見えなくし、『幻影』が発動しているときのみ使用できる特殊スラスター『静霧』により、音を出すことなくセシリアに接近しているのだ。

前後左右あらゆる方向からセシリアは攻撃され、なす術なくシールドエネルギーを零にされてしまった。

その瞬間クロームが姿を現した。身に纏う藍色の装甲は他のISよりも薄くなっていた。他にも背中にある2基のスラスタも他のものより小さめのようだった。

「・・・負けましたわ。勝てると思いましたが」

「・・・たぶんあそこで第一形態移行していなかったら負けてたと思う」

「それにしても変わった能力ですわね」

「・・・私はこっちのほうがなれてるから。それに綱吉さんや雨の人、嵐の人には通じない」

「そうなんですか?」

「あの3人はこういう戦い方をする人との戦いには慣れているから」

「そうですか・・・なんにせよいい勝負でしたわ。勉強になりました。ありがとうございました」

「・・・そっちこそ付き合ってくれてありがとう」

く 獄寺・第sideく

「ほらほらどーした!? 動きが止まってんぞ!」

「うるさい!」

獄寺と箒の戦いは箒が、押されていた。というよりも相性が最悪だった。獄寺の基本武器は2丁の銃だったがこれがえげつないことに弾がグレネード弾だったのだ。

なので、箒が避けたとしても爆発によりダメージを受けてしまっていた。しかし、このままやられる箒ではなかった。グレネード弾の弾道を読み、刀で切り裂いた。そして、

グレネード弾が爆発したときに生じた爆風を利用し、加速しながら獄寺に接近した。

「ちっ！」

「私を甘く見るな！！」

だが、獄寺と箒の差は縮まらない。獄寺はグレネード弾をわざと外すことで爆風を引き起こし、それを利用して箒の足を止めていた。しかし、獄寺の銃はセシリアのライフルと違って実弾兵器なので弾数に限りがある。

そして、ついに獄寺の2丁拳銃の弾が切れてしまった。

「くそっ！」

「調子に乗りすぎだな。これで終わりだ！！」

獄寺の拳銃が弾切れを起こしたことで勝利を確信したのか、箒は何にも考えずに、ただ獄寺に突っ込んでいった。しかし、武器がなくなっただけからといって獄寺が負けるはずなどなかった。

獄寺は普段、ダイナマイトを使用するが、相手に接近されることもある。リング争奪戦でベルフェゴールに接近されたときは小型のダイナマイトを使って距離をとったが、一対一ならともかく、一対多の場合、いちいちそんな方法をとっていたら命がいくつあっても足らない。もともとけんかは強かったが、町の不良とマフィアとでは格が違う。町の不良相手では圧倒できても接近戦を得意とするマフィア相手には圧倒されてしまうというケースは少なくなかった。だからこそ、獄寺は接近されても戦えるように体術を鍛えた。いまでは、接近戦を得意とするマフィアとでも相手にもよるがたいいていの相手には勝てるくらいのレベルになっていた。

故に、箒が突っ込んできても冷静だった。箒が放った一撃の機動を読み、かわすことによつて懐に入った。箒も古武術の心得はあるが、それは刀を持っていない状況を想定してのものだった。そしてなにより、この一撃で勝てると思つていたためかわされたことに驚き、反応が一瞬遅れてしまつていた。その隙を突いて、獄寺は箒の鳩尾めがけて拳を放った。

「がっ!？」

「まだだぜ!!」

鳩尾に攻撃を喰らつて前のめりになったところを獄寺は箒の顔面を膝蹴りで蹴り上げた。そしてさらに顔面にまわし蹴りを喰らわせた。

「ぐっ!!」

箒が吹っ飛ばされて再び距離が開いたところで、獄寺が赤い光に包まれた。

「っこれは!？」

箒もツナのクラス代表決定戦を見ていたのでこれが何を意味するのかが理解できた。すぐさま攻撃しようとしたが、光の中から飛び出してきたレーザーによりそれはかなわなかった。

光が収まり、箒が見たものは第一形態移行をしたテンペスタの姿だった。装甲は初期設定のものより厚くなっており背中にはその装甲に埋められるように2基のスラスターがあった。

「一気に終わらせてやるぜ!!」

そう言うのとテンペスタの右腕に装着型の銃をコールし、数発弾丸を放った。

「なめるな!」

すぐさま箒は回避行動をとろうとした。しかし、異変が起こった。

獄寺の放った弾丸がいきなりクラスター爆弾のように分裂したのだ。

「な!？」

箒は打鉄のシールドを呼び出して防ごうとしたが間に合わなかった。

箒は獄寺の放った弾丸すべてに命中してしまった。

「があ!!」

それにより、箒の動きが止まってしまった。そして、獄寺がその隙を見逃すはずがない。すぐさま二丁拳銃をコールし引き金を引きまくった。

「っ！しまっ・・・」

当然箒にかわす術などなく、すべて着弾してしまった。そして、打鉄のシールドエネルギーが零となった。

「くそっ！！」

獄寺に負けたことが相当悔しかったようで、箒は地面に拳を叩きつけた。

「お前馬鹿か？」

「なんだと！？」

箒は獄寺が負けた自分を馬鹿にしているのかと思い、獄寺をにらみつけた。

「何で俺が弾切れをおこしたとき、むやみに突っ込んできた？」

「チャンスだと思ったからに決まっているだろう！」

「確かにあれはチャンスだったんだろうが俺が言いたいのはそのいうことじゃねえよ。何でお前はあそこで気を抜いたのか聞いてんだよ」

「私は気など抜いていない！」

「いや、抜いてたな。抜いてなければ俺が懐に入ってきたときに何らかの反応ができたはずだ。なのにお前は何もできなかった。普段のお前なら反応できたのにもかかわらず、だ」

「そ、それは・・・」

「言つとくが、戦いで油断するということは自分の命を捨てたも同然だ。そして、時にはそれが自分の命だけじゃすまない場合もある。そのことを肝にめいじときな」

「っ!!」

箒は何も言い返せない自分がふがいなかった。

こうして、獄寺と箒の戦闘が終わった。

くツナ・ヴェルsideく

「今回届いた装備って何なの？」

「私の機体は、防御に重点を置いた機体なので攻撃力が他の機体よりも低いんです。だから、それを少しでも補うために本国が開発したものを。すでにインストールは済んでいますので」

そう言つて、ヴェルはその武器をコールした。

その武器は白銀の大鎌だった。柄の部分から刃の先までが白銀に染められた鎌は、ヴェルの金髪と合わさつてとても幻想的だった。

「ヴェルは鎌を使って戦ったことはあるの？」

「はい。もともとアイギスも近接用の武器は剣なんです、私は剣

よりも鎌のほうがいやすかったので本国にいたときからずっと鎌を使ってきました」

「そうなんだ。それじゃ、始めようか」

そう言つてツナもチエーリを展開する。

「いつでも来い」

「では・・・いきます!」

その言葉を合図に、お互い相手との距離をつめた。

「はっ!」

ヴェルが巨大な鎌を横に薙ぐ。ツナはそれをしゃがむことで回避する。だが、ヴェルの攻撃はこれでは終わらない。ヴェルはそこから鎌を反転させ柄を使って綱の顔面めがけて攻撃する。

ツナはそれを左手を使って受け流す。ヴェルは受け流されたときの力を利用して、今度は蹴りを放った。ツナはそれを飛んで回避した。さらに飛び上がったときの力を利用し、ヴェルに膝蹴りを喰らわせた。

「がっ!」

ベルがその衝撃でのけぞった。ツナはさらに体を反転させヴェルの背中に蹴りを喰らわせた。

「くっ!」

その衝撃でヴェルとツナの距離が開いた。普段はここで追撃をするところだが、今回はヴェルの新しい武器のテストなのであえて追撃しなかった。

「その武器の力はこんなもんじゃないだろ？」

「ええ。まだまだこれからです！！」

そういうとヴェルはツナとの距離を少し縮めると鎌を横に薙いだ。まだ、ツナとの距離は8メートルはある。しかし、ツナはいやな予感がしたため、上空に回避した。

次の瞬間、ツナノいた位置に何かが通り過ぎた。ヴェルの鎌と同じ形状のエネルギー刃が通り過ぎたのだ。

これがヴェルの大鎌『シルバー・サイズ白銀の大鎌』の力である。エネルギーを刃に集中させそれを、ありのままの破壊能力として放出することができ
る。

ヴェルが再びエネルギーを放出する。しかし、ツナは避けなかった。

ドゴオオオオオン！！

ツナが爆煙に包まれた。ヴェルは驚愕していた。このくらいの攻撃ならツナは簡単に避けられたはずなのにツナは避けなかった。その理由がまったくわからなかったからである。

しかし、爆煙がはれてツナの姿が認識できたとき、ヴェルはさらに驚愕した。そこには装甲に傷一つついてないチエーリを纏ったツナの姿があったからである。これが、ツナのIS『チエーリ』のワン

オフアビリティー『死ぬ気の零地点突破改』である。

本来、死ぬ気の炎を吸収し、自分の力に変える技だが、ワンオフアビリティーとしての能力は相手のエネルギーを吸収して、自分のシールドエネルギーを回復させる。それにより、ツナは無傷だったのだ。それに対し、ヴェルはかなり不利だった。

白銀の大鎌は確かに強力な一撃を放つことができる代わりに、かなりのエネルギーを消費してしまう。二度の攻撃でヴェルはかなりのエネルギーを放出してしまっていたのだ。

「今度はこっちから行くぞ」

そういつた瞬間、ツナはヴェルに急接近した。慌ててヴェルが鎌を薙ぐが遅かった。ツナの拳がヴェルの鳩尾に決まっていた。その直後、ヴェルが吹き飛ばされた。ツナはエネルギーを拳に纏わせて攻撃し、ヴェルに当たったのと同時にそのエネルギーを開放したのだ。零距离からのあの攻撃に耐えられるほど、ヴェルにはエネルギーが残っていなかった。その攻撃により、アイギス？のシールドエネルギーが零になった。

「やっぱり強いですね」

「このくらい強くなかったら誰も守れないからね。新装備の調子はどう？」

「問題ないですね。ただ、エネルギーがかなり悪いですから使いどころに注意しないと。今度また、時間が空いているときに付き合っていたいただいてもよろしいですか？」

「もちろん」

こうして、ヴェルの新装備のテストは終わった。

時を同じくしてIS学園正面ゲート前

「ふ〜ん。ここにあいつがいるんだ・・・」

その少女は長い髪をツインテールで纏め上げ、肩には小柄な身長には不釣り合いなボストンバックを下げていた。

「え〜と・・・受付ってどこにあるんだっけ？」

上着のポケットから1切れの紙を取り出した。それは、受付の場所が示された紙だったがポケットに入れられていたのでその紙はくしゃくしゃになってしまっていて読みにくくなってしまっていた。

「あ〜もうつ！本校舎1階総合事務受付ってどこなのよ!？」

そういいながら少女は歩き始めた。適当に歩けば誰かに会うだろう。そいつに聞けばいいという行き当たりばつたりの考えであった。

「あいつ、元気にしてるかな〜」

少女は1人の男子のことを考えていた。自分が小学5年生のころに日本に引っ越してきたとき、いじめにあっていた自分を助けてくれた幼馴染。そいつがこの学園に来ている。だから、軍のお偉いさんに聞いたとき、興味のなかったこの学園に転入することを決めたのだ。

「それにしてもすごいよな」

その声を聞いたとき、少女はびっくりと反応した。男性の声、その声は自分のよく知っている人物の声だったのだから。

「いちっ・・・」

少女が声をかけようとしたとき、その男性が誰かと話しているのが見えた。

「え!？」

そして少女は驚愕した。それは無理はないだろう。そこには7人の生徒が話をしていて。そのうちの4人が男子生徒だったのだから。

現在ISを動かせることが知られている男子生徒は織斑一夏ただ1人。なのに、目の前にIS学園の制服を着た男子が他に3人もいる。そのことが、少女の動きを止めさせた。

「なんか戦い慣れてるって感じだったよな。中学のときに道場か何かに通ってたのか？」

「いや、俺は3年間野球部だったぜ。ツナと獄寺は帰宅部だったけどな」

「俺、ツナと隼人は俺と同じ帰宅部だったのにそんなに強いんだよ・・・」

「まあ、いろいろあったからね」

「それよりツナさん。この後布仏さんが食堂に来てっていつてましたよ」

「それじゃ、急いでいこう」

そう言つて7人は食堂に向かつていった。

「どうなつてんのよ・・・」

そうつぶやきながら少女は受付を探しに向かった。そして、すぐに受付が見つかった。

「ええつと・・・これで手続きはすべて終了です。IS学園へようこそ。鳳鈴音さん」

「ええつと、さつき男子生徒が4人もいたんですけどなんですか？男子でISが動かせるのつて織斑一夏だけだったんじゃない・・・」

「なんでもつい最近適正があることがわかったらしいわよ」

「へえ・・・男子生徒つて何組なんですか？」

「全員1組よ。男子生徒の1人の沢田君がクラス代表なのよ」

「そいつ、まともにIS動かせるんですか？」

「動かせるも何も代表候補生を倒して代表になったのよ。初めてISに乗つて、しかも初期設定の機体でね。ありえないわよね」

「!?!?・・・あの・・・私のクラスって何組ですか？」

「2組ですよ。沢田君たちとは隣のクラスですね」

「2組のクラス代表って誰ですか？」

「ええっと・・・聞いてどうするんですか？」

そう受付の人が聞くと少女は闘争心を湧き出しで言った。

「クラス代表変わってって頼もうと思って」

第6話（後書き）

各自の戦闘シーンが短すぎたかも・・・
次回は設定になります。

設定2（前書き）

山本のワンオフ考えるのに時間がかかった・・・

設定2

獄寺隼人

年齢・・・16歳

並森中学校卒業後はツナと同じ並森高校に入学。数々の抗争を経て、中距離戦だけでなく、近距離戦・遠距離戦にも磨きをかけた。

性格は相変わらずツナを侮辱する人間、敵対する人間には容赦しないが、以前、9代目嵐の守護者であるコヨーテより、過度のツナへの態度を指摘され、抗争に参加しつつ時間が空いたときはコヨーテから

仕事のことにについて教えられるとともに性格改善のトレーニングと受けていたため原作よりもツナへの依存はなく、落ち着いた性格となった（了平やランボとのやり取りは相変わらずだが）。

専用機・・・テンペスタ

中距離・遠距離戦を得意とした機体。赤い厚い装甲が特徴で使用武器は銃、ロケットボム、ライフル。

銃は装着型が一丁、通常の拳銃が二丁、接近戦用のものが二丁である。それぞれの銃は通常弾、拡散弾、グレネード弾に換装可能。ライフルはコールすると両肩に呼び出される。

ワンオフアビリティ・・・疾風

3分間の間、弾丸の使用制限がなくなり、武器の速度も上昇する。エネルギー効率も格段にようになるが3分たつと防御力が格段に低下してしまう。

山本武

年齢・・・16歳

並森中学校卒業後はツナと同じ並森高校に入学。野球部に所属し、一年生ながら野球部で4番を務める。

抗争の中で時雨蒼燕流を鍛え上げ、新たに特式十三の型を編み出した。

専用機・・・ピオツジャ

近距離を得意とし、中距離にも対応している機体。機体の色は青。武器は時雨と蒼燕という名の2振りの刀。2振りの鞘が腰に装備されている。

時雨と蒼燕はナノマシンを用いて大気中の水を操り、振るとそこから水柱を発生させることができる。

着物のような装甲と背中の小さめの二基のスラスターが特徴。

ワンオフアビリティ・・・村雨

不可視の斬撃を広範囲に飛ばすことができる。ただし、エネルギー効率が悪いため多用はできない。

クローム髑髏

年齢・・・16歳

中学は黒曜中だったが、高校に進学の際に並森高校に進学。京子やハルとともに並森高校の人気者トップ3になっている。

抗争を経て、幻術の精度が上がり、今ではマーモンに勝るとも劣ら

ない実力になった（骸やフランはさらに上）。

専用機・・・スペクトロ

特殊な戦闘方法を得意とする機体。機体の色は藍色。他の機体とは違い、ワンオフアビリティーを使った戦術を主とする。メイン武器は三叉槍。他のISより装甲が薄く、スラスターが小さいのが特徴。そのため、防御力が低い。

ワンオフアビリティー使用の際、背中のスラスターが自動で静霧に切り替わる。

ワンオフアビリティー・・・幻影

自分の姿を見えなくし、ハイパーセンサーにも感知されない。エネルギーをほとんど消費しないのが特徴。

特殊スラスター『静霧』

幻影が発動しているときのみ使用できるスラスター。ブースト音などがしないため、幻影と組み合わせるとよほどの熟練者でないと気づくことは不可能となる。

ヴェル・オルク

年齢・・・16歳

イタリアの国家代表候補生。金髪碧眼が特徴で一年前に家族がマフィア同士の抗争に巻き込まれ死に掛けたところを、抗争を止めるために参加していたツナによって救われた。そのため、ツナに強い憧れを抱いている。

専用機・・・アイギス？

イタリアの訓練機であるアイギスを改造したもの。カラーリングは白銀で待機状態は銀色のチョーカー。アイギスは防御力が他の訓練機より優れているが、その分機動力が劣っている。アイギス？はその欠点の一つである

機動力が改善されているがそれでも他の専用機と比べると遅い部類に入る。また、アイギスは基本武器が剣なのに対し、ヴェルは大鎌シルバー・サイズを使用している。ヴェルの大鎌『銀色の大鎌』はエネルギーを破壊能力に変換し、放出できるがエネルギー効率が悪い。

設定2（後書き）

守護者のワンオフはそれぞれの使命を参考にしました。
ご意見・感想お待ちしております

第7話

「沢田君。クラス代表おめでと〜！」

「おめでと〜！」

ぱん、ぱん。クラスメイトの持ったクラッカーが乱射された。
今日はクラスメイトがツナがクラス代表に決まったことを祝って就任パーティーを開いていた。

「ええつと・・・ありがとう？」

「沢田君テンション低いよ〜！」

「というか何でこんなにいるの！？あきらかにうちのクラスメイトだけじゃないでしょ〜！」

周りを見れば就任パーティーに来ている生徒であふれていたがどうみても人数が多すぎる。というか上級生のリボンをつけている人も見受けられる。

「気にしたら負けだよさわわん」

「いや、気にするでしょ〜！というか布仏さん、なにさわわんって！？」

「さわわんはさわわんだよ〜」

「てめえ！10代目に変なあだ名つけんじゃねえよ！」

「細かいこと気にしたら負けだよごっくん」

「ごっくんってなんだよ!？」

「あはは」

本音はどこ吹く風だった。ちなみに山本はやまもん、クロームはくーちゃんらしい。

「いや、それにしてもラッキーだね。これでクラス代表戦ももりあがるよ」

「だよ。せつかくクラスに男子がいるんだもん。代表にしない手はないよね」

「そうそう」

そう言つて主役のツナよりも他のメンバーのほうが楽しんでいるようだった。そこに上級生のリボンをつけた生徒がやってきた。

「はい、新聞部です。ニュースで報道されなかった謎の男子生徒たちのインタビューに来ました！」

そう女性と言うと周りの生徒たちのテンションが一気に上がった。

「あ、私2年の薫子。新聞部の副部長やってます。はい、これ名刺」

そういつて薫子はツナに見た目が派手な名刺を渡した。

「じゃあ沢田君。クラス代表になった感想を一言!」

そういつてツナはボイスレコーダーを突きつけられた。

「え〜と・・・一生懸命がんばります」

「つまんないぞ〜。もつとなにかないの? なんでもいいよ?」

「じゃあ、俺の友達を傷つけることは許さない」

そういつたツナの顔はさっきがんばりますといったときの顔とは違い強い意思の宿った顔だった。その顔を見た女性とのほとんどは顔を赤らめてしまった。

「? どうかした?」

「っ! な、なんでもない! じゃあ次は獄寺君は?」

「10代目に害をなすものは俺が許さねえ」

「や、山本君は?」

「ま、俺も一緒だな。仲間を傷つけるやつは許すつもりはねえ」

獄寺も山本も強い意思の宿った表情で断言した。周りの生徒たちは顔が沸騰するんじゃないかというくらい赤かった。

「っ! ! じゃ、じゃあ最後に写真とらせてもらってもいい!? 織斑

君とセシリアさんも一緒に！」

「ええ！いいんですの！？あの・・・撮った写真はもらえますの？」

「もちろん！ほら、さつさと並ぶ！」

そういつて、薫子はセシリア、ツナ、獄寺、山本、一夏を握手させた。セシリアの顔はこれ異常なくらい赤くなっていた。

「じゃあ撮るよ。35×51÷24は？」

「74.375だ」

「獄寺君せいかい」

パシャッ。シャッター音が鳴り響いたとき、いつの間にかクラスメイトが全員ツナたちの周りに集結していた。

「あ、あなたたちねー！」

「まあまあ」

「セシリアだけ抜け駆けは無しでしょ」

そう言いながら、クラスメイトはニヤニヤしながらセシリアのことをからかっていた。そして、就任パーティーは10時過ぎまで続いた。

夜中1時過ぎ、ツナは一夏が寝ていることを確認し、獄寺とを見張りに立たせ洗面所で9代目に定時報告をしていた。

「そうか・・・クラス代表になったか・・・それで、何か問題は起こったかい？」

「いえ、これといってまだ問題は起こっていません。今度クラス代表戦があるのでそこで何か起こるかもしれません」

「そうか・・・また何かあれば連絡してくれ」

「わかりました、9代目」

翌日、ツナたちが教室に入ろうとしたとき、なにやらクラスメイトたちが騒いでいた。

「おはよう。何かあったの？」

「あ、沢田君おはよう。なんか2組に転校生が来たらしいよ？」

「転校生？こんな時期に？」

「そうみたい。珍しいよね、沢田君たちはしょうがないとしても。なんでも中国の代表候補生みたい」

「何者でしょう・・・少し見てきますね」

「その必要はないわよ！」

獄寺が教室を出ようとしたとき、小柄なツインテールの女生徒が入ってきた。

「鈴・・・？お前鈴か！？」

「そう！中国代表候補生鳳鈴音！今日は宣戦布告に来たってわけ！それでこのクラスの代表の沢田って誰？」

「俺だけど・・・そろそろ自分のクラスに戻ったほうがいいと思うよ・・・」

「なんで・・・」

「さつさと自分のクラスにもどれ馬鹿者」

スパアアアン！

鈴が何か言おうとしたとき、後ろから勢いよく出席簿が振り下ろされた。

「痛ーーーーー！誰よいきなり！？」

「私だ馬鹿者」

スパアアアン！

再度鈴の頭に出席簿が振り下ろされた。

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生だ馬鹿者。さつさと自分のクラスに戻れ」

「は、はい・・・2人ともまた来るから逃げないでよ！」

「さつさと戻れ」

千冬に追い出される形で鈴は自分のクラスに戻っていった。

「あいつ・・・いつの間に国家代表候補生になったんだ？」

「おい、一夏。あいつは誰だ？やたら親しそうだったが・・・」

「お、織斑君。あのこと一体どういう関係！？」

鈴が出て行った瞬間、箒を中心にクラスの女子から質問攻めにあうところで、全員の頭に千冬の出席簿が炸裂した。

「さつさとお前らも席に戻れ！SHRを始めるぞ！」

そう千冬が言うと全員が慌てた様子で席に戻っていった。

時は進んで昼休み、

「お前のせいだー！」

「なんでだよ・・・」

一夏は箒が怒っている理由が解らなかった。箒は授業中一夏と鈴の

関係が気になり、まったく授業に集中できていなかった。そのせいで、山田先生から5回注意を受け、千冬の出席簿アタックを3回も受けていた。

「とりあえず学食に行こう。さっきの子も待っているかもしれないし・・・」

「そうですね、行きましょう」

「そうだな。箸はどうするんだ？」

「お、お前がそういうなら・・・」

そう言っただけのメンバーで学食へ向かった。

「待ってたわよ、あんたら！」

学食へ向かったら案の定鈴がラーメンを持って待っていた。

「ほら、そこにいたら食券が買えないだろ」

「わ、わかってるわよ・・・」

そう言って鈴は渋々その場を動いた。そして、全員が食事を買った全員が座れそうな大きなテーブルに腰を下ろした。そのテーブルの周りには何故かクラスメイトが多数見受けられた。

「いつ戻ってきたんだ？驚いたぞ」

「ほんの2日前よ。中国に戻った後、すぐに代表候補生になったの

よ。私こそ驚いたわよ、あんたがIS動かしたってニュースで見るときは」

「ああ、あれは・・・」

そう言つて一夏は自分がISを動かすことになった経緯を話した。

一夏は本来藍越学園を受けるはずだった。本当なら千冬に養つてもらうのが心苦しかったため中学卒業と同時に就職したかったのだが、千冬に止められたため学費が安く、就職率のいい藍越学園を受けようとした。

しかし、一夏は試験会場で誤つてIS学園の試験会場に入つてしまい、そこにあつたISに興味半分で触れたらISが反応し、そこを試験官に見られてしまったのだという。

「そうだったんだ・・・ところであんたらは？」

鈴はツナたちのを向いて言った。

「一夏の経緯はわかったけどあんたらは？一夏みたいにニュースにもなつてなかったし」

「俺たちは一夏がISを動かせたんだから他にも男性でISを動かせる人がいるかもしれないって政府のお偉いさんが考えたらしくて、適正審査を受けてみたら俺たちにも適正があることがわかったんだ。ニュースになってないのは、俺たちに適正があるってわかったのが入学式の3週間くらい前だったから、今騒ぎになると入学式に間に合わないかもしれないからっていう考えたからみたいだよ」

「ふん」

そんなことを話していると、箒が我慢できないといった様子で一夏の前に来た。

「一夏、そろそろこいつとの関係を聞かせてもらいたいのだが？まさか、こいつとっ、っ、付き合っているのか！？」

「べ、べつに一夏と付き合っているわけじゃ・・・」

「そうだぞ。鈴とはただの幼馴染だよ」

なぜか一夏は鈴ににらまれてしまった。

「？どうした？」

「なんでもないわよ！」

「幼馴染？私は知らないぞ！？」

「箒とは入れ違いに転校してきたんだよ。箒が転校したのが小学4年の終わりだろ？鈴は小学5年の頭に中国から転校してきたんだよ」

「一夏、こいつ誰？」

「篠ノ之箒だよ。話したことあるだろ？俺が昔通っていた剣道場の先生の娘だよ」

「そう・・・初めまして、篠ノ之さん。鳳鈴音よ、鈴って呼んで」

「篠ノ之箒だ。私のことも箒でいいぞ」

そういつて2人は握手をした。その後ろには龍と虎が映っているように見えた。

「そういえば、沢田だっけ？あんたが1組のクラス代表なんだって？」

「そうだよ。あと、俺のことはツナでいいよ」

「じゃあツナ、あんた代表候補生を初期設定の機体で、それもISを初めて動かしたのに勝ったって本当？」

「本当だよ。ただ、セシリアさんが俺のことを侮っていたからそういう結果になったってだけだよ。侮ってなかったら絶対に無理だったと思う」

「ふん、まあ油断している時点で負けだけだね」

「ぐっ！」

事実なため、言い返すことのできないセシリアは苦虫をかみ締めたような顔をした。

「ねえ、一夏？代表になれなかったらあまり試合する機会なんてないでしょ？よかったあたしが相手になるっか？」

「ああ、でも・・・」「一夏には私がいる！じきじきに頼まれたからな！！」「」

「あたしは一夏に聞いているの。部外者は引っ込んで」

「私は一夏の幼馴染だ！部外者などではない！！」

「あたしも一夏の幼馴染だけど」

「2人ともちよつと落ち着けよ」

一夏が2人を静止しようとしたが2人は止まらなかった。

「一夏！私とこいつどっちに教えてもらいたいんだ！？」

「そつよ！はつきりしなさいよ！！」

一夏が2人に言い寄られて困っているとツナが助け舟を出した。

「2人ともココ食堂だよ。もうちよつと静かにしようよ。それに、

一夏に教えてるのって篠ノ之さんじゃなくて武でしょ」

「ぐっ！」

「武って誰？」

鈴は知らない名前に首をかしげた。

「俺だよ。山本武ってんだ。そっちの銀髪のやつが獄寺隼人で、眼帯付けてんのがクローム髑髏ってんだ。よろしくな」

「あんたも初心者でしょ？なら代表候補生のあたしが教えたほうがいいと思うんだけど？」

「教えるつつつても、今は基本操作に慣れるためにガチンコで戦っ

てるだけだしな。複雑な操作教えるのってそれからじゃねえか？」

「じゃあこうしましょ。今度やるクラス代表戦であたしがツナに勝ったらあたしが見るってことで。ツナが勝ったらあんたらが見る。それでいい？」

「いいよ。ところでもうすぐ昼休み終わるけど大丈夫？」

「「「へ？」「」「」

そう言つて鈴、箒、一夏が時計を見ると午後の授業開始10分前になっていた。ツナたちはすでに食べ終わっているが3人は話に夢中だったためほとんど食べていない。

「ちよつ！何で言わないのよ！？」

「いや、わかっているものかと思ってたから。俺たち次織斑先生の授業だからもう行くね」

その瞬間一夏と箒の顔が青くなった。千冬の授業に遅れるなんて腹をすかせたライオンの前に肉を放り込むようなものだ。自殺行為以外の何物でもない。

結局一夏と箒は遅刻して、出席簿アタックとグラウンド10週を命じられた。

時は進んで5月。ついにクラス代表戦当日となった。ツナ、獄寺、

山本、一夏の4人はビット内で対戦相手が決まるのを待っていた。

「初戦は誰になるんだろう?」

「誰だろうと10代目なら大丈夫っすよ!」

「だな、いつも通りにやれば大丈夫だろ」

「がんばれよ、ツナ」

「うん。ありがとう」

そんな会話をしていると対戦カードが決定したようだ。ツナは第1試合で対戦相手は鈴だった。

「最初から鈴が相手か・・・」

「ま、手間が省けたからちょうどいいだろ」

「いつてらっしゃいませ、10代目」

「ああ、いつてくる・・・(二人とも、一夏のことは頼んだぞ)」

「(任せてください、10代目)」

「(任せておけ)」

ツナは小声で一夏のことを2人に託し、ビットから飛び出していった。

「待つてたわよ」

「すまない。遅くなった」

ツナがフィールドに出たとき、すでに鈴は上空で待つていた。ツナのモニターに鈴のISの情報が映し出された。

「近接格闘型・・・甲龍」

「そうよ、中国が開発した第3世代機。エネルギー効率を重視した機体だから持久戦はこっちが有利よ」

「なら、長引かせなければいい」

「・・・いつてくれるじゃない」

『それでは、始めてください』

「先手必勝!!」

開始の合図とともに鈴が双天牙月を持ってツナに突っ込んできた。それをツナは右に回避し、背中に蹴りを放とうとした。しかし、ツナが攻撃を避けたのとはほぼ同時に、鈴の肩アーマーがツナのほうを向きスライドして開いた。その中心の球体が光った瞬間、ツナの超直感が警報を鳴らした。それに従い、ツナは上空へ飛び上がった。

次の瞬間ツナのいた位置に圧縮された空気のようなものが通り過ぎていった。

「ちい!!」

肩アーマーの中心の球体が光るたび、ツナは上下左右に回避行動をとった。そのたびに圧縮された空気のようなものが通り過ぎた。

（あの肩アーマーが何かを打ち出しているのか？）

ツナはそう推測すると掌を鈴の肩アーマーに狙いをつけ、エネルギー弾を数発打ち出した。

「くっ！」

鈴はそれをギリギリのところで回避する。ツナはその間に鈴に接近し、エネルギーが収束した右手で右の肩アーマーを殴り、粉碎した。

「っ！龍砲が!？」

「まだだ！」

鈴が驚いている間にツナは鈴の右肩に手を置き、それを軸にして回転し鈴の頭上めがけて蹴りを放った。避ける術のない鈴はまともにその蹴りを喰らってしまい、地面に落下していった。

くモニタールーム内く

現在獄寺、山本、クローム、一夏、箒、セシリア、ヴェル、千冬、山田先生がモニタールーム内の巨大モニターでツナの試合を観戦していた。

「鈴の肩の武器って何なんだ？」

「あれは、衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出しているのですわね。厄介なのは砲身も砲弾も見えないということなのですが・・・」

「では、何故沢田は避けることができているのだ？」

「微妙な空気の歪みを感じとってるんだろう。あとはまあ直感だな」

「直感ってそんなので避けれるはずはないと思うんですけど・・・」

「10代目ならそれができんだよ。あの人の直感は俺らのそれとは比べるのもおこがましいほど優れている・・・それよりそろそろ終わるぞ」

獄寺の言葉に、一同は再びモニターを見入った

「フィールド内」

「はあはあはあ・・・」

鈴は自分の機体状況を確認した。右肩の龍砲が破壊され、シールドエネルギーも龍砲の破壊と地面への激突により、残りエネルギーは2/3を下回っていた。対してツナは、ほとんどエネルギーを消費していなかった。

「あ、あんた本当にIS初心者なわけ？」

「ああ、まだ乗って1月もたっていない」

「何でそんなに強いのか？空中戦にも慣れてるみたいだし・・・」

「空中戦は・・・まあある事情で慣れている。あと、俺は強いな
い」

「よく言うわね、それだけの力を持っておきながら・・・」

「この力は俺だけのものではない。俺だけではこの力を手に入れる
ことなんて不可能だったから・・・」

「?どういうこと?」

「その質問に対しての答えなんてない。答えは人それぞれだから・
・それより行くぞ」

ツナが鈴に突っ込もうとしたとき、何かがアリーナのシールドを突
破してきた。

第7話（後書き）

次回で第一巻は終了となります。

おそらく、明日には上げられると思います。そのときまでにヒロインは決定したいと思います。

それでは、次回もよろしく願います

第8話（前書き）

更新するといってから4日もたってしまった・・・

第8話

「なっ！なんなの！？」

鈴いきなりシールドエネルギーを突破してきた何かに困惑していた。幸いそれが降ってきた場所は2人の位置から離れていたため2人は無事だった。しかし、すぐに異変は起こった。チエーリから緊急警報が鳴り響いた。

『警告。所属不明のISにロックされています』

「っ！」

ツナは警告が鳴り響いたのと同時に右に回避した。次の瞬間、ツナのいた位置をビームが通り過ぎた。煙が晴れてその犯人を肉眼で認識すると、そいつは黒い全身装甲のISだった。

ツナはそいつを見た瞬間に、違和感を感じがしていた。ツナの超直感には機械相手には通用しない。昔、ミルフィオーレの日本支部の地下アジトに潜入したとき、ツナは4度の戦闘を行った。電槍を操るデンドロ・キラムとの戦い、スパナの作ったストウラオ・モスカ4機との戦い、アリスと死茎隊、ジンジャーとの戦い、そして幻騎士との戦いである。

その中で例を挙げるのならばスパナとの戦いと、死茎隊との戦いだろう。死茎隊はモスカよりも強い相手だったにもかかわらず、ツナはモスカのときよりも優位に戦うことができていた。それは超直感が使えたからである。超直感を使えるのと使えないのでは大きな差あがる。ISは確かに機械だが人間が乗って操縦しているため超

直感が使える。しかし、目の前のISには超直感が使えない。ということは目の前のISは人ではないということになってしまう。

『沢田君、鳳さん！今すぐそこから脱出して下さい！』

プライベートチャンネルから山田先生の声が聞こえてきた。しかし、ツナはその提案を破棄した。

「いいえ、あいつは俺が倒します」

『そ、そんな無茶な！』

「それよりも先生、あいつから生命反応はありますか？」

『？な、何を言って・・・』

「いいから早く調べてください！」

そう言うとツナはプライベートチャンネルを遮断した。

「鈴、お前は下がってろ」

「じよ、冗談じゃないわよ！わたしも・・・」

「今のお前では無理だ」

甲龍は肩アーマーの片方を失って、エネルギーも2/3を下回っていた。未知の敵と戦うにはいいコンディションではないといえる。

「それに、あいつをすぐに倒す気はない」

「！？何言ってるのよ！！あいつのビームは遮断シールドを突破する威力持ってるのよ！！もし万が一客席に飛んでいったらどうすんのよ！？」

「客席には防壁が下りているからまだましなはずだ。それにあいつに攻撃させる気はない」

「な、何を言ってる……」

「鈴は上空で待機していてくれ」

「ちよっ！？」

鈴の返事を待たずにツナは黒いISに向かっていった。

（モニタールーム内）

「沢田君！？沢田君聞いてますか！？沢田君！！」

「山田先生、大丈夫だってツナなら」

「大丈夫って心配じゃないのかよ！？遮断シールド破ってくるような武器持ってる相手に一人で相手にしてるんだぞ！？」

「10代目なら負けねえよ。それよりさっさとあのISに生命反応があるか確認しろよ」

「な、何を言ってるんですか！？するに決まっていますでしょう！！」

「山田君、一応調べてくれ」

「わ、解りました・・・」

そういつて山田先生は黒いISの解析に専念した。

「それにしても沢田は何をやってるんだ？さっきから相手の攻撃を
そらしているだけでまったく攻撃を仕掛けてないではないか」

「・・・たぶん分析結果が出るまで攻撃する気はないんだと思う」

「「「「「！？」」「」「」」

守護者とヴェルを除くメンバーはクロームの言っていることが理解
できなかった。

「ツナはたぶんあのISが無人兵器なんじゃないかって疑ってるん
じゃねえかな。だから攻撃しないんだ」

「山本、どういうことだ？説明しろ」

「そのままの意味っすよ。分析結果が出て、もしあれに人が乗って
いたら相手を無力化するだけだけど、無人兵器だったらコアごと破
壊すんじゃないかな」

「何故だ！何故そんなことをする必要がある！？」

「織斑先生。どこかの国がコアか機体を盗まれたとかいう報告はあ
りましたか？」

「? いやないが・・・。大概そういった類の情報はこちらの耳に入っているはずだからな」

「つまりあの機体のコア未登録のコアである可能性があるってことだ。もしくはどこかの国が何らかの目的で送り込んできたということだ。有人だつたらそいつを無力化して事情を聞きだし、

無人兵器だつたら破壊する。10代目はそういうお考えなんだろう」

「なんでだ? 未登録のコアならこっちがもらってもいいんじゃないか? もしくは委員会のほうに報告すれば・・・」

「10代目はISがあまり好きじゃないんだよ」

その瞬間モニタールーム内の空気が凍りついた。ISに乗っている人間がISを好きではないなんて矛盾した考えを持っていることが理解できなかった。

「な、何故なんですか?」

「ISには絶対防御って機能がある。その機能は操縦者が死なないようにするための機能が」

「そ、それがどうかしたんですか?」

「つまり力の使い方を誤っている人間が自分の命を賭けることなく誰かの命を簡単に奪えちまうってことだ。快樂殺人者だろうと誰だろうと女になら簡単に殺めることのできる力を与えちまう。ISってのはそういう存在だ。だからこそ10代目はISが好きじゃねえんだ」

獄寺の言葉に一夏たちは絶句した。自分たちも、そしてこの世界の誰もそんなことは考えすらもしていないだろう。そんな考えをまだ16歳の子供が考えている。そのことに驚きを隠せなかった。

「か、解析結果出ました！あのISからは生命反応がありません！」

山田先生の報告に全員が絶句する。無人兵器のISなどこの国も開発などしていないからだ。

『10代目！！』

獄寺はすぐにツナにプライベートチャンネルを繋いだ。

「アリーナ上空」

ツナは黒いISと格闘戦をしていた。格闘戦を挑むことにより相手の注意を自分に絞込み、手からビームを放とうとすれば腕を攻撃し狙いを自分からも観客席からはずす。格闘戦をしながらツナの予想がだんだんと確信に変わってきた。

超直感が発動していない。

それはつまり相手が生物ではないことを示している。だからといって安心はできない。ヴァリアー戦でゴーラムスカの動力源となっていた9代目のことを思い出していた。

あの時も超直感が発動していなかった。だから相手が機械人形だと

思い込み容赦なく攻撃した結果、9代目に重傷を負わせてしまった。故にツナは解析結果が出るまで徹底的に防御に専念していた。そのとき、プライベートチャンネルから獄寺の声が聞こえてきた。

『10代目！奴からは生命反応はありませんでした！確実に無人兵器です！！』

その瞬間今まで防戦一方だったツナが攻撃に転じた。背中 of 4基のスラスターをフル稼働させ、黒いISに接近した。黒いISが長い右手をツナの方へ向け、ビームを放つ。

ツナはそれを避けることなく、自分の目の前で零地点突破改の構えを取り迎え撃つ。

ドゴオオオオオオン！！

遮断シールドを突破するほどの威力を持ったビームがツナを直撃した。

「な、何で避けないのよ!？」

鈴が慌ててツナに近づこうとすると異変に気づいた。煙が晴れると、そこにはエネルギーの球体のようなものがありその中心にツナがいた。

だんだんとその球体が小さくなっていき、その球体がツナの手で作られた四角の中心に消えていきツナが指を鳴らした瞬間、ツナの拳から、4基のスラスターからエネルギーがあふれ出した。

それを鈴たちが認識するよりも速くツナは再び黒いISに向かって行った。そのスピードは先ほどよりもさらに速かった。ツナは黒いISの懐に入り込むとエネルギーを纏わせた拳で殴りつけた。

避ける術を持たない黒いISはそのまま後方へ吹き飛ばされる。

ツナの攻撃はこれだけでは終わらない。そのまま追撃し、黒いISを地面に叩きつける。そしてそのまま上空へ移動すると右手を後方に突き出しエネルギーを噴出させた。右手から吹き出たエネルギーはいままでツナが使っていた力強いものではなく、粒子のようなやわらかいものだった。そして左手を黒いISに向けエネルギーを溜める。

黒いISが異変に気づき、ビームをツナに向かって一斉に放つ。

しかし、遅かった。ツナはすでに準備を整え終わっていた。後はそれを放つだけ……

「Xバーナー・エア―！！」

その掛け声とともにツナの左手からエネルギーの奔流が放たれた。現在ツナはコンタクトもイヤホンもしていない。故にXバーナーを本気で放つことはできない。それでもこの無人兵器を破壊するには十分すぎた。そのエネルギーの奔流は、黒いISの放ったビームをいとも簡単に飲み込み、黒いISを飲み込んだ。

ドガアアアアアアアン！！

激しい轟音とともにアリーナ全体に煙が充満する。そして煙が晴れるとその光景を見ていた守護者以外のメンバーは絶句した。

破壊された黒いISを中心に巨大なクレーターができていた。そのクレーターは観客席にギリギリ届かない位置まで広がり、深さも10m以上あるであろうというほど巨大だった。

中心にはコアごと破壊された無残なISの残骸が転がっていた。

「・・・・・・・・」

鈴は目の前の光景に顔を青ざめていた。これがISに乗って1月しかたたない人間のできることか？おそらくあの無人ISは自分が万全の状態であつたとしても1人で倒すのは無理だつた。それどころか代表候補生が2、3人束になつてようやく勝てるかもしれない、そんな相手だつた。にもかかわらず目の前の、ISに乗って1月しかたたない男子が圧倒した。その事実には鈴は呆然とするしかできなかった。

「鈴、無事か？」

「っ！だ、大丈夫よ」

「そうか・・・よかった。早く戻るぞ」

鈴はツナに言われるままに、ビットに戻っていった。

「10代目！お怪我は？」

「大丈夫、怪我はしてないよ」

ツナはビットに戻るとすぐに千冬からモニタールームにくるようにな言われた。そして着くと怪我をしていないかと心配する守護者に迎えられた。モニタールーム内には他にも一夏、ヴェル、セシリア、千冬、山田先生、箒に鈴がいた。なにやら箒は機嫌が悪そうだった。

「沢田、お前にいくつか聞きたいことがある」

「何？篠ノ之さん」

「お前は最初のほうは格闘戦であのISの動きを封じるだけで反撃しなかったが、いつでも破壊しようと思えば破壊できたのか？」

「・・・できたよ」

「何故破壊しなかった？」

「あれが有人であつたかもしれないから。それだけだよ」

その言葉を聞いた瞬間、箒は我慢の限界を超えてしまった。

「っ！ふざけているのか！？何故さつさと破壊しなかったんだ！？最初からあの技で攻撃していれば簡単に仕留められていただろう！観客席にはまだ避難できていなかった生徒が大勢いたんだぞ！？」

「あの技はまだ上手くコントロールができていないんだ。有人だつたら下手をしたら操縦者も無事じゃすまなかったかもしれない」

「たとえ有人だつたとしても、そいつは相手は学園を襲ってきた犯罪者だぞ！？そんなやつを庇って・・・」

「篠ノ之さん、いい加減にしようよ」

箒が何かを言おうとした瞬間、ツナから怒気があふれ出した。その怒気に当てられ、守護者を除くメンバーは、千冬でさえも冷や汗を流していた。

「犯罪者だつたらどうなつてもいいの？」

「そ、それは・・・」

「救える命を救おうとしなかったらそれだけで罪だ。それに学園を襲ったことが操縦者の意思とは関係なかったらどうするの？」

「な、なにを・・・」

「操縦者が操られていたかもしれないしISの暴走かもしれない・
・そんな状況でもその人が犯罪者だって言い切れる？」

「っ!!」

箒はツナの言葉に反論することができなかった。

「被害状況はどうなってますか？」

「観客席にいた生徒は全員避難は完了している。けが人もいない」

「そうですか。よかった・・・」

「私からもいいか？」

「何ですか？織斑先生」

「考えなかったのか？自分が死ぬかもしれないということは」

「考えましたよ。けど俺は誰かの命を見捨ててまで自分が助かるうとは思わない。もし、そんなことをしたら俺は死んでも死にきれな

い。それだけです」

ツナの言葉に誰もが息を呑んだ。何でこの少年はこんなにも優しくて強いのだろう……

その場にいた多くのメンバーはそう思っていた。

「話は以上ですか？」

「あ、ああ。アリーナの整備のほうはあとで業者に頼むつもりだから気にするな。後で報告書を書いてもらうことになるかもしれないが……」

「いいですよ。それじゃ、行こうか」

そう言ってツナと守護者たちはモニタールームをあとにした。

〈ISS学園生徒会室〉

「沢田綱吉君……ねえ」

部屋の主である蒼髪の少女は役員に頼んで調べてもらったツナの報告書を読んでいた。ISSに乗ってまだ1月しかたっていないのに候補生を圧倒できる実力を持っている。

中学、高校と武芸をやっていないにもかかわらず。そのことがきっかけでツナに興味を抱いていた。

「なんか面白そうね、彼」

そう言った少女の口元には笑みがこぼれていた。

第8話（後書き）

かなり早めにあの人を出すことにしました。

あとヒロインですが皆様からのご要望により楯無にします。
今後ともよろしく願います

第9話

「ツナたちの部屋」

「それにしてもツナって強すぎねえか？」

「そうかな？」

「ISに乗って1月で候補生2人に圧勝って普通ありえないだろ？」

「俺は負けるわけにはいかないからね。いろいろと」

「ふうん・・・それよりツナたちって部活とか入らないのか？どこかの部活には入らないといけないみたいだけど」

「俺は決めてないかな？武は野球部？」

「だな。バットがもう恋しいぜ」

「お前が入ったら試合にならねえだろーが」

「そんなにすごいのか？」

「中学3年の県大会で3試合全打席ホームランで3試合全打席敬遠だったよね」

「・・・なんか武が入ったらやばそうだな」

そんなたわいもない話をしていると部屋のドアがノックされた。――

夏があげるとそこには箒がいた。

「箒か、どうかしたか？」

「あ、ああ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「用事がないならもういいか？」

「用事ならある！」

箒が大声を出したので一夏だけではなく、部屋の中にいたツナたちも驚いた。

「ら、来月の学年別トーナメントだが・・・私が優勝したら・・・つ、付き合ってもらおう!!」

「・・・・・・・・へ？」

一夏がまともな返事をする前に箒は全速力で部屋に戻っていつてしまった。

「・・・・・・・・なあ、付き合うつて何に付き合えばいいんだ？」

「買い物じゃねえか？」

「・・・・・・・・篠ノ之さんの言ってた付き合うつてそういう意味なの？」

「・・・違うと思います。10代目・・・」

一夏と山本は箒の言っていた意味がわかっていないようだった。

その後箒の言葉を気にしないで寝ることにした。

翌日、ツナたちが教室に入るとなにやらクラスが騒がしかった。女子たちが集まってなにやら話しているようだった。ツナはその女子の一角に声をかけることにした。

「おはよう、何かあったの？」

「ふえ！？」

ツナは普通に挨拶をしたつもりだったのだが声をかけた生徒はとても驚いた様子だった。声をかけた生徒だけでなくクラスメイト全員がなにやら慌てふためいていた。

「あ、沢田君ちようどいいところに！あのぎゅう・・・」

近くにいた生徒が何かを言おうとしたところで周りにいた生徒に口をふさがれてしまった。

「？なにかあったの？」

『うつん！！なんでもない！！』

クラスにいた生徒全員から言われてしまったためツナは下がること

にした。

「なにをしている！？さっさと席に着け！！」

ちょうどそのとき、千冬と山田先生が教室に入ってきたため、立っていた生徒は慌てて席に着いた。

「え」と、今日は転校生を紹介します。2人とも、入ってきてください！」

そう山田先生が言うと2人の転校生が入ってきた。1人は背が低めで片目に眼帯をしている銀髪の少女、もう一人は金髪碧眼で長い髪を後ろで束ねている男子の制服を着た生徒だった。

「お・・・男？」

「皆さん初めまして。シャルル・デュノアといいます。これからよろしく願います」

そう、シャルルが挨拶すると教室から歓声が上がった。

「きゃ~~~~！！男子生徒！5人目！！」

「沢田君に近い守ってあげたくなるタイプ！！」

「あ~~~~！！生まれてきてよかった~~~~！！」

「うるさいぞ！静かにしろ馬鹿者ども！！」

千冬が一括すると教室内がさっきの騒ぎが嘘の様に静まり返った。

「えーと・・・ボーディビッヒさん。自己紹介を・・・」

山田先生がそう言っても眼帯の少女は腕を組んで目を閉じたままだった。

「自己紹介をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「私はもう教官ではない。織斑先生と呼べ」

「わかりました」

千冬が声をかけると眼帯の少女はようやく目を開けた。

（教官？もしかしてあいつ・・・）

一夏は少女の言った教官という単語に心当たりがあった。そんなことを考えていると少女が自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・そ、それだけですか？」

「以上だ」

山田先生がなきそうになるのを無視してラウラは教室内を見回した。そして、一夏と目が合うと・・・

「っ！貴様が！」

そう言っで一夏のほうへ歩み寄っていった。

（何か悪い予感がする・・・）

ツナはそう直感し、獄寺たちとアイコンタクトをとった。

ラウラが一夏の目の前で止まると一夏の頬をはたこうと手を振りかぶった。しかし、その手が振り下ろされることはなかった。

「そこまでだよ」

「っ！？」

ラウラが手を振り下ろす直前、ツナがラウラの手首をつかんだ。獄寺たちは一夏のそばに立っていた。

「初対面の相手にそれはないんじゃない？」

「っ！貴様離せ！！」

そう言われてツナはラウラの手を離した。そして、ラウラは一夏をにらみつけた。

「私は認めないぞ！貴様があの人の弟などと！！」

そう言っでラウラは自分の席についた。ラウラが自分の席に着くのを確認した後、ツナたちも自分の席に着いた。

「ぐずぐずするな！1時限目は野外グラウンドでISの機動訓練だ！遅れてきたらグラウンド20週だからな！！それと織斑たちはデユノアの面倒を見てやれ。同じ男なんだからな」

「わ、わかりました」

「君が織斑君だね。僕は・・・」

「自己紹介は後だよ一夏、デユノアさん。早く教室から出ないと」

「そうだな、急ぐぞ」

そついつて、一夏はシャルルの手を握った。

「ひああ！？」

「？どうかしたのか？」

「う、ううん。なんでもないよ」

頬を赤らめているシャルルを不思議に思いながら一夏たちは教室を出て行った。

（どう思う？）

（正直怪しいですね。俺たちみたいなケースは考えにくいですし、織斑のケースだとしてもニュースや噂にすらならないのはおかしいかと）

（何か訳があるんじゃないかねえか？）

（俺もそう思う。デュノアさんからはいやな感じはしないし。9代目に頼んで調べてもらおう）

（そうですね）

（だな）

そう小声で相談した後、ツナたちは一夏とシャルルの後を追った。

「男子は訓練があるたびこの移動だから気をつけないともれなく千冬姉の出席簿アタックがついてくるぞ」

「そ、そうなんだ・・・」

「とりあえず別の要因で急いだほうがいいかも・・・」

「何だよツナ、別の要因って？」

一夏の問いにツナが答えるよりも早く前方の角から複数の女生徒が現れた。

「いたわよ！織斑君たちと噂の男子転校生！！」

「ものども！であえであえ！！」

そう、女生徒が叫ぶところから沸いてきたのか2クラスの数に相当するのではないかという数の女生徒が瞬時にツナたちを囲んだ。

「ちよつ！今授業前だよね！？何でこんなに來てるの！？」

「大丈夫！先生には許可もらってるから！！」

「なにやつてるのその先生！？」

そんなやり取りをしてる間にどんどん女性との数は増えていく。

「きゃー！織斑君や山本君の黒髪もいいけどデュノア君の金髪もいいなー！！」

「獄寺君こっち向いてー！！」

「沢田くーん！！」

女生徒は一夏たちを見て騒いでいるが一夏からしてみたら迷惑なことの出来ない。遅刻してきたら千冬の出席簿が火を噴いてしまう。

（どうする？）

ツナたちはここからどう脱出するか考えていた。ツナたちだけだったらどうにでもなるが、ここには一夏とシャルルがいる。規則違反になってしまうが窓から飛び降りてISを使うか？

「はい、みんなそこまでよ」

集団の外から女の人の声が聞こえてきた。その声を聞いた瞬間女生徒たちは慌てて道を作った。ツナたちが声の主のほうを見ると、そこには扇子を持った蒼髪の女生徒が立っていた。リボンの色から

上級生だろう。

「か、会長!？」

（会長？）

そう、その女生徒はIS学園生徒会長にしてロシア代表操縦者の更識楯無だった。ツナは楯無を見た瞬間、只者ではないと直感すると同時に、理由は解らないがなんとなく自分に似ている感じがしていた。

「彼らは次、織斑先生の授業だから急いでの。目当ての子を傷物にしたくないでしょう？」

そう楯無が言くと女生徒たちは渋々自分の教室に戻っていった。

「さて・・・あなたたちも大変だったわね」

「い、いえ。ありがとうございました」

楯無しの言葉にツナは素直に礼を言った。

「いいのよ気にしないで。私は更識楯無。この学園の生徒会長をやっているわ。みんなのことは知っているわ、有名だし。よろしくね」

「こ、こちらこそ」

そんな挨拶をしていると一夏が慌てた様子でツナに話しかけてきた。

「ツナ!急がないと時間が!..」

「わかった。すみません、ありがとうございます！」

そういつてツナたちは全速力で更衣室に向かった。

取り残された楯無はツナを見て微笑んでいた。

「からかいがありそうね、あの子。それより……」

楯無はツナを見て不審に思っていた。さっきのやり取りの間、ツナには全く隙がなかった。武芸の心得のない人間が到底できるものではない。

（報告では確かに武芸の心得はなかったはず……なのに何で？）

そんな疑問を胸に、楯無も自分の教室に戻っていった。

「さて……遅れてきたのには何か理由はあるのか？ 弁解なら聞いてやるぞ？」

結局ツナたちは遅れてしまった。更衣室で自己紹介を済ませた後、ツナは9代目にシャルルの調査を頼んでいたために、獄寺と山本はその付き合いいで、一夏とシャルルはツナたちが9代目と連絡をしている間に、一夏がバランスを崩してシャルルと抱き合う形になってしまい、それに驚いたシャルルが一夏にボディーブローをかまし、一夏が気を失ってしまったからである。

だが、流石にそんなことを言うわけにはいかないのでツナは更衣室に向かうまでに起こったことを話すことにした。

「えっと・・・更衣室に向かう間に大量の女生徒に囲まれてしまつて、生徒会長に助けられたのでお礼を言っていたら遅くなつてしまいました」

「あいつが？それより、お前らが更衣室に行つたのはS H Rが終わつたらすぐだろう。他の生徒は授業の準備をしていたはずだが？」

「なんか担任の先生が許可したらしく・・・」

そのことを聞くと千冬は頭を抱え、ため息をついた。

「全く、何処ののクラスだ・・・理由は解つた。今回は見逃すが次はないと思えよ」

「すみませんでした」

そう言つてツナたちは1組の列の1番後ろに並んだ。今回は2組と合同訓練で、2組は1組の後ろに並んでいたがツナたちのスペースが開いていたのでそこに並んだ。

「さて・・・これより専用機持ちに実演を行つてもらふ。鳳、オルコット前に出ろ！！」

「何で私たちなんですか！？」

「そうですわ！綱吉さんたちだつて専用機持ちではありませんか！
！」

「織斑は初心者だから論外、デュノアとボーデヴィツヒは今日転校

してきたばかりだし、沢田たちに関してはお前らよりも実力が上だ。自信をなくしてもいいんならそれでも構わんぞ？・・・まあそれならそれであいつらの実力が測れるからいいがな（ボソツ）」

「いいわよ！できるものならやってみなさいよ！！」

「あの・・・鈴さん・・・わたくしたち、綱吉さんに完敗しているのですから」

「けど、自信を失うほどではないわ！私たちが自信を失うほど強いんなら見せてもらおうじゃない！！」

「決まりだな。時間的に1試合しかできない。沢田と山本に実演してもらうがいいな？」

「わかりました」

「俺もいいっすよ」

こうしてツナ対山本の模擬戦が決定した。

第9話（後書き）

次回はツナと山本の模擬戦になります。

戦闘シーンが難しいのでうまく書けるか解りませんががんばりたいと思います。

次回もよろしくお願いします。

第10話（前書き）

お気に入り件数が120件を突破していました！
こんな駄作を登録していただきありがとうございます。
これからもよろしく願います。

第10話

「すまないな山田君、せっかく準備してもらっていたのに」

「い、いえ。大丈夫ですよ」

本来、千冬は山田先生に鈴とセシリアの相手をしてもらおうと準備をしてもらっていたが、急遽ツナと山本が実演することになったため、ISスーツからジャージに着替え千冬の隣で待機してもらっている。

その間にツナと山本は準備を終え、上空に待機していた。

「準備はできたか？」

「はい」

「大丈夫ですよ」

「では・・・はじめ!!」

千冬の言葉にツナと山本の気配が一気に爆発した。実演だからといって手加減などしない、抗争に参加していたときと同じ気持ちで戦う。その気配に当てられ獄寺とクロームを除くメンバーは一気に震え上がった。決して一般人が出せる気配ではない。何度も抗争や死ぬ気の戦いを経験し、それに生き残ってきたツナたちだからこそ出せる。そんな気配に千冬や軍人のラウラですら体が震えるのを止めることはできなかった。

ツナと山本が同時に動き出した。最初に仕掛けたのは山本だった。

時雨蒼燕流守式二の型 逆巻く雨

山本は両手に持った刀を振り、水柱を発生させる。激しい勢いとともに水柱がツナを襲う。ツナはそれを上空へ回避するが山本の攻撃はこれでは終わらなかった。

時雨蒼燕流特式十一の型 燕の嘴（ベツカタ・ディ・ローンディネ）

連続で鋭い突きがツナめがけて放たれた。ツナはそれを回避するのではなく受け流す。拳で刀の腹を叩き、刀の機動をずらしていく。

それだけではなく、ツナは刀を持った山本の腕をつかみ、それを軸にし、山本の腹を蹴り飛ばした。

「ぐっ！」

山本は蹴りをまともに喰らってしまったがすぐに体勢を立て直し、両方の刀を鞘に納めた。そして、左手で右の刀を抜刀する。

時雨蒼燕流特式十二の型左太刀 霧雨

山本が抜刀した瞬間に発生した無数の斬撃がツナを襲う。ツナは左の拳にエネルギーを溜め、左手を右手の支えとし打ち出した。

「超高速 Xカノン超連！」

本来のXカノンは死ぬ気の炎の塊を2つ放つ技だが、超連はそれを機関銃のように連射する。ツナの放ったエネルギーの塊の雨の1部

が山本の斬撃を相殺し、残りが山本めがけて飛んでいく。
今度は山本は左の刀を抜刀した。

時雨蒼燕流特式十二の型右太刀 斬雨

この技は山本が対幻術奥義として編み出した技であるが、幻術を使用しない相手にも使用できる。1対1専用の技であるが、山本は太刀筋を乱れさせることで複数の標的に当てることも可能とした。山本は抜刀と同時に発生させた突きの雨でそのエネルギー弾を無力化した。エネルギー弾が爆発し2人を大量の煙が包み込む。しかし、2人はお互いの位置を気配によって感じ取っていた。

ツナはこの戦いが実演ということで、下にいる生徒たちに自分の姿が見えるようにするため両手にエネルギーを収束させ、それを一気に放つことで周りの煙を吹き飛ばした。肉眼によって相手の姿を認識した2人は再び拳と剣を交え始めた。

一方、2人の戦いを見ていた守護者を除くメンバーは茫然としていた。ヴェルは自分の家族の命の恩人の本気を初めて見たことによつて、他の生徒はISに乗って1月で自分たちより強いという現実を、千冬と山田先生ですら、自分では勝てないという現実を目の当たりにしてしまったからである。

「なに・・・あれ・・・」

誰かが茫然としながら呟いたがその問いには誰も答えられなかった。誰もが自分では一生かかっても届かないかもしれない領域に立っている2人による戦いに目を見入られてしまっていた。特に鈴は2人の戦いを見て自信をなくすなんてありえないと豪語していたため誰

よりもこの戦いが鮮烈に映ってしまった。

「なあ隼人・・・あの2人本当に初心者か？」

一夏は何か言葉を紡ぎ出し獄寺に訪ねる。獄寺は戦いから目を離さずに答えた。

「ああ、10代目と山本はまだ乗ってから1月しかたってねえ」

「何であんなに強いんだ？明らかに国家代表クラスだと思うんだが・・・」

「簡単だ、お前らとあの2人とは覚悟が違いすぎる。覚悟は時には何物にも変えられない強力な力となる。少なくともISをファッション感覚に思っていたり、その性能を操れることで越に浸っている奴じゃ勝てるわけねえんだよ」

その言葉は聞いていた多くの生徒の心に刺さったことだろう。しかし、ラウラは納得していなかった。

「私はそんなこと思っていないぞ！」

「だろうな。軍人がそんなこと思っていたら世も末だからな」

「だったら・・・」

「なら1つ聞け。お前にとって強さとは何だ？」

「決まっている！力の大きさこそが強さだ！誰にも負けないことこそが！！」

「そんなことを思っているからお前は弱いんだよ」

「なっ!？」

「お前は昔の俺だ。10代目に出会う前の、1匹狼を気取っていたころの俺だ。だからこそ言わせてもらう。お前は弱い。10代目に出会う前の俺がそうだった様に・・・」

「貴様!!」

「見ていなくていいのか？そろそろ終わるぜ」

「っ!？」

獄寺の言葉に再びラウラは上空で戦っている2人に視線を移した。

2人の戦いはツナのほうが優勢だった。本来、山本は空中戦を主とする戦い方ではない。空中戦も3年前と比べ磨きがかかっているが高速戦闘・空中戦闘を主とするツナとは分が悪い。

お互いにISに乗って1月だがやはり空中戦を主とするツナとそうでない山本とは差が出てしまう。徐々に山本は押されていった。

「がっっ!」

ツナのエネルギーを纏った左拳が山本の腹に直撃、その直後そのエネルギーが解放され山本を襲った。それを避ける術のない山本は吹っ飛ばされてしまった。シールドエネルギーの残量はツナが230、

山本が120を切ったところだった。

（次の1撃に賭けるしかねえな・・・）

ツナも次の1撃で決めるつもりなのか、右の拳にエネルギーを収束させていた。

「行くぜ、ツナ！」

「来い！」

山本は左の刀を納め右の刀に水を纏わせた。水柱を発生させるのではなく留める。2人は同時に仕掛けた。

時雨蒼燕流特式十の型

スコントロ・ディ・ローンディネ

燕特攻

山本がスクアーロスコントロ・ディ・スクアーロの鯨特攻を参考に完成させた技だ。

それに対し、ツナは右手に収束させたエネルギーが巨大な球体を作り出していた。それを山本にぶつける。

「ライトニング・アクセル！！」

ドゴオオオオオオオオオン！！

ツナの放ったエネルギーの球体と山本が衝突し、爆発を引き起こした。大量の黒煙が2人を包み込む。黒煙が晴れて、一同が見たものはツナに抱えられる山本の姿だった。

ツナのライトニング・アクセルの威力が山本の燕特攻の威力を上回ったのだ。そのダメージにより山本のシールドエネルギーが一気に零になり、ISが解除されたところをツナが助けたのだ。

「負けちまったか・・・」

「空中戦で負けるわけにはいかないだろ？」

「はっ、そうだな」

負けたというのに山本はとても清々しい気分だった。

「大丈夫ですか、10代目！」

「俺は大丈夫だよ。武のほうもシールドエネルギーが零になっただけだしね」

「やられちまったな・・・」

「・・・2人ともお疲れ様」

ツナと守護者たちは普通に話しているが、他のメンバーは未だ呆然としていた。あれだけの戦いを目の前で見たのだから無理はない。

「織斑先生、実演はこれで大丈夫でしたか？」

「あ、ああ大丈夫だ。よくやってくれた」

ツナの言葉でようやく千冬が我に返った。

「これより、訓練機を使った搭乗、歩行訓練を行ってもらおう！専用

機持ちがリーダーとなりそれぞれに均等に分かれる！！」

千冬の言葉に我に返った生徒が慌てて移動を始めた。当然というか当たり前というか、ツナ、獄寺、山本、一夏、シャルルのところに集まってしまい、女性の専用機持ちには集まらないという結果になってしまった。

「ふざけているのか、馬鹿者ども！出席番号順に順番に分かれる！沢田、獄寺、山本、織斑の班は5人、他は4人のグループだ！遅かった奴にはグラウンド100周をくれてやる！！」

その言葉に生徒たちは顔を青ざめ、急いで分かれて行った。男子がグループリーダーになった生徒は喜んでいたが、女子がグループリーダーの班だった生徒は残念そうな、ラウラの班の生徒に至っては通夜みたいな顔になっていた。

「・・・どうなっている？」

「いや、みんなで食べたほうがおいしいだろ？」

午前中の授業が終わって昼休み、一夏たちは屋上にいた。今日は天気がいいのでみんなで屋上で食べないかと一夏が提案したのだ。しかし、箒は機嫌が悪そうな顔をしていた。先ほどの授業で一夏の班になった箒はその実習中に一夏を食事に誘っていたのだ。箒は2人きりで食べたかったのだがそんな気持ちに一夏が気づいている筈がなく、みんなで食べたほうがいいからといってツナたちを誘ったのだ。2人きりで食事するつもりだった箒は思わずため息をついてしまった。

「2人きりで食べるはずだったのに・・・」

「箒、何か言ったか？」

「っ！なんでもない！」

「なんなんだよ・・・」

何もわかっていない一夏に向かって箒は怒鳴ってしまった。鈴はその様子を呆れた様子で見ていた。

「一夏、馬に蹴られて死ね」

「なんなんだよ、鈴まで」

「ふんっ」

一夏は2人が不機嫌な理由がわからずに困り果てていた。

「とりあえず昼食済ませちゃおうよ。余り時間もないし」

「だな。早くしないと昼休みが終わっちまう」

「あ、ああ・・・そういえば箒、弁当は持ってこなくていいって言うってたけど・・・」

「お、お前のはこれだ。暇だったから作ってきてやった」

そう言っただけで箒は一夏に弁当箱を渡す。

「え、いいのか？」

「あ、ああ。暇つぶしで作ったものだな」

「そつか、ありがとな箒」

そう言われて箒は顔を赤くしてうつむいてしまった。もちろんその光景を見ていて鈴が面白いはずがない。

「一夏！私も作ってきたわよ！」

鈴は一夏の前に四角いタッパを出した。その中には酢豚が入っていた。

「おっ、これ鈴の手作りか？」

「じ、自分のを作るついでにね。べ、別にあんたのために作ってきたんじゃないんだからね！あくまでついでよ、ついで！」

「お、おう」

顔を赤くしながら怒鳴られてしまったため一夏は慌てて返事をした。何で鈴が顔を赤くしてるのか、一夏にはさっぱりだった。

「あの2人も大変ですわね。と、ところで綱吉さん」

「何？」

「あの・・・わ、わたくしもお弁当を作ってきたんですの。よろし

ければ召し上がってくれませんか？」

そう言つてセシリアがバスケットを渡してきた。その中にはサンドイッチが入っていた。

「いいの？」

「え、ええ。お口に合うか解りませんが・・・」

「ありがとう。それじゃ、いただくね」

ツナはサンドイッチを1つ取り出した。どうやら中身はタマゴのようだ。

「じゃあ、いただきます」

ツナがサンドイッチを1口口にした。

「ど、どうですか？」

セシリアが尋ねてもツナからは返事が返ってこない。

「10代目？どうかしましたか？」

獄寺が不審に思い、肩に手が触れたところでツナが口から泡を吹いて倒れた。

「じゅ、10代目ーーーーー!？」

「「お、おい!どうしたツナ!？」」

「つ、ツナ!？」

「だ、大丈夫綱吉さん？」

「ツナさん!？」

「な、なにっ!？」

「どうした!？」

「どうしましたの!？」

獄寺たちが慌てて駆け寄るがツナからは返事がない。というよりも意識を失っていた。顔も青ざめてしまっていた。

「と、とりあえず保健室に!!」

「おい!お前10代目に何食わせたんだ!？」

「し、失礼ですわね!普通のサンドイッチに決まってますわ!!」

「本当か？」

試しに一夏が別のサンドイッチをつまんでみた。今度のはツナサラダだった。口に含んだ瞬間、一夏も泡を吹いて倒れてしまった。

「い、一夏————っ!!」

「絶対に普通じゃないわよそのサンドイッチ!!何が入ってるのよ

「!?」

「し、失礼ですわね!普通のものに決まっていますわ!!」

「普通って・・・何入れたんだ?」

「ええっと・・・タマゴにはマスタードに白寒天にバニラエッセンスにプリンに・・・」

「「「「「ちよつと待て!!!!!!」」」」」

セシリアがサンドイッチに入れたものを口にすると最後まで言わないうちにその場にいた全員から待ったがかかった。流石に全員に言われるとは思っても見なかったのでセシリアは困惑してしまった。

「な、なんですの!?皆さんそろって!!」

「何ですのじゃねえよ金髪ドリル!!普通のサンドイッチにそんなもん入れるわけねーだろ!!!つか何だプリンって!?!」

「ええっと・・・マスタードを入れたら黄色くなりすぎてしまったので、色を薄めるのとクリーミーさを出すためにもプリンをと思ったのですが・・・」

「入れないわよ!というか黄色くなりすぎたってどんだけ入れたのよマスタード!?!」

「ふ、2瓶くらい?プリンも10食分くらいは・・・」

「「「「「入れすぎだ!!」」」」」

もう突っ込みのオンパレードだった。流石のセシリアも凹んでしまった。クロームは突っ込みをする間を惜しんで2人の介護に回っていた。

「ひ、酷いですわ皆さん・・・」

「酷いのはあんたよ!!」

「と、とりあえず2人を保健室に!」

ツナと一夏は保健室に担ぎ込まれ、目を覚ましたのは日が暮れてからだった。

ちなみに午後の授業が始まるとツナと一夏がいらないことに不満を抱いた生徒が獄寺たちに理由を聞き、理由を知った生徒たちがセシリアに鬼の形相で殺到したためにセシリアはそのことがトラウマになっってしまった

第10話（後書き）

ツナと山本の戦闘シーンが短くなってしまい申し訳ありませんでした（汗）

ちなみに、ライトニング・アクセルは死ぬ気モードのときのバーニング・アクセルのようなものです。死ぬ気の炎ではないのでバーニングよりはライトニングかと思いました。

第11話

その夜、9代目から連絡があった。どうやらシャルルについての調査結果が出たようだ。部屋には一夏は箒と鈴に食堂へ連れて行かれてしまい、シャルルはそれについて行った。

「ずいぶん早かったですね。お願いしたの今日の朝だったのに」

「セキュリティも甘かったし、内容が内容だからね。結果から言う
とデュノア社長にはシャルルという名の息子はいなかったよ。その
かわり、愛人との間に生まれたシャルロットという娘はいたらしい
がね」

「そうですか・・・」

「どうする気だい？」

「まずは理由を聞きます。話しはそれからです」

「そうか・・・もし、害をなす存在だったらどうする気だい？」

「少なくともその可能性はないと思います。あの子からはそんな嫌
な感じはしませんでしたし。この件に関しては俺に一任してもらっ
ていいんですね？」

「ああ、任せたよ。また何かあれば連絡する。」

「解りました」

ツナは9代目からの報告を終え、洗面所から出た。

「どうでしたか、10代目？」

「デュノア社長にはシャルルという子供はいなかったよ。その代わりシャルロットって言う愛人との間に生まれた子供がいた」

「そうですか・・・」

ツナの報告を聞いて獄寺が渋い顔をした。トップの愛人の子・・・もしかしたら自分と同じ境遇なのかもしれないと考えていた。

「どうするんだ、ツナ？」

「まずは話を聞いてからだよ。2人が帰ってきたら武は一夏を訓練でも何でもいいから理由をつけて部屋から連れ出して。その間に俺と隼人で話をするから」

「わかりました」

「わかった」

会話が終わってすぐに疲れた表情をした一夏と苦笑をしているシャルルが入ってきた。

（武、お願い）

（了解）

ツナはすぐさま山本にアイコンタクトを取る。すると、山本はそばにあった竹刀を2振り持ち一夏の手をとった。

「一夏、鍛錬するぞ」

「え、でも俺疲れて・・・」

「1日でも鍛錬休むと腕が鈍るし、篠ノ之に明日何言われるかわからねえぞ」

「うっ！わかったよ・・・」

「大丈夫だって、素振りで終わらせるからよ」

そう言つて、山本と一夏は部屋を出て行った。

「さてと、シャルルにちょっと話があるんだけどいいかな？」

「何、ツナ？」

「シャルルに聞きたいことがあるんだよ。いや、シャルロットさん？」

「っ！？」

シャルロット

その名を聞いた瞬間、シャルルの顔が青ざめた。

「な、何のことかな！？僕はシャルルだよ！？」

「嘘をつかなくていいよ、知り合いに頼んで調べてもらったから。デュノア社長にはシャルルという息子はいなかった。その代わりに愛人との間に生まれたシャルロットという娘がいた。それが君なんじゃないの？」

「だ、だけど・・・」

「今、この部屋で話したことは他人には他言しない。信じてくれな
いかな？」

ツナのどこまでもまつすぐな眼を見てシャルルはツナのことを信じ
たようだ。シャルルは本当のことを話し始めた。

「そうだよ。僕の本当の名前はシャルロットって言うんだ」

「何で男装なんかしてんだ？」

「父さんからの命令なんだ。デュノア社が経済危機に陥っているか
ら・・・」

「おかしくねえか？デュノア社は量産機ISのシェアが世界3位の
はずだ」

「そうなんだけどリヴァイプは所詮は第2世代型のISなんだよ。
もう世界中が第3世代型のISの開発に取り掛かっている中でいつ
までも2世代の開発ばかりしてられない。ただでさえフランスは
『イグニッション・プラン』から除名されているからね。だけど、
3世代を開発しようにも他の国と比べて圧倒的に時間もデータも足
りない。だから・・・」

「世界で唯一ISを動かせることが知られていた織斑のデータを欲しがった。男装していたのは一夏に近づきやすくするためってことだな」

「うん。それに愛人の子ならもしかばれても簡単に切り捨てられるからって・・・」

そう言ったシャルロットの顔はとても悲しそうだった。獄寺は今にも我慢の限界が訪れそうな雰囲気を出していた。ツナはそんな2人を見て静かに立ち上がった。

「ツナ・・・？」

「10代目？」

「2人きりで話すといい。俺はシャワー浴びてくるから」

そう言い残し、ツナは洗面所のほうに消えていった。

「やつぱり・・・嫌われちゃったかな？当然だよな、今まで騙してたんだから」

「んな訳ねーだろ」

「隼人？」

「あのお方がその程度のことでお前のことを嫌うわけねーだろ！あのお方はそんなことで人を判断するような方じゃねーよ！」

「でも実際ツナはこの場から立ち去ったじゃない。やっぱり・・・」

「違う。10代目は俺たちだけで話す機会を作って下さったんだ。同じ境遇の人間にしか解らない事だと判断されたからこそ、俺たちだけにしたんだ」

「同じ・・・境遇？」

同じ境遇の人間・・・その単語を聞いた瞬間シャルロットは戸惑った表情を浮かべた。

「俺も愛人の子なんだよ。お前と同じな」

それを聞いた瞬間、シャルロットは驚いた表情を浮かべた。こんな身近に自分と同じ境遇の人間がいるとは思わなかったのだろう。

「俺のある企業のトップとその愛人との間に生まれた子供なんだよ。そのことを知ったのは8歳のとき、家政婦が話しているのをたまたま立ち聞きのきっかけだった。俺はそのことがきっかけでここでの生活が嫌になり家を飛び出した。その後はいろんなところと転々として、10代目に出会った。あの人は俺を救ってくれた方だからこそ俺は自分の全てを賭してあの方を守ろうと思った。そんな方がその程度のことでお前を嫌うはうがねえんだよ」

「だけど・・・」

「お前は どうしたい？」

「僕・・・？」

「このまま身勝手な親父に振り回されるか、そんな親父から逃れて俺たちの手をつかむか・・・お前が選べ。俺らはお前の父親をどうこう言う資格がないくらい裏の仕事に手をつけているが少なくとも俺らはお前のことを見捨てたりはしねえ。どんなことがあってもお前のことを守ると誓う」

そう言つて、獄寺はシャルロットに右手を差し出した。少しの間、シャルロットは思考を廻らし、獄寺の手を取った。

「いいんだな？俺たちは他人から軽蔑されるようなこともしているんだぞ？」

「うん。だけど隼人たちはこんな酷いことをした僕を許してくれた。だから、僕も隼人たちがどんなことをやってもそばにいる」

「わかった」

会話が終わったところでツナが洗面所から出てきた。

「話は終わった？」

「うん。僕は隼人たちの手を取ることにしたよ」

「そつか・・・ところで、2人ともトーナメント戦の翌日って空いてる？」

「？トーナメント戦の次の日って普通に授業があるんじゃない・・・」

「その日は授業を休んでフランス政府とデュノア社の社長のところに行こうと思つて。シャルロットさんのことをどうにかしないと」

「えっ！？でも・・・」

「シャルロットさんは俺たちの手を取った。つまり、俺たちは仲間だ。少なくとも俺たちはそう思っているし俺たちは仲間のことを見捨てたりはしない。このままだとシャルロットさん、この学園から卒業した後政府に捕まっちゃうからね。そんなことにならないようにしに行くんだよ」

「いいの？迷惑じゃない？」

「これくらいのこと迷惑だなんて思わないよ。そもそも友達を助けることを迷惑だなんて思わない」

そのことを聞いてシャルロットの瞳から涙があふれてきた。ここまで優しくされたのは母親が生きていたとき以来だった。

「あ、ありがとう」

「お礼はいいって。それより「綱吉さん？」」

ツナが何か言いかけたところでドアの外からノックの音とともにセシリアの声がした。

「まだ夕食を召し上がってないようですがお体の調子でも悪いのですか？」

「ううん、大丈夫だよ。何か用？」

「まだ夕食を召し上がっておられないようだったので一緒にいか

「がかと伺ったのですが・・・」

「わかった。もうすぐ武と一夏が戻ってくるからそれから行くよ。席をとつといてもらってもいいかな？」

「わかりましたわ」

そう言つてセシリアは食堂へ向かった。

「じゃあ、俺たちも準備しようか」

「うん。でもツナ、政府と父さんのところに行つて僕のことを何とかしてくれるつて言つてたけど具体的にどうするの？簡単なことじゃないと思うんだけど・・・」

「政府のほうには顔が利くから何とかなると思う」

ツナは抗争に参加していたがなにもイタリアだけではない。フランスやイギリスなど、ヨーロッパ中で行われていた抗争に参加していたのだ。それがきっかけで各国のトップとの面識があるのだ。

「デユノア社のほうは知り合いに頼んで横領とか、デユノア社が隠蔽した犯罪行為とかがないか調べてもらっているから」

シャルルはそれを聞いて驚いた。国のトップと顔見知りというだけでも驚きなのに、デユノア社の隠蔽された事項について調べることができる知り合いを持っている。デユノア社は大企業ということでセキュリティも普通の会社とは比べ物にならないほどにしっかりしている。そんな知り合いを学生に過ぎないツナが持っているという現実に驚きを隠せなかった。

「ツナたちは一体何者なの？」

「ただの学生だよ、表向きはね。この一件がすんだら話すよ。シャルロットさんは聞く権利があるしね」

「た、ただいま・・・」

話が終わると同時に山本と一夏が帰ってきた。

「どうしたの？なんかボロボロだけど・・・」

「いや、素振りだけのつもりだったんだけどな、後半、俺がトイレ行ってる間に篠ノ之が来ててなんか一夏と試合してたから中断して戻ってきた・・・疲れている状態で元気有り余っている篠ノ之と試合したせいでこんな状態になっちまってたしな（汗）」

「中断って、よく篠ノ之さん引き下がったね」

「ああ、なんか怒鳴られたけど俺が一本とって終わらせてきた」

「そう。これから夕食なんだけど一夏も来る？なんか甘いものでも食べる・・・」

「あ、ああ・・・そうする・・・」

「シャルルはどうする？」

「僕も行くよ」

「じゃあ、行こうか」

そう言って全員で食堂へ向かっていった。

第12話（前書き）

いまさらながらボーデヴィツヒがボーディビツヒになっていました。
ラウラファンの皆様申し訳ありませんでした

第12話

「そ、それは本当なんですの!？」

「う、嘘じゃないでしょうね!？」

月曜の朝、教室に向かっていたツナたちの耳にまで教室で話している女子たちの声が聞こえてきた。

「なんか騒がしくない？」

「そうですね。何かあったんでしょうか？」

「なんか先週も同じことなかったか？」

「そうなの？」

「そういえばそうだな」

ツナたちは心当たりがなく何故女子たちが騒いでいるのか見当がつかなかった。

「本当だつてば!この噂で学園中持ちきりよ!月末の学年別トーナメントで優勝したら男子生徒の誰かと・・・」

「俺たちがどうかしたの？」

「「「うきゃあああああ!？」」「」」

いきなりツナに話しかけられたことにより教室中の女子が悲鳴を上げた。

「な、なんかあったの？俺たちのことが出ていたみたいけど・・・」

「そ、そう？」

「な、何もなかったと思いますけれど・・・」

あからさまに鈴とセシリアは目をあわせないようにし話をそらそうとする。

「わ、私そろそろ自分のクラス戻らないと！」

「わ、私も席に着きませんと！」

「わ、私たちも！」

そう言つて女子たちは慌てて自分のクラスや席に戻っていった。

「なんかあったのかな？」

「気にしないでいいんじゃないですか？」

「だな。俺たちも席着こうぜ」

ツナたちも女子たちの行動が気にかかりながらも席に着いた。

（何故こんなことに・・・）

教室の窓際の席で箒は表面上は平静を装いつつも心の中で頭を抱えていた。原因は今学園中に流れてしまっている噂のせいだった。

『今度の学年別トーナメントで優勝したら男子生徒の誰かと交際できる』

箒は確かに一夏と自分が優勝したら付き合ってもらうと約束したが（一夏は理解していないし、一方的に）男子の部屋の前だったため聞いていた誰かが勘違いしてしまったのだろう。対象が男子生徒という、一夏限定ではないので優勝した女子生徒が必ず一夏と付き合うというわけではないのでまだ安心ができるが、わずかでも一夏と付き合う可能性があるため油断はできない。現に休み時間に教室に上級生がやってきて『学年が違う上級生はどうなるのか』、

『もし両思いだったら即入籍は可能か』などと、クラスの情報通に聞きに来ていた。

（大丈夫、私が優勝すればいいだけだ・・・しかし・・・）

箒は自分が優勝すればいい、そう思っても頭の中には3人の男子生徒と1人の女子生徒が浮かんでくる。言うまでもなくツナ、獄寺、山本、クロームである。ツナと山本の強さは授業の実演を2人がやったときに目の当たりにしている。正直、自分ではあの領域に立てないのではないか、そう思わせるほどにあの2人は強かった。あの2人と中学のときからつるんでいる獄寺、クロームも同じ領域に立っているかもしれない。もし、あの4人と戦うことになったときに自分は勝てるのか・・・そういうマイナスの方向に考えがいつてしまう。

（剣の覚悟・・・）

箒は山本と初めて戦い、敗北したときに言われたことを思い出していた。自分とは剣の覚悟が違う、だから自分は山本に勝てないのだと言われた。その答えは見つかっていないが箒はそのことを考える度に苛立ちが募っていた。

自分は物心付いたときから竹刀を握っていた。それに対し、山本が竹刀を握ったのが中学2年のときだという。自分のほうが圧倒的に剣を握っている年月が長いのに剣を握ってわずか3年の人間に言われたくない。そう思ってしまった。

（私が勝って見返してやる！）

そう箒は心に誓った。しかし、箒は気づいていなかった。未だに自分と山本の剣の覚悟が圧倒的に違うことに・・・

「何故こんなところで教師など！！」

ツナと獄寺がトイレに向かった帰りにそんな声が曲がり角から聞こえてきた。

「今の声は・・・」

「ボーデヴィツヒの奴ですね」

ツナと獄寺は息を潜めて曲がり角の先を覗いてみる。そこには、ラ

ウラが千冬に何かを訴えていた。

「言ったはずだ。私には私の役目がある」

「こんな極東の地で何の役目があるというのですか!？」

あの氷のような転校生ことラウラ・ボーデヴィツヒがこうまで声を荒げている。よほど千冬がこの学園で教師をやっていることに不満があるようだ。

「お願いです教官。わがドイツでもう再びご指導を。ここではあなたの能力を半分も生かせていない」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありませんん」

「何故だ？」

「認識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれることなどありません」

「沢田たち4人は少なくともそう思っていないと思うが？」

「そ、それは・・・」

「まあ、あの4人には教えることなどないのかもしれない・・・ISの操縦技術や知識に関しては教えられることがあるかもしれないな

いが逆に言ってしまったえばそれ以外に教えられることが見つからない」

「そ、そんなこと・・・」

「そうだな・・・月末の学年別トーナメントであの4人の誰かに勝つことができたなら考えてやる」

「本当ですか!?!」

「ああ。約束しよう」

「解りました!それでは!!」

そう言つてラウラは意気込んだ様子で教室に戻つていった。

「少し勝手が過ぎるんじゃないか?」

「っ!?!」

ツナと獄寺が息を殺すのをやめ千冬に声をかけた。聞かれていると気づかなかつた千冬は驚いた様子でこちらに振り返つた。

「聞いてたのか?」

「一通りは、俺たちに断りもなく決めるのは酷くないですか?」

「すまない。あの状態であいつを下からせるにはこれくらいしかないかつたものだから・・・」

「別にかまわねえがな。あいつには負ける気がしねえし」

「油断してると危ないんじゃないのか？」

「あいつは昔の俺だ。そんな奴に負ける訳ねえだろ」

「昔の？どついうことだ？」

「俺も昔はあいつと同じ考えだった。力の大きさこそ強さの証明。力の大きさこそが存在価値。そういう考えだった」

「今は違うのか？」

「ああ。俺は10代目に会うことで変わることができた。今の俺からしたら昔の俺は弱すぎると思えるくらいにな」

そう言った獄寺の目には強い意思が宿っていた。本当にそう思っていないかったらすることのできない、そんな目をしていた。

「そうか・・・あいつのことを任せてもいいか？」

「ああ。俺は10代目に救われた。今度は俺が同じ考えをした誰かを救う番だからな」

そう獄寺が言った瞬間、次の授業が始まるチャイムが鳴り響いた。

「隼人、急ごう」

「はい、10代目」

2人は急いで教室に向かっていった。

「「あっ」」

放課後、第3アリーナにて鈴とセシリアが鉢合わせした。

「あんたも学年別トーナメントに向けて特訓するの？」

「ええ。無様な姿をさらすわけにはいきませんから」

「なんらな模擬戦しない？他の国の代表候補生の実力も知りたいし」

「ええ。喜んでやらせていただきますわ」

「じゃあ・・・」

2人とも距離をとりメインウェポンを呼び出し、構えて対峙した。

「いきま・・・」

セシリアの声を遮って超高速の砲弾が飛来する。

「「!？」」

緊急回避の後、2人は砲弾が飛んできた方向を見ると漆黒のIS<シュヴァルツエア・レーゲン>に身を包んだラウラが立っていた。

「・・・どういうつもり？いきなりぶっ放してくるなんていい度胸してるじゃない」

双天牙月を連結させ、衝撃砲を準戦闘状態にシフトさせる。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か・・・デ
ィタで見たほうが強そうだな」

いきなり挑発的な物言いに2人は唇を引きつらせた。

「なに・・・挑発してるの？」

「残念ながら今は鈴さんと訓練するところなんです。用があるの
でしたらその後にくたさるかしら？」

怒りにまかせて飛び掛りそうになるのを抑えて2人は声を絞り出し
た。

「はっ！2人がかりで相手になってやるぞ？群れることしか考えな
いクズと教官の足枷でしかないクズに現を抜かしているような奴に
この私が負けるはずがないからな」

それを聞いた瞬間、2人の中で何かが切れる音がした。

「・・・今なんて言った？私には『どうぞ好きなだけ殴ってください
い』って風にしか聞こえなかったけど？」

「この場にいない人間の悪口を言うなんて同じ欧州連合の候補生と
して恥ずかしい限りですわ。しかもあの人の強さを知らないあなた
が！」

2人は自分の獲物を指が白くなるまで強く握り締めた。それに対し、

ラウラは冷ややかな視線で流すと挑発するようにわずかに両手を広げ、自分のほうに向けて振る。

「とつととかかって来い」

「「上等!」!」

声を張り上げて2人はラウラに向かって突っ込んでいった。

「ツナ、今日も放課後は特訓するの?」

「うん。トーナメントまでは毎日やるうかと思って」

「場所はどこだっけか?」

「第3アリーナだ」

「「うわああああ!」?」

いきなり後ろから声をかけられ一夏とシャルルは悲鳴に近い声を上げてしまった。

「・・・篠ノ之さん、普通はいきなり後ろから声をかけたらびつくりすると思う」

「う、うるさい!お前らが私を無視するのが悪いんだ!」

「さっきまでお前いなかっただろ?」

「そ、そんなことよりさっさと行くぞ。今日は使用人数が少ないか

らな。上手くいけば模擬戦ができるだろう」

「後から混ざつといて何威張ってやがる、頭から蛆湧いてるんじゃないか馬鹿女」

「な、なんだと!？」

第3と獄寺の口喧嘩が始まろうとしたとき、ツナが異変に気づいた。廊下を慌てた様子で第3アリーナのほうへ走って向かう生徒が多数いるのだ。

「何かあったのかな？」

「そうかもね・・・」

「ちょっと聞いてみましょうか。すみません、何かあったんですか？」

ヴェルがアリーナの方へ走って向かう生徒の1人を捕まえて尋ねた。

「第3アリーナで代表候補生が模擬戦してるみたいなの!」

「模擬戦? 一体誰が・・・」

ドゴオオオオオオン!!

突然アリーナのほうから爆発音が聞こえてきた。

「今の音は!？」

「行ってみましょう、10代目！」

ツナたちがアリーナへ走って行き、そこで見たものは傷だらけになった鈴・セシリアと凶悪な笑みを浮かべたラウラだった。

第13話

「な、何やってんだあいつは!？」

ツナたちが見たものは、ラウラが傷だらけになっている鈴とセシリアを踏みつけている光景だった。鈴は右肩の衝撃砲を破壊され、双天牙月にもひびが入っており、セシリアのほうもライフルが破壊され、ビットも3基が破壊されている状態だった。2人とも装甲がほとんど破壊され、ダメージレベルはBを超えているのは明らかだった。

「こ、この・・・」

鈴がぼろぼろになりながらも自身を踏みつけているラウラの足をつかんだ。

「ほう、まだ動けるか。腐っても代表候補生というわけか・・・」

「な、なめんじゃ・・・」

「まあ、お前が私とこのシュヴァルツェア・レーゲンの前では有象無象の1つに過ぎないがなっ!！」

「がつ!！」

ラウラは鈴の左肩の装甲をプラスマブレードで貫いた。それだけでは終わらず踏みつけていた足で貫いた肩を何度も踏みつけた。もはや鈴に反撃する力は残っていない。

「ほらほらどうした！？少しは反撃してみたらどうだ！？」

ラウラはあざ笑いながら鈴を蹴り飛ばそうとするが、突然後ろから衝撃が襲った。セシリアが残っていたビットでラウラを攻撃したのだ。

「っ！貴様！！」

ラウラがセシリアに標的を変更した。ラウラがセシリアに突っ込んでいくがセシリアにはもう動くだけの力は残っていなかった。

プラズマブレードがセシリアに直撃する直前、何者かに手首をつかまれた。ラウラが視線を向けるとツナの左手がラウラの手首をつかんでいた。

「っ 貴様！！」

ラウラが怒鳴りつけるがツナは返事をしなかった。その隙に山本が鈴を、獄寺がセシリアをアリーナへ連れて行った。

「貴様聞いて「ふざけるな・・・」っ！？」

ラウラが返事をしないツナに苛立ちを感じ、怒鳴りつけようとするが最後まで言うことはできなかった。ツナからすさまじい怒気があふれてきたのだ。その怒気は授業で山本と戦ったときに感じた気配よりもはるかに強い。

「俺の友達をこんなに傷つけたんだ・・・覚悟はできてるよな？」

「っ！？」

ラウラが危険を感じ、ツナの手を振りほどこうとするが想像以上の力で手を掴まれているため振りほどくことができなかった。その隙にツナがエネルギーを纏った右拳でラウラの腹を殴りつける。

「がつー！」

防ぐことができずにラウラは吹っ飛ばされた。ツナの攻撃はそれだけでは終わらず、エネルギーの塊をラウラに向けて放った。吹っ飛ばされたラウラが体勢を立て直したところにエネルギー弾が着弾し、レールガンが破壊された。

「っ！貴様ー！！」

顔を真っ赤にしツナに突っ込んできた。ラウラがプラズマブレードでツナを切り裂こうとするがツナは何も構えなかった。しかし、ラウラの攻撃がツナを捉える前に何者かによって阻まれた。

「っ！？教官！？」

「やれやれ、これだから餓鬼の相手は疲れる」

IS用近接戦闘用ブレードを構えた千冬がラウラの攻撃を阻んだのだ。ISの武器を生身で補佐なく扱った千冬は異常といえる。

「模擬戦をするのはかまわん。だが、アリーナのバリアーを破壊される事態は教師として黙認できるものではない」

ツナは鈴とセシリアを救出するため、一夏の零落白夜を使ってアリ

「Iナのバリアーを破壊したのだ。ちなみに一夏はそのまま怒り任せにラウラに突っ込もうとしたのでヴェルとクロームに取り押さえられていた。箒が文句を言っていたがそこはシャルルが説得していた。」

「この決着は学年別トーナメントでつけてもらおう」

「教官がそうおっしゃるなら」

ラウラは素直に従い、ISを解除し待機状態に移行させた。

「沢田もいいな？」

「わかりました」

ツナもISを解除し待機状態に移行させ、その場を立ち去ろうとした。

「命拾いをしたな」

ラウラがツナを挑発した。本来なら何も言わずに立ち去るところだが、あえてツナはその挑発に乗った。

「安心しなよ。自分の弱さを認められない、力任せに誰かを傷つけることしかできない君に負ける気はしないから」

「なんだと!？」

「いい加減にしないか!！」

口喧嘩になりそうなのを千冬が怒鳴ることで阻止する。ツナはラウ

ラに背を向けそのままアリーナを立ち去った。

その様子を2人の生徒がアリーナの入り口から伺っていた。

「本音の言っていたことは本当のようね・・・」

その人影のうちの一人、更識楯無は呟いた。彼女は同じ生徒会役員であり、自分の妹の侍女である布仏本音から授業の実演のことを聞いていた。そのときは半信半疑だったが今のやり取りを見て確信した。彼は代表候補生を、もしかしたら国家代表ですら上回る力を持っている。そして他の3人も同等の力を持っているかもしれない・・・そう考えていた。しかし、それはISに乗って1月の人間では到底到達することのできない領域だった。

「調査結果はどうだったの、虚？」

楯無はもう1人の生徒、自分の侍女であり本音の姉である布仏虚に尋ねた。

「はい、沢田綱吉に関する調査結果ですが以前と変わりはありませんね。武術系の部活に入っていた経歴もありませんし、そういう道場に通っていた経歴もありませんね」

「学歴のほうは？」

「中学の中盤のほうまでは全ての教科の成績はほぼ壊滅的です。当時の渾名が『ダメツナ』と呼ばれていたほどです。しかし、後半のほうは成績が上がってきてますね。特に外国語の伸びが著しかったです」

「つまり、何であんなに強いのかはわからずじまいか・・・」

「申し訳ありません」

「大丈夫よ虚ちゃん、気にしてないから。もうちょっとアプローチしてみようかしら・・・」

そう言つて2人はアリーナを後にした。

保健室では鈴とセシリアが体中に包帯を巻いてベッドに寝ていた。ラウラに負わされた怪我は思ったより酷く、数日は少し体を動かすただけでも痛みが走るが後遺症は残らないと保険医は言っていた。

「何で止めたのよ・・・」

「あのまま行けば勝っていましたわ・・・」

「んな訳ねえだろ。あのままだとこの程度じゃすまなかつたぜ」

保健室にはツナ、獄寺、山本、一夏、シャルル、ヴェルがいた。箒とクロームは千冬が事の経緯を聞きたいからと連れて行ってしまった。

「でも、この程度の怪我ですんでよかったな」

「この程度怪我のうちに・・・いたたたっ!」

「そもそもこのように横になっていること自体無意味・・・っう!」

「・・・2人とも馬鹿なのか？」

「馬鹿とは何よ！馬鹿とは！！」

「一夏さんにだけは言われたくありませんわ！！」

「な、なんだよ・・・」

まさかこうも反撃されるとは思っても見なかったので、一夏は複雑だった。

「2人とも好きな人の前でみつともないところを見られたから恥ずかしいんだよ」

「ん？」

シャルルが何かを言ったが一夏には聞こえなかった。それはツナたちも同じだったのか首を傾げていたが鈴とセシリアにははっきりと聞こえていた。

「なななななな、何を言ってるの！？」

「そそそそそ、そうですわ！何のことですよ！？」

2人とも真っ赤になって何かを否定していた。シャルルの言葉が聞こえなかったメンバーはますますわからなくなり、首を傾げるしかできなかった。

「はい、烏龍茶と紅茶でいい？」

「ふ、ふん！」

「不本意ですがいただきます！！」

鈴とセシリアはシャルルからひったくるようにペットボトルを受け取り、一気に飲み始めた。その時廊下から何かが走ってくるような音がした。しかも大量に・・・

「何かあつたのかな？」

ツナたちが保健室の入り口を振り返ると突然保健室のドアが吹っ飛ばされた。そしてそこから１年生の半数以上はいるのではないかという程の女子生徒が雪崩の様に保健室に入ってきた。

「沢田君！」

「獄寺君！」

「山本君！」

「織斑君！」

「デュノア君！」

「『『『これ見て！！』』』』」

女子生徒が見せてきたものは今度のトーナメントに関する緊急告知文のようだった。

「ここを見て!!」

女子の1人が告知文の1部を指差した。ツナがその部分を覗き込んで読み上げる。

「ええつと・・・」今月開催される学年別トーナメントはより実践的な模擬戦を行うため、2人組みでの参加を必須とする。なお、締め切りは・・・」

「そこまででいいから!」

「と、言う訳で!」

「「「「私と組んでください!!!」」」」

一斉に女子生徒が頭を下げた。その光景に苦笑しながらツナはどうするか考えていた。誰とペアを組んでもかまわないがシャルルの事情と一夏の護衛の任務のことを考えると来てくれてた女子生徒たちと組むわけにはいかない。

しばらく考えた後、ツナが女子生徒たちに向かって言った。

「ごめん!隼人はシャルルと、俺は一夏と、武はクロームと組むから!!」

一瞬静まり返るも、すぐに女子生徒たちが文句を言い始めた。

「なんで山本君はクロームさんとなの!?!」

「納得いかないよ!」

文句が次々と出てきたがツナは慌てたずに返答した。

「クロームは人付き合いがあまり得意じゃないんだ！だから中学の時から友達の俺らの誰かがペアになることにしたんだ！」

ツナの言葉に再度保健室が静まり返る。いつもツナたちとつるんでいるクロームにそういう事情があるなんて思ってもみなかったのだろう。

「ま、まあそういう事情があるなら・・・」

「しかたないよね・・・」

そう言いながら女生徒たちは保健室を去っていった。

「ふう・・・」

「あ、あの・・・ツナ」

「一夏！」

「ツナさん！」

シャルルが何かを言おうとしたが鈴とセシリアによって遮ぎられてしまった。

「私と組みなさいよ！」

「ツナさん！組むのでしたらわたくしと・・・」

「2人とも駄目ですよ！」

いつの間に入ってきてたのか山田先生がその提案を却下した。

「2人ともISのダメージレベルがCに達しています。当分は修復に専念させないと後々重大な欠陥が生じてしまいます。ISを休ませる意味でもトーナメントの参加は認められません」

「ぐうううう！わかりました・・・」

「不本意ですが仕方ありませんね・・・」

ISはダメージレベルがCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態のエネルギーバイパスを構築してしまい、それらは平常時の稼動に悪影響を及ぼすことがある。

そのことを理解している2人はやむをえなく出場を断念した。

ちなみにこのことを知らなかったツナ、山本、一夏は獄寺、ヴェル、シャルルから説明を受けていた。

「ところで、何で2人はラウラと模擬線なんかしてたんだ？」

「そ、それは・・・」

「女のプライドを侮辱されたからですわ・・・」

2人とも言いにくそうに声を絞り出した。

「ああ、もしかして一夏とツナのことを・・・」

「ああ、一言多いね、デュノアは!!」

「そ、そうですね!!」

何かをしやべろうとしたシャルルを2人が慌てて取り押さえた。2人が口を塞いでいるため、シャルルが苦しそうにもがいていた。

「2人とも怪我してるんだからそんなに動いちゃ駄目だよ。俺たちそろそろ部屋に戻るから、何かあったら連絡して」

「わ、わかりましたわ」

「まったく、シャルルは・・・」

渋々2人はシャルルから離れてベッドに戻っていった。

それを見届けるとツナたちも保健室を後にした。

「俺たちは特訓するか」

「そうだな、ツナたちはどうする?」

「俺たちも特訓するけど武たちとはメニューが違うから別行動かな」

「そっか、また後でな」

そう言って、山本と一夏はグラウンドの方へ向かっていった。

「あの・・・ツナ」

「何？」

「あの・・・ありがとね。僕の正体がばれないようにするためにペアを考えてくれたんでしょ？」

「ああ、シャルルは俺たちの仲間だからね。仲間が困ってたら助けるのが普通でしょ？」

「・・・ありがとう」

「どういたしまして。俺たちも行こうか」

「うん、ところで何処で特訓するの？」

「第4アリーナを使おうかと思ってる。ヴェルはどうする？」

「私も参加させていただきます。今度は私が大切な人を守るようになりたいから・・・」

「決まりだな。じゃあ、行きましょうか10代目」

「うん」

ツナたちも特訓するために第4アリーナに向かっていった。

第14話（前書き）

更新が遅くなり申し訳ありませんでした。

第14話

トーナメント戦当日、ツナたちは更衣室で対戦相手の発表を待っていた。

「しかし、何でこんなにお偉いさんが見に来てるんだ？」

「3年にはスカウト、2年生には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来てるし、1年生にも専用機持ちが多いから機体の確認とかに来てるからね。特に世間に報道されていなかった男子のIS操縦者が4人もいるから気になる人は多いだろうし」

「けっ！暇人どもが・・・」

「まあまあ」

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦以外興味ないの？」

「まあ、あそこまで言われたらな」

「・・・対戦相手が決まったみたいだ」

モニターがトーナメント表に切り替わる。

1回戦

山本武&クローム髑髏

対

篠

ノ之篇&ヴェル・オルク

2回戦

沢田綱吉&織斑一夏

対

ラ

ウラ・ボーデヴィツヒ&一般生徒A

・ ・ ・

5 回戦 獄寺隼人&シャルル・デュノア 対
一般生徒B & 布仏本音

—

となっていた。

「篠ノ之とか・・・クローム、頼みがあるんだけどいいか？」

「何？雨の人」

「いきなりか・・・」

「気をつけてね、一夏」

『お待たせいたしました。ただいまより、1回戦を始めます。選手はアリーナ中央に集合してください』

「じゃあ行つて来るぜ。クローム、さっきのことよろしくな」

「わかった」

「負けんじゃねえぞ」

「頑張つて」

「油断するなよ」

「ああ」

そう言つて山本とクロームはアリーナへ向かつて行つた。

「初戦であたるとは思わなかつたぞ」

「そうか？俺は誰とだつてよかつたけどな」

「何だと！？」

「負ける可能性があるとしたらツナカ獄寺くらいだな。それ以外の奴と戦つて負ける気がしないし負けるわけにはいかないからな」

「貴様……」

「まあ、篠ノ之さん。お2人とも、よろしく願いしますね」

「……よろしく」

『ただいまより、第1回戦 山本武・クローム髑髏ペア 対 篠ノ之箒・ヴェル・オルクペアの試合を始めます。……はじめ！』

司会者の合図とともにクロームの姿が消える。ワンオフアビリティー『幻影』により、箒たちの視界からクロームの姿が消えた。ハイパーセンサーでもクロームの居場所を把握することはできない。

「えっ!?!」

「くそっ!何処だ!?!」

クロームはこの能力を使用したときは、箒は獄寺と、ヴェルはツナと模擬戦をしていたためこの能力を見ていなかった。クロームの姿が消え驚いている2人の隙を突き、山本が箒に切りかかる。

「余所見してる暇はねえぜ!!!」

「なっ!?!」

山本は時雨で箒を攻撃するが箒はブレードで何とか防ぐ。山本は防がれたことに驚いた様子は見せず、蒼燕で水柱を発生させヴェルを攻撃する。

「くっ!!!」

ヴェルは何とかその水柱を避けた。ヴェルは白銀の大鎌を呼び出し、山本に攻撃しようとするが後ろから何かを叩きつけられたような衝撃に襲われた。

「きゃっ!!!」

ヴェルは衝撃により地面に向かって落下するが、何とか体勢を立て直した。

「一体何が!?!」

辺りを見回しても対峙する山本と箒以外の姿が見当たらない。ヴェルは再度襲ってきた衝撃により地面に叩きつけられた。

「がっ！」

地面に叩きつけられたヴェルの上から何かで突かれたような衝撃が襲う。いくらアイギスが防御力に優れているとしても絶対防御が発動すればエネルギーの激減は避けられない。

見えない3回の攻撃全てに絶対防御が発動してしまい、さらに地面に叩きつけられたときの衝撃により、ヴェルはシールドエネルギーがほとんどなくなってしまった。

「どうなってるの・・・？」

ヴェルが腹部の激痛に耐えながら上半身を起こすと何もなかったところからクロームが現れた。

「これが私のワンオフアビリティ『幻影』の能力。私の使命を体現するための能力・・・」

『実態のつかめぬ幻影』、『無いものを在るものとし、在るものを無いものとする』ことで敵を惑わし、ファミリーの実態をつかませないまやかしの幻影・・・それがボンゴレの霧の守護者の使命。クロームの能力は前者の使命を体現するための能力といえる。

「やっぱり私では勝てませんか・・・」

「軍隊の訓練を受けてるだけの人に負けられないから・・・みんなをも守るにはもっと強くないといけないし・・・」

「十分強いのではないですか？」

「ボスは自分のことを弱いつて言ってる．．．みんなを守るために自分を研磨し続けてるのに私たちが今のままで満足しちゃいけないから．．．」

「私はもつと強くなれますか？」

「ボスはいつも言ってる．．．『努力すれば誰だって強くなれるよ．．．ダメツナつて呼ばれてた俺が少しだけ強くなれたんだから』って」

「ダメツナつて．．．？」

「ボスの中学校までも渾名。勉強も駄目、スポーツも駄目、何のとりえもないからダメツナつて呼ばれてた．．．私たちはそんな風には思っていないかったけど」

クロームの言葉を聞いてヴェルは驚愕した。自分の家族を救ってくれた．．．この世で誰よりも強いと思っていた人が2年前までそんな渾名で呼ばれていたなんて思わなかった。

「あの人はそんな風に呼ばれてたところから私たちを．．．仲間を守るために修行して強くなってきた。仲間がいたから今の自分がいるからって。だからボスはいつも言ってる。自分ができたんだからみんなもできるって」

「私にもできますか．．．？」

「できると思う。それまでは私たちが守るから」

そう言われたヴェルは負けたことなんてどうでもいいと思えるくらい暖かい気持ちになっていた。

「あつちは終わつたみたいだな・・・」

山本は箒とヴェルを分断させた後、箒の足止めをしていた。ただし、その攻撃は足止めのものとは思えないほど鋭く、箒の左手と右足の装甲を破壊していた。

それに対し、箒は焦っていた。ヴェルはシールドエネルギーは尽きていないがすでに負けを認めてしまっている。つまり、箒は山本とクロームという2人の強者を1人で相手しなくてはならない。

「心配しないでいいぜ。クロームには手出ししないように言うてる」

「なんだと!？」

山本が更衣室でクロームに頼んでいたこと。それは箒とは1対1でやらせてほしいというものだった。

「私を馬鹿にしているのか!？」

「馬鹿になんてしてねえよ。お前とはさしでやりたかっただけだ」

そう言いながら山本は時雨を鞘にしまい、蒼燕を右手で掴み抜刀の構えを取った。

時雨蒼燕流攻式八の型 篠突く雨

抜刀された刀が箒を襲う。箒は辛うじて防ぐがブレードにひびが入ってしまった。山本は防がれたことに驚くことなく、左のスラストーだけを使い、体を回転させ鞘に収めてあった時雨を抜刀する。

「がつ!!」

流石に2度目は防ぐことができず、箒は吹っ飛ばされる。山本はさらに追撃する。山本は蒼燕を手放し箒に向かって蹴った。

時雨蒼燕流攻式三の型 遣らずの雨

箒がバランスを取り戻したとことに山本が蹴った刀が直撃しブレードが粉々に破壊される。

「なっ!?!」

箒が驚いている隙に山本は瞬時加速で箒に接近し時雨で箒を攻撃した。避ける術のない箒に山本の斬撃が直撃した。

「がつ!」

今の1撃で箒のエネルギーが零になった。箒は大した反撃もできずに負けてしまったことが悔しくて仕方なかった。

「くそっ!!」

「惜しかったな」

「無傷で勝っておいて惜しかったと？馬鹿にしてるのか！？」

「馬鹿にはしてねえよ。加減したとはいえ篠突く雨を防いだんだから。防がれないと思っただけだな」

「加減していただと！？ふざけるな！！」

「ふざけてねえよ。本気出してたら絶対防御の上からだろうとお前意識飛んでたぜ。それよりお前に聞きたいことがあったしな」

「聞きたいことだと？」

箒は山本が自分に聞きたいことの心当たりがないため、苛立ちながら聞き返す。

「前にお前に言ったよな。俺とお前とじゃ剣の覚悟が違っって・・・その意味が理解できたか？」

「わかるわけないだろう！逆に問うが貴様の覚悟とは何なんだ！？」

「友達^{ダチ}を守り抜くことだ」

その言葉を聞いた瞬間箒の頭の中は真っ白になった。

「俺は誰かを殺したり傷つけたりするために強くなったわけじゃねえ。友達^{ダチ}を守るために戦って勝つために強くなった。友達^{ダチ}を守り抜いて勝つ。それが俺の『剣の覚悟』だ」

「そ、それなら私だっ一緒だ！一夏を守ることが私の「ならなん

で一夏をぼこぼこにしてるんだ?」「っ!?!」

一夏を守ることが私の剣の覚悟・・・そう言おうとしたが山本がそれを許さなかった。

「一夏を守ることがお前の剣の覚悟ならなんで一夏をぼこぼこにしてるんだ?一夏は何も間違ったことをしていないのに」

「そ。それは・・・」

「俺はツナに、友達^{ダチ}にそんなことはしねえ。俺がそいつらに刃を向けることがあるとすればそいつらがそいつでなくなったときだ」

「そ、それはどういう・・・」

「ツナが誰かを守るためではなく誰かを傷つけるために拳を振るつたとき、獄寺が今のツナに牙を向けたとき、クロームが誰かが傷ついているのを苦に思わなくなったとき・・・俺があいつらに刃を向けるときはそんなときだけだ」

筈は最早何も聞き返すことができなかった。山本との違いをこれでもかというほど見せ付けられた・・・そんな気がしてしまった。

「もう一度自分の行動と言動を見直してみな。お前だったら直せるだろ」

『篠ノ之箒戦闘不能、ヴェル・オルク降参により山本武・クローム髑髏ペアの勝利とします』

こうして第1回戦が終了した。

第15話（前書き）

文化祭の影響で更新が遅くなりました（汗）

第15話

1回戦を終え、山本とクロームがビット内に戻ってきた。そこには次の試合に出場するツナと一夏が待機していた。

「勝ったぜ」

「お疲れ様」

「相変わらずすごいな、箒とヴェル相手に無傷かよ・・・」

「軍隊の訓練を受けてるだけの人には負けられないから・・・」

1回戦を戦い抜いたにもかかわらず、山本とクロームには疲れた様子は見られない。それは当然といえる。この程度で息を上げていたら抗争で戦い抜くなんてことは到底できないのだから・・・

「次はツナたちの番だな」

「そうだね・・・作戦はどうする？一夏」

「できるだけラウラとは1対1でやらせてもらえないか？」

「今の一夏には無理だと思う。ボーデヴィツヒさん実力は俺たちを抜かしたら学年トップだと思うよ」

「でもあそこまで言われたら黙ってられないだろ？」

「ツナがまずあいつのパートナーを倒して一夏と2人でラウラを叩

「けばいいんじゃないか？」

「俺はそれでいいぜ」

「じゃあ、そうしようか」

『ただいまより第2回戦を開始します。選手はアリーナ中央に集合してください』

話し合いが終わったところでアナウンスが鳴り響く。ツナと一夏はISを展開する。

「「行ってくる」」

「勝って来い」

「「いつてらっしゃい」」

仲間の声援を背に、ツナと一夏はアリーナへと向かった。

「初戦で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「それはこっちの台詞だ。手加減なんてするなよ？」

「当たり前だ。貴様は徹底的に叩きのめす。貴様もだ、沢田綱吉」

ラウラはツナを睨みながら指を指した。

「あるとき、私を殴った借りを返させてもらっぞ」

「俺の仲間をあれだけ傷つけといて、自分は殴られたら逆上するのか・・・」

「なんだと？」

「俺も同じだ。お前はあるとき、鈴とセシリアを傷つけた。そのときの借りを返させてもらう」

「貴様が私に勝てるんでも？」

「俺がお前に負ける要素がないな」

「なんだと・・・」

ツナの挑発にラウラの怒りのボルテージが上がっていく。

『ただいまより、第2回戦 沢田綱吉・織斑一夏ペア 対 ラウラ・ボーデヴィツヒ・生徒Aペアの試合を始めます。・・・・・・はじめ！！』

試合開始の合図とともにラウラがツナに突っ込んでいく。

「まずは貴様からだ！！」

先ほどのツナの挑発が効果覿面だったらしく、ラウラの目にはツナしか見えていなかった。故に横からの攻撃への反応が遅れてしまった。

「俺を忘れるなよ！」

「っ!？」

一夏がラウラの死角からラウラを斬りつけようとした。しかし、流石は代表候補生と言ったところか・・・

ラウラはとっさにワイヤーブレードを使い一夏のことを牽制した。

「くっ！」

たまらず一夏は後方へ回避した。その隙に、ツナはスラスターをフル活用し、打鉄を纏った生徒Aに高速で接近する。

「え!？きゃあ!！」

2人掛りでラウラと戦闘すると思っていた生徒Aはツナの接近に対応することができなかった。その隙を突いてツナはエネルギーを纏わせた右拳で生徒Aの腹を全力で殴り飛ばした。

ツナは生徒Aを吹っ飛ばすと、両掌にエネルギーを収束させラウラと生徒Aに向けて解き放つ。

「ぐっ！」

「きゃあ！」

ラウラは意識が一夏に傾いてしまっていたためツナの攻撃は奇襲に近かった。間一髪のところ回避するがバランスを崩してしまい、ツナに吹っ飛ばされてバランスを制御できていなかった生徒Aは直

撃してしまっ。

「はっ！！」

ラウラがバランスを崩した隙を一夏は見逃さなかった。ラウラの左肩目掛けて雪片を振り下ろそうとする一夏に対し、ラウラは右掌を一夏に向けた。それだけで一夏の体は動かなくなってしまった。

「っ！これは！？」

一夏は何とか体を動かそうとするが何かに絡め取られているかのよう動く気配がない。ラウラは動かない一夏にプラズマブレードで斬りかかる。動けない一夏に避ける術はなく左肩の装甲を破壊されてしまう。

ラウラの攻撃はそれだけでは終わらず一夏の腹を蹴り飛ばす。

「かつ！（今のは一体！？）」

「A I Cですわね・・・」

「あれが厄介すぎるのよ・・・」

観客席で観戦していたセシリアと鈴はラウラの使用した特殊兵器に顔を歪めた。

A I C・・・慣性停止結界は任意の相手を停止させることができる。欠点を挙げるとしたら停止させる対象に集中していなければ使えないということ、エネルギー兵器には使用できないということが挙

げられる。

本史とは違い、一夏はAICを目の当たりにしていない。実際に戦ったセシリアたちはその特性と理解しているが一夏たちに説明をしていないため一夏たちはそのことを知らない。

一夏も何とか原因を突き止めようとしているがISの知識に乏しく初見の人間に看破できるものではなく、普通だったら一夏はなす術もなく敗北していただろう。

一夏のペアが超直感を持つツナでなければ・・・

ツナはエネルギー弾を放った後は作戦通り生徒Aを戦闘不能にするために戦闘していた。ツナは生徒Aの繰り出す斬撃を機動力を生かし、緩急をつけて相手に自分の動きを捉えられないようにすることでかわしていき、斬撃の隙を縫うようにエネルギーを纏った拳で殴っていく。

生徒Aの実力は1年生の中では中の下といったところであろう。相手の動きを先読みするといった達人の領域に立っているわけでもなく、何かの運動能力が飛びぬけているわけでもない。強いて言うならどんなときでも冷静に戦況を分析できるということくらいだ。だからこそ解ってしまう。自分ではツナには勝てないと・・・

授業の実演のときの出来事は学園中で噂になっているため耳にしていた。だからこそ、生徒Aはラウラとペアになってよかったと思っていた。ラウラは鈴とセシリア、2人の代表候補生と戦って圧勝したという。

実演のときのツナと山本の實力は凄まじいものだったと聞いていたが、代表候補生2人を相手に圧勝したラウラと同等の實力だと思っていた。しかし、先ほどの動きを見て、実際に戦ってみてそれが間違っていたことに気づく。今戦っている人物はラウラよりも遙かに強いのだと、自分では相手にならないほどの實力を持った強者なのだ・・・

實際打鉄の装甲は4分の1を失っている状態だった。エネルギーのほうも後1撃喰らったらそこを尽きてしまうだろう。対してツナは無傷だった。この状況で相手が自分のことを侮ってくれていたら楽だったのだがツナにはそんな様子は一切見られない。

どちらが勝つかは目に見えていた。

「すまない、早く一夏のほうに行かないといけないから・・・」

ツナは今までで1番激しく緩急をつけ生徒Aのリズムを崩した。リズムを崩された生徒Aはツナの姿を一瞬視界から外してしまった。ツナは生徒Aの背後に回り背中掌握を当てエネルギーを放出した。

「きゃっ!?!」

背後からの1撃に生徒Aは反応することができず、壁に激突してしまう。その瞬間、生徒Aのエネルギー残量が零になった。

「ごめんね・・・」

ツナは生徒Aへの謝罪の言葉を呟き、一夏の援護に向かった。

「くそっ！」

一夏とラウラの戦いは一夏の劣勢だった。確かに一夏は放課後山本との訓練で腕を取り戻しつつあるだろう。しかしいくら剣士として超一流の部類に入る山本と訓練しているとはいえ一夏は3年以上剣を握っていないかった。1日剣を振らなかったら取り戻すのに3日はかかる。3年以上剣を握っていないかった一夏の腕を全盛期までに戻すのに2月という時間はあまりにも短すぎた。しかも、相手は生まれたときから軍人としての訓練を受けていた。地力の差は明らかだった。

現在、一夏は左肩の装甲と右腕の装甲を破壊されていた。

「やはりな。貴様も所詮私とこの『シュバルツェア・レーゲン』の前では有象無象の1つでしかない」

ラウラはワイヤーブレードを使い一夏のことを接近させないようにし、隙を突いては瞬時加速を使い一夏に接近し、プラズマブレードで攻撃するという戦法を取っていた。

実際一夏はラウラに接近することができずにいた。一夏が反撃しようとしてもAICによって動きを封じられてしまう。動きですらラウラに先読みされてしまっていて反撃の糸口がつかめずにいた。

「やはり貴様は教官の足手纏いでしか、面汚しでしかないな。貴様がいなければ教官はモンド・グロッソで2大会連続優勝という偉業を成し遂げることができたのだ。貴様がいたから・・・」

ドカアアアアン！！

ラウラが最後まで言葉を紡ぐことはできなかった。突如ラウラは後ろから何者かに殴り飛ばされていた。この状況でラウラを殴り飛ばせる人間はただ1人しかない。

「っ！貴様！！」

ラウラが睨んだ先には生徒Aを戦闘不能にしたツナがラウラのことを睨みつけていた・・・

「一夏、無事か？」

「ああ、助かった」

ツナはラウラのことを殴り飛ばした後、ラウラから視線を外すことなく一夏の安全を確認した。どうやら一夏は装甲が破壊されてこにいるがそれ以外は問題がないようだ。ただしエネルギーが後どのくらい持つのかはわからないが・・・

「貴様にも借りがあったな。その面汚しを片付けたらすぐに相手をしてやるから邪魔をするな！」

「織斑先生の面汚しが一夏をどうこういう資格はないと思うが？」

「なんだと！？」

「2年前のモンド・グロツソのときに何があったのかは知らないが

お前の話を聞く限りじゃ一夏を助けるために織斑先生が試合を放棄して一夏を助けた・・・そういうことであつてるか？」

「そうだ！そこにいる織斑一夏が誘拐されなければ、存在していなければ教官は2大会連続優勝という偉業を成し遂げられたのだ！そいつさえいなければ「いい加減に黙れよ」つなんだと！？」

「織斑先生は優勝よりも一夏のほうが大切だから試合を放棄してまで一夏のことを助けに行つたんだ。お前の言動はそのときの織斑先生の判断を、意思を、行動を批判するものでしかない。そんな言動しかできないお前が一夏のことを面汚しなんて言う資格はない」

「っ！？貴様――！！」

ツナの言葉に切れたラウラはツナにA I Cを使おうと右掌をツナに向ける。掌を向けられた瞬間、ツナの超直感が警報を鳴らした。ツナはすぐさま瞬時加速を使いラウラの視界から姿を外した。

ラウラはすぐに辺りを見回したがツナは見当たらなかった。ツナはラウラの真上にいた。ラウラの視界から外れた後、もう1度瞬時加速を使いラウラの真上に移動していたのだ。ツナは移動してすぐエネルギー弾を数発ラウラの周りに放つ。地面に直撃し大量の煙を生させラウラから自分たちの姿を見えなくする。

「ちい！」

ラウラは上空に飛ぶことで煙から脱出しエネルギー弾が飛んできた方向に掌を向けるがそこにはツナの姿はなかった。ツナは今の爆発を利用し一夏と合流していた。

「大丈夫か？」

「悪い。助かった」

「エネルギーは後どのくらい残ってる？」

「零落白夜は後1回か2回しか使えないな。使えたとしても動きを止められちまう」

「おそらくあいつは止める対象に右掌を向けて集中していないとその能力が使えないのかもしれない・・・」

「本当か？」

一夏の言葉にツナは黙って頷いた。ツナは右掌を向けられた瞬間やばい感じがしたし、もし集中していなくても発動できたなら大量の煙がラウラを包み込んだときでも能力を発動できたはずだからである。自分の姿が隠れている状況のほうが相手にとっても不利なはずなのだから・・・

「俺が囷になる」

「わかった」

話が終わったところでラウラが2人に向かってワイヤーブレードを放ってきた。2人はそれを左右に分かれることで回避する。ラウラは一夏はいつでも倒せると思ったのかツナに標的を絞ってきた。

瞬時加速でツナに接近しプラズマブレードの突きを放つ。しかし、

そんな単調な攻撃がツナに届くはずがない。ツナは突きを放った手の手首を掴むと自分のほうにラウラを引っ張った。それによりラウラの懷に潜り込むことに成功したツナはラウラの腹に膝蹴りを放った。

「がつ！」

ツナはそこから前のめりになったラウラの背中に肘を埋め込み、ラウラが地面に激突する前にラウラの左方向からまわし蹴りを放ちラウラを吹っ飛ばした。

「くっ！！！」

ラウラは数メートル先まで吹っ飛ばされるがすぐに体勢を立て直した。そんなラウラの目の前には右掌にエネルギーを収束させているツナの姿があった。ラウラが慌てて回避行動を取るがツナが技を放つほうが一瞬速かった。

「超高速×カノン・超連！！！」

ツナの右掌からマシンガンのごとく大量のエネルギー弾がラウラめがけて放たれた。ラウラは辛うじてエネルギー弾の雨から逃れることができたが避けられたツナに落胆の表情はなかった。

「忘れているのか？お前は俺たち2人を相手にしていることを・・・」

「っ！？」

ラウラが驚愕の表情を浮かべたとき、一夏はラウラの目と鼻の先に

いた。先ほどのXカノンは一夏の方角にラウラを誘導するための罠だったのだ。ラウラが一夏を見たときには零落白夜を纏った一夏がラウラのことを両断していた。

「がはっ！」

零落白夜の1撃をまともに喰らってしまったラウラはそのまま壁に激突した。ツナの攻撃と零落白夜による一撃必殺の攻撃によりラウラのエネルギー残量は200を下回っていた。

こんな……こんなところで負けるのか、私は………！

想像以上の相手だった。そして信じられないほどの連携。私の判断ミスだ。でも………。

（私は……負けられない！負けるわけにはいかない………！）

——願うか………？汝、より強い力を欲するか………？

（力があるのなら、それを得られるのなら、こんな空っぽな私などくれてやる。だから……よこせ、力を……比類なき最強を！）

Damage Level………D.
Mind condition………Uplift.
Certification………Clear.

《Valkyrie Trase System》・・・bo
ot・

「あああああああー!」

壁に激突したラウラが突如叫びだした。次の瞬間、ラウラから黒い電流が放たれ、ツナと一夏は後方に吹っ飛ばされた。

「くっ!」

「なっ!？」

今の衝撃により一夏はISが強制解除されてしまった。ツナのほうもXカノンと今の電流の衝撃でエネルギーが削られてしまっていた。

「一体何が・・・」

(何かやばい感じがする・・・)

ツナは超直感によりいち早く現状がやばい状況にあることを察していた。

2人がラウラのほうを見ると黒い闇のようなものがラウラのことを包み込んでいた。その闇はシュバルツェア・レーゲンを別のものへと変えていった。本来ISは部分的にしか装甲が付いていない。実際先ほどのシュバルツェア・レーゲンもそうだった。しかし、その闇が変動を終えた姿はクラス代表トーナメント戦でアリーナを襲撃してきたISと酷似していた。体中を全身装甲で覆われていてもは

や原形をとどめていなかった。

そこにいたのはもはやラウラとシュバルツェア・レーゲンでは無く別の何かだった。

第16話

一夏はラウラであつたそれを見た瞬間驚きを隠せなかった。通常ISが形状を変えるのは『初期操縦者適応』と『形態移行』の2つだけだ。パッケージ装備による多少の部分変化はあつても基礎の形状が変化することはまずない。

だが、ISの知識に乏しい一夏がそれを知るはずもない。一夏が驚いているのには別の理由があつた。それはラウラであつた黒いISの持っていた武器にあつた。ラウラの装備はレールカノン、ワイヤーブレード、プラズマブレード、そしてAICのはずである。

しかし、黒いISが手に持っていたのは刀だった。そしてその刀を一夏が見間違ふはずがない。なぜならその刀は・・・

「雪片・・・!」

自分の姉である千冬が使っていた刀に酷似していた。似ているというレベルではない。もはや複写である。

「・・・さけるなよ」

一夏には何故黒いISが雪片を持っているのか、そんなことはどうでもよかった。ただこの刀は自分のものだといわんばかりに、当たり前のように雪片を持っている黒いISが気に入らなかった。

「ふざけるなーーーーー!」

一夏は無謀にも生身の状態で黒いISに突っ込んでいった。黒いISはそれを迎え撃つ。居合いに見立てた中腰の構え、それは嘗て千冬が自分に最初に教えてくれた『真剣』の技の構えだった。そのことがさらに一夏を激高させる。

黒いISが必殺の一閃が放たれた。しかし、それが一夏に届くことはなかった。ツナが一夏と黒いISの間に割って入ったのだ。ツナは左手で一夏のことを押さえ、黒いISのはなった一閃を右手で防ぐと黒いISの首目掛けて回し蹴りを放った。黒いISはとつさに左手でその蹴りを防いだ。ツナはその隙に一夏を抱えて後方に退避する。

「何をしてるんだ!？」

「離せ!ふざけやがって!あいつをぶっ飛ばしてやる!！」

一夏は初めて千冬に技を教わったときのことを思い出していた。

『いいか、一夏。刀は振るうものだ。振られるようでは剣術とは言わない』

ずしりとした鋼鉄のそれは、初めて手にした俺を試すかのように容赦ない重さを持っていた。手にしているだけでも汗が滲み、構えようにもその重さゆえに刀が持ち上がらない。

『重いだろう。それが人の命を絶つ武器の重みだ』

冷たく、鈍色に煌めく、その刀。

人を切るために生まれ、作られ、鍛えられた、その存在。

『この重さを振るうこと。それがどういう意味を持つのか考える。それが強さということだ』

そういった千冬は厳しく、しかしどこか優しげな眼差しをしていた。何か眩しいものを見るかのように、いつもとは違う表情だった。

そのときから一夏はそんな千冬の力になりたくて力を求めた。

それなのに目の前の存在はそれを否定すのかのように立ちはだかつていた。

「離せよツナ！邪魔をするならお前も「俺もどうする？」っ！？」

一夏が言い終わる前に怒りが滲んだツナの声がそれを遮った。

「邪魔をするなら俺をどうする？殺すか？倒してでもあいつと戦うか？それではあいつのやっていることと何も変わらないぞ」

ツナの言葉でようやく一夏は落ち着きを取り戻した。

「すまない・・・」

「気にするな。それよりあいつの型に見覚えがあるのか？」

「あいつの型は千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだ。それを・・・」

黒いISはアリーナの中央から微動だにしない。武器が攻撃に反応

して行動する自動プログラムのようなものなんだろう。さっきは一夏が激高して向かっていったため攻撃とみなされたのだろう。

「あいつは俺が倒す」

「エネルギーが残っていない状況でどうするつもりだ？」

「そ、それは・・・」

現在一夏は白式が解除されてしまっている。本史ならシャルルと組んでいるのでコア・バイパスでエネルギーの受け渡しができたがツナにはそれができない。大空の炎を使えば大空の炎の特性である『調和』によりエネルギーをツナと同じ招待にできただろうがいま死ぬ気の炎を使うわけにはいかない。

「それに、あいつを止めるのは俺たちの仕事じゃない」

「どついう・・・」

ドカアアアアアアアアアアン！！

ツナの言葉の意味が解らず一夏が聞き返そうとしたとき、背後で何かが破壊されたような音がした。一夏が振り返ってみると真紅のISを纏った獄寺が険しい表情で立っていた。

観客席にいた獄寺は黒いISが現れたとき苛立ちを隠せなかった。

嘗ての自分と酷似しすぎている・・・

獄寺はツナと会う前の自分を思い出していた。

あのときの自分は一人で生きていけると思っていた。母親が謀殺されたと思い込んでいて、自分にそのことを黙っていた城の連中が信じられなくて、そのことが原因で年上の連中が信用できなくなっていた。

当時は1人前のマフィアになるため力を追い求めた。まだ8歳だった自分がマフィアの世界で生きていくためには力を身につけるしか方法はなかった。力こそ全て・・・それが当たり前になっていた。そんなときに獄寺はツナとあった。

第1印象は何でこんなやつがボンゴレ10代目候補なんだという印象だった。勉強も運動も自分のほうが遙かにできる。周囲からもダメツナと馬鹿にされている。そんな奴がボンゴレ10代目候補なんて認めたくなかった。

だから殺そうとした。ツナを呼び出してダイナマイトで吹っ飛ばそうとした。

そんな獄寺をツナは助けてくれた。

自分のダイナマイトで自滅しそうになったところを、自分を殺そうとした相手にもかかわらず自分のことを助けてくれた。自分の命を救ってくれた。

そんなツナに獄寺は惹かれたのだ。自分の身を省みずに助けてくれたツナに獄寺は敵わないと感じた。だからこそ、獄寺はツナを自分の全てをかけて守ろうと思ったのだ。

ツナに会わなかったら獄寺は昔のままだった。今のラウラと変わらない存在になっていただろう。

だからこそ獄寺は黒いISへと変貌してしまったラウラを見て激怒していた。ツナと出会う前の自分を見せられているようで、ツナと合わなかったときの自分を見せ付けられているようでいてもたってもいられなくなっていた。

「隼人・・・？」

隣で見ていたシャルルが心配そうに獄寺のことを見ていた。

「ふざけるなよ・・・」

「どうしたの隼人？」

「あいつはどこまで俺を苛立たせれば気が済む！？」

「隼人！？」

突然怒鳴った獄寺にシャルルは驚きを隠せない。

「あいつはどこまで昔の俺を連想させれば気が済むんだ！！あいつだけは俺がぶん殴らねえと気が済まなねえ！！」

「で、でも・・・」

シャルルの不安は最もだろう。アリーナにはバリアシールドが張られているため、観客席から黒いISの元へは行くことはできない。

「行くんだろ？」

獄寺とシャルルが振り向くとピオツジャを纏った山本の姿があった。

「俺がシールドを破ってやるよ。破った部分は俺とクロームが死守すればいい」

「山本・・・」

「行ってこいよ。決着つけて来い」

「当たり前だ、野球馬鹿！」

獄寺は山本に怒鳴るが本心は山本の心遣いに感謝している。山本もそのことがわかってるので何もいわずにアリーナを覆うバリアシールドの前に立った。

「準備は？」

「できてるに決まってんだろ！」

「じゃあ、いくぜ・・・」

山本は右手に蒼燕を右手に持ち抜刀の構えを取る。自分の父親が編み出した、自分の編み出した型以外では最もしつくりくる型。

時雨蒼燕流攻式八の型 篠突く雨

ドカアアアアアアアアン!!

山本の放った一撃はアリーナのバリアーを一刀両断した。その部分から獄寺はアリーナに躍り出た。

「隼人!!」

「後は俺がやる。下がってろ」

その言葉で一夏はツナの言葉の続きを悟った。ツナは獄寺に任せろべきだと言っているのだ。ISの纏うことができない一夏はその言葉に従うしかできない。

「10代目、後は俺が・・・」

「任せた」

ツナは獄寺に全てを託し、一夏を抱えて山本が破ったところに退避していった。

「さて・・・」

獄寺は黒いISと向き合う形となった。

「悪いな。過去の俺との決着をつけさせてもらっぜ」

獄寺は両肩にライフルを、両手には拳銃を呼び出した。その瞬間獄寺の体を真紅の光が包み込んだ。獄寺のワンオフアビリティである疾風を発動したのだ。

「俺の使命を教えてやる」

獄寺は黒いISが動き出す前に一斉射撃を行った。黒いISはその場から動くことすらできずに爆発の中に飲まれていく。

両肩のライフルは直接ラウラを狙わずラウラの左右の空間を狙って打っていく。しかし、当たらない筈のビームが突然曲がって黒いISに直撃していく。セシリアにはできない偏向射撃を獄寺は扱うことができる。

両肩のライフルで偏向射撃をすると同時に両手の二丁拳銃による通常射撃による時間差攻撃である。黒いISは避けることも動くこともできずにビームの嵐に吞まれていく。

獄寺が射撃を止めると黒いISは満身創痍の状態だった。黒い装甲のあちこちにひびが入っていた。手に持っている雪片も折れていてもはや使い物にならない状態であった。それでも黒いISはよろめきながら獄寺のほうに向かってくる。

獄寺は接近戦用の2丁拳銃を呼び出し黒いISに突っ込んでいく。

「常に攻撃の核となり、休むことのない怒涛の嵐となること・・・それが俺の使命だ。覚えとけ」

そう言いながら獄寺は右手の拳銃で黒いISの頭を穿つ。

「ぎ、ぎ……ガ……」

ジジッと黒い電流が走り獄寺が攻撃した部位から順に黒いISが破壊されていく。そして、気を失うまでの一瞬の間である間に獄寺とラウラの目が合う。眼帯が外れあらわとなった金色の左目と。

その目はなんだか酷く弱っている、捨てられた子犬のような眼差しに見えた。助けてほしいといっている様に獄寺には見えた。

「ま、殴るのは勘弁してやるよ」

その目を見て、ツナと会っていなければ自分もこんな目をしていたかもしれない……そう思いながらラウラを抱えて保健室に向かった。

「う、あ……」

簿やつとした光が天上から降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「気がついたか」

その声には聞き覚えがあるというレベルではなかった。自らが敬愛

してやまない教官こと織斑千冬がそこにいた。

「私……は……」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けんだろっな」

「何が起きたんですか……？」

「ふう……。一応重要案件である上に機密事項なんだがな……」

しかし、そういつて引き下がる相手ではないことを千冬はよく知っている。千冬はここだけの話であることを沈黙で伝えるとゆっくりと言葉を紡いだ。

「VTシステムは知っているな？」

「はい……。正式名称ヴァルキリー・トレース・システム……。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステム……。しかし、あれは……」

「そう、IS条約で現在どの国・組織・企業でも研究・開発・使用の全てが禁止されている。それがお前のISに積まれていた」

「……」

「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そしてなにより操縦者の意思……。いや、願望か。それらがそろつと発動するようになっていたらしい。現在学園がドイツ軍に問

い合わせている。近いうちに委員会が強制捜査を行うだろう」

千冬の言葉を聞きながらラウラはぎゅうっとシーツを握り締めた。

「私が・・・望んだからですね」

あなたになることを。

その言葉は口にしなかったが千冬には伝わった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はい！」

いきなり名前を呼ばれラウラは驚きながら千冬のことを見上げた。

「お前は誰だ？」

「わ、私は・・・。私・・・は・・・」

その言葉の続きが出てこない。自分がラウラであると、どうしても言えなかった。

「誰でもないならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるといい。時間は山のようにある。3年間はこの学園に在籍しなければならいからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ・・・」

千冬の言葉が意外だったラウラは何を言うべきか解らない。わからないまま、ただぼかんと口を開けていた。

「それに、お前に話のある奴がいるようだしな」

「えっ・・・？」

誰だか見当のつかないラウラだったが突然保健室のドアが開いた。そこには獄寺がいた。

「まあ、後は２人でゆっくり話すといい」

そう言つて千冬は保健室から去つていった。

「余計な気を使いやがつて・・・」

「あ、あの・・・」

千冬のいらない心遣いに毒づく獄寺にラウラは恐る恐る声をかける。

「あ、無事みてえだな」

「あ、ああ・・・」

「どうした？」

「何故お前はそんなに強い・・・？」

「強くねえよ」

自分は強くない・・・そう言った獄寺をラウラは驚愕の表情で見上げた。

「あそこまでの強さを持つていながらか・・・？」

「ああ、もし俺が強いつて言っんならそれは10代目がいるからだ」

「沢田のことか・・・？」

「ああ、俺はあの方のことを俺の全てをかけて守る・・・そう誓っているからだ。あの方を守りたいと思うから俺は強くなきゃいけない。それだけだ」

「・・・私には・・・できそうにないな・・・」

「何でだ？」

「私にはそう思える人間がない。教官はそういうことを望まないし、沢田にしろ、私はあいつに牙を向けた身だぞ。そんな私が沢田にそんなことを思う資格はないし、それどころかそばにいる資格すらない」

「馬鹿かてめえは」

「なっ！？馬鹿とは何だ！それが当たり前だろ！？」

ラウラは何故獄寺が自分のことを馬鹿にするのかわからなかった。自分はツナに牙を向けた身。そんな自分が沢田を守りたいと思うのはおかしい・・・その考えは当たり前のことだとラウラは思った。

「それが馬鹿だってんだ。10代目を殺そうとした俺があの方の右腕としてそう思っただけいられた。牙に向けた程度であの方がそんな風に思うわけねえだろ」

獄寺の言葉を聞いた瞬間、ラウラの思考は停止した。獄寺は今なんと言った……？

「お前が……沢田を殺そうとした……？」

「ああ、中1のとき、まだ何の力も持っていない10代目を俺は殺そうとした。理由はまあいろいろあってな……今思えば馬鹿な話だな」

「何故沢田はそんな貴様を友人だと思っているんだ……？」

「あの方は人の本質を見てくださる。そして、たとえ自分を殺そうとした相手でもあの方は傷つくことを嫌う。だから10代目は殺そうとした俺を身を挺して守って下さったし、殺そうとした俺に対してなんの仕打ちもなかった。そして俺のことを友人だと、仲間だと言って下さる。そんな10代目だからこそ俺は全てをかけて守りたいと思うんだ」

そう語る獄寺は自分の理想を語る子供のような目をしているのと共に絶対に譲れないと感じさせる強い意思が宿っていた。そんな獄寺を見てラウラは自分が獄寺に惹かれていくのを感じた。そんな獄寺を自分は守りたいと思い始めているのを感じていた。

「俺はもう行くぜ。早く直せよ」

獄寺はラウラの返事を待たずに保健室から去っていった。そんな獄寺をラウラは熱を持った視線で見つめていた。

獄寺がラウラの見舞いに行っている間、ツナとクローム、シャルルは宿泊届けを提出するために職員室にいた。理由はもちろんフランスに行くためだ。シャルルのために政府とデュノア社の社長に話をするため余裕を持って今夜に出発する予定である。今日が木曜日のため授業を1日欠席すればなんとかなる。

3人は外出届を山田先生に提出した。表向きの理由は、シャルルはデュノア社の開発した新装備のテストのため、ツナとクロームはイタリア政府からの呼び出しがあったためという理由だ。もちろんこれらの理由は嘘である。

「はい、3人とも確かに受理しました。気をつけて行ってきてくださいね」

「……はい」

ちなみに一夏は本史のように箒に買い物ぐらい付き合うぞと言って、箒から暴力を受けそうになったところを山本が火に油を注ぎ、さらに怒った箒に2人で一緒に追いかけていた。

トーナメントも先ほどの騒ぎで中止となっていた。そのため、学園中で女子生徒の嘆き声があちこちで聞こえてきたとか何とか……

「隼人と武は一緒に行かないの？」

「2人には一夏と一緒にいて貰わないといけないから」

「どうして？」

「その理由は後でちゃんと説明するよ。頼んでおいたデユノア社の調査結果も出たみたいだから」

「そのデータは？」

「フランスに着いたら俺の仲間が持ってきてくれるはずだよ。それより準備はできてる？」

「うん。荷物は少ないほうだから」

「クロームは？」

「・・・私も大丈夫」

「それじゃあ、クロームは荷物を持って校門前で待ってて」

「・・・わかった」

そう言ってクロームは荷物を取りに部屋に戻っていった。

「俺たちも行こうか」

「うん」

ツナたちも自分の荷物を取りに部屋に戻っていった。

10分後、3人は校門前に集合していた。向こうには長居する気はないため3人ともショルダーバックを1つ肩から提げているだけだった。

「空港まではどうやって行くの？」

「迎えを頼んだからそろそろ来ると思うよ」

ツナがそう言ったとき、1台のリムジンが3人の前に止まった。シャルルが何事かと思っていると運転席から1人の男性が降りてきた。

「お待たせしました、10代目」

「すみません、急に頼んで」

「えっ!？」

2人のやり取りにシャルルは驚愕した。まさか、ツナの頼んだ送迎の車がリムジンだとは思わなかったのだろう。

「すでに空港には飛行機を待機させています。急ぎましょう」

「わかりました。行こう、2人とも」

「う、うん」

「わかった」

そう言つて3人はリムジンに乗り込み、空港へと向かつていった。

その後もシャルルは空港の審査が顔パスだったり専用の飛行機があったりなど驚きが止まらなかった。

こうして3人を乗せた飛行機はフランスへと飛び立っていった。

第16話（後書き）

最後がグダグダになってしまいました（汗）

あと、感想を下さった皆様ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2217x/>

ISとマフィアと護衛と

2011年11月18日05時28分発行